
恵みを巡る
ものがたり
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止









# 恵みを巡るものがたり

栗山 陸 [作]

クロマ [画]

ワリュウドウ

目次

# 恵みを巡るものがたり

## 湯けむりを巡るものがたり

# 恵みを巡るものがたり



# 序　灰色の夢

一つの影があった。

フードを目深（まぶか）に被り、外套（がいとう）を纏（まと）った男性のような人影が、茫洋（ぼうよう）とした空間を進んでいく。

　非現実的な空間だった。あるいは非実在的と言うべきかもしれない。いくつもの色の粒が乱れ飛び、入り混じって、くすんだ極彩色の砂嵐となる。時折、吹き寄せられた色の粒が何かの像を結びかけるが、それが意味を帯びるまでに掻き消え、塵となって散じていく。

　前後天地の区別もつかない、無秩序で不毛な空間を、その影はただ粛々と進んでいる。

　しかしある時、何かがその目を引いた。

「おや」

　影の足を止めさせたのは、所在なげに立ち尽くすひとりの子供の姿だった。そこだけが、吹き荒ぶ色のなかでぽっかりと黒く空いている。

「このようなところで、どなたかにお会いするとは思いも寄りませんでした」

　影は慇懃（いんぎん）な口調で語りかけながら、その子供に近付く。子供は驚いた様子だったが、やがておずおずと口を開いた。

「あの……ここは、どこですか？　あ……す、すみません、お邪魔ですよね。ごめんなさい」

「いいえ、とんでもございません。私（わたくし）自身も一介の旅人、あちらこちらへ放浪する身でございますので、どうかお気になさいませぬよう」

　その柔らかく、穏やかな口調に安心したのか、子供はほんの少し肩を撫で下ろす。そして影は咳払いを一つ挟み、子供の質問に答え始めた。

「――ここがどこか、でございましたね。さて、なんと申し上げるべきか。言うなればいくつもの世界の狭間、世界になり損なった切れ端が集う場所……そう、不正確な喩（たと）えではありますが、『夢の世界』と呼ぶこともできるでしょうね。あるいは、『世界の夢』……とも」

「夢……ああ、やっぱり」

　と、その子供は納得したように呟く。

「ぼく、家で寝てたはずなんです。なのに突然こんなところにいて、びっくりして……えっと、じゃあ、ぼくは夢を見ているんですか？」

　その質問に、影は適切な答えを探すかのように一拍置いてから、徐(おもむろ)に語り出す。

「そう、ですね。そう考えていただいても差し支えないでしょう。なにしろここにあるものは何一つとして確固たる形を成さず、因果の鎖もここでは力を持ちません。いわば世界の間隙、抜け道や裏道の類。誰しもが来られるような場所ではございません。だからこそ――」

　話すうちについついと饒舌(じょうぜつ)になりつつあった影は、戸惑う子供の姿に気付いて苦笑ぎみに一度言葉を切る。

「――おっと、失敬。どうも私には、多弁を弄しすぎる悪癖がございまして。このような場所でお会いできたことに、些(いささ)か興奮しすぎていたのかもしれません」

「あ……その、それは、全然大丈夫なんです。ただ、これからどうすればいいのかな、って」

　そのまま俯(うつむ)いてしまった子供に、影はただ寄り添うように穏やかな言葉を続ける。

「見も知らぬ場所にいらっしゃって、ご不安を抱かれるのは無理なき事。……差し出がましいことを申し上げるようですが、もしもあなた様さえ宜しければ、僭越(せんえつ)ながらこの私がご案内を仰せつかりましょうか？　元の世界にお戻りになりたければ、今すぐにでもお連れできますし、なにかお気に召すものをお目に掛けられれば、お心を和らげることも叶いましょう」

　影はそう言って恭(うやうや)しく一礼するが、子供はぼんやりと悲しげな表情を向けるばかりだった。

「戻る……そっか、戻らないといけないんです、よね。これはただの、夢なんだし」

　子供は、そう呟いて力なく項垂(うなだ)れる。何かを諦めたような顔で、深くため息を吐いた。

「このまま目が覚めて、この夢も終わって……また、いつものように毎日が始まるんですよね。――そろそろ、朝なのかな」

　小さく言葉を漏らすうちに、子供の姿は徐々に薄らいでいきつつあるようだった。半分ほど透き通った自分の手先を眺めて、子供は寂しげに笑う。だが、影は頭（かぶり）を振ってそれに応じた。

「もう少しだけ、この私めにあなた様のお話をお聞かせ願えませんか。ここでお会いしたのも何かの縁、是非ともあなた様のお力になりたいのです」

　影は努めて穏やかに、子供が向ける不安げな眼差しを受け止めつつ、何事でもなさそうに言葉を紡ぐ。胡散臭いと言ってしまえばいかにも怪しげな事ばかりなのだが、この子供にはどうやら狙い通りの効果を発揮しているようだった。

「いくつか愚問をお許しください。いえなに、本当に簡単なことです。……あなた様から見て、この場所はどのように感じられますか？」

「ここ？　灰色の、なにもない場所。ぼんやりしてて、もやもやしてて、たまに……キラッと光ったり、何かが動いて見えたりします」

　影は、その答えを肯定も否定もせず、ただ鷹揚（おうよう）に頷いた。少しの間、沈黙だけが漂う。

「もしも、どこへでも行けるとしたら、ご希望の場所などはございますか？」

　再びの質問に、子供はしばし視線を彷徨（さまよ）わせていたが、その目に光が灯ることもなく、ただ虚ろに遠くを眺めるばかりだった。

「分かりません。おか……他の人に迷惑を掛けないところなら、どこだっていいんです」

　答える間にも、子供の姿はどんどんと薄れていく。しかし影は穏やかな口調を崩すことなく、もう一度口を開いた。

「――最後にもう一つだけ、お聞かせください。私には、あなた様は子供の姿をした人影のように見えております。あなた様の目に、私の姿はどのように映っていますか？」

そう言って影は、子供に向かってフードを少しずらす。その中を覗いた子供は驚きの表情を浮かべたが、ややあって控えめに口を開く。

「コートを着た、……カラスさん？」

　その答えを聞き、影は満足げに笑った。

「なるほど、よく分かりました。あなた様にはやはり、特別ななにかがおありのようですね。いずれ時が来れば、必ずや望ましい流れを得られることでしょう」

「……よく分からないけど、そうだったら嬉しいな。夢の中くらい、いろんなところに行ってみたい」

　子供の下半身は既に色の洪水に紛れて見えなくなり、胸から上の質感も希薄になりつつあった。その、消えかけた手を優しく取って、影はあくまで穏やかに話しかける。

「ご心配には及びません。あなた様ならばどこへでも行くことができます。そのためのチカラをお持ちなのですから」

　その言葉が嬉しかったのか、子供は無邪気な笑みを影へと向けた。

「それじゃあ、どこかでまた会えるかな？」

「ええ。それがお望みであれば、いつか必ずやお目に掛かる日もございましょう。それまではどうか、ご健勝で」

　影が握っていたはずの手は既になく、子供の頭部だけがかろうじて存在を保っている。その目が、ゆっくり閉じられていった。

「うん、……おやすみなさい」

　限界まで薄らいだ子供の唇は、その言葉を最後に掻き消え、後にはカラスと呼ばれた影だけが残った。

「この嵐の中、目を塞がれることもなく世界を航（わた）るとは。誠に得難（えがた）い資質に巡り会えました。まさしく望外の僥倖（ぎょうこう）――と言うべきでしょうか。寄り道もしてみるものです」

　感心しきりの様子で独りごちつつ、その影は外套を纏（まと）い直し、身支度を整える。

　フードの下に見える闇は形なく揺蕩（たゆた）うのみでなにか特定の形には見えない。しかし、なぜかそれが微笑を浮かべていることは理解できる。

「この調子で、探し物も順調に進めば有難いのですが。他の世界の管理者に協力を求めるならこちらも相応の対価が必要ですし……そうだ、先程の方についてお教えするというのも、良いかもしれません。ええと、この先は確か――」

　影は、外套の隙間に手を入れ、小型の羅針盤か懐中時計のようなものを取り出した。しばしそれを眺めて、得心したように頷く。

「巨竜の世界、ですね」

　そして影は再び進み始める。巻き起こる色の砂塵をものともせず、ただひとり、世界の狭間の更なる深奥へと潜っていくのだった。

# 一　青紫色の手

真夏の、寝苦しい夜だった。
冷房も扇風機もとっくの前に切れたけれど、付け直すことはできない。そんなことをしたら明日どれくらい怒られるか分からないから。
薄い布団の中で、ぼくはうまく寝付けなくてうんうんと唸っている。せめてもの抵抗に窓を開けてはいるけれど、たまにそよいでくるのは生温い風ばかり。
なんとなく枕元の時計に目をやる。もうすぐ真夜中だ。こんな時間まで起きているなんて、初めてかもしれない。大晦日(おおみそか)にだって早く寝なさいって言われるから。
そう、あとほんのちょっとで日付が変わる。八月三十一日、木曜。夏休み最後の日。そして、ぼくの十一歳の誕生日。
毎年、この日が来るのが嫌だった。夏休みが終わるからじゃない。家にいても学校にいても、たいした違いはなかった。というか、学校なら先生の言う通りにしていれば怒られないから、まだマシだ。クラスメイトには馴染めてなくて時々仲間外れにされたりはするけど、積極的にいじめられているってわけでもないから、全然平気だった。
誕生日が嫌なのは、自分のことが好きじゃないから。そして、あのひとに鬱陶(うっとう)しそうな目で見られるからだ。今まで誰かに誕生日を祝ってもらったことなんて、あったっけ？　思い出をいくら探してみても見つからない。
そんなことをずっとうだうだ考えてしまって、結局眠気がくる様子もない。せめて蒸し暑さを紛らわすものを探して、うろうろと泳いだ視線に、時計の文字盤がぶつかる。時間もほとんど進んでいない。でも、遂に日付が変わるようだ。
あと十秒。あと五秒。三、二、一、――

——えますか……

「……え？」

誰かの声が聞こえた気がした。

爽やかで、よく通る声だった。男の人とも、女の人とも言えない声色。でも、聞こえたのはほんの一瞬で、そのあといくら耳を澄ましても、何も聞こえはしなかった。

近所の家でドラマでも見てるんだろうか？　でも、それだったら、今も聞こえてたって良いはずだ。それなのに今はもう何も聞こえない。……そうだ、おかしいな。いつもなら、開いた窓からカエルの大合唱が聞こえるはずなのに。それさえ止（や）んで、不気味なほどにしんと静まり返っている。自分の呼吸の音と、どきどきする胸の鼓動だけが、やけに大きく響いていた。

（それに、さっきの声……どこか遠くじゃなくて、耳元で聞こえたような気がする）

分からない。何も、分からなかった。こんなこと、本当にあり得るんだろうか？　混乱して次第に焦り始めた頭の中に、ふと考えが閃（ひらめ）く。

（これ、ひょっとして夢？）

周りに視線を向けてみて確信する。どうして気付かなかったんだろう。いつの間にかぼくは、自分の部屋じゃない、ぼんやりした灰色の空間にいた。……あれ？　そうだ、すっかり忘れていたけれど、前にもこんな夢を見たことがある。

その時は確か、夢の中で誰かに出会ったんだ。でもそれが誰だったかは、全然思い出せない。そもそも、そんな夢を見たのはいつだったっけ。昨夜（ゆうべ）？　先月？　それとも、去年かな？

——。届いて、いますか……

「！」

こんどははっきりと、耳元でそう聞こえた。振り返って、もう一度周りを見渡す。薄暗い、灰色一色だった空間が、次第に明るさを増していく。

光る何かが、その場に現れようとしていた。それはやがて朧気な人型になって、ぼくの前にゆっくりと近付いてくる。

「……認証。ああ、遂に、声が届いたのですね。来ていただけて、本当に良かった……」

それはとても涼しげで美しい声だったけど、ひどく疲れているようだった。まるで何もない砂漠をずっと歩き続けていたような、くたびれ果てた声。そして、その末にやっとオアシスを見つけた時みたいな、心の底から安心した声。

その人型はぼくの目の前まで来ると、輝きを抑え、跪いて頭を下げるような姿勢になった。

「深謝……ご来訪を心よりお待ちしていました。どうか、おチカラをお貸しいただけませんか。我らの世界に来ていただきたいのです」

「ちょ、ちょっと待ってよ。えっと……」

ぼくがまだ何も言えないでいるうちに、話がどんどん進みそうだったので、慌てて口を挟む。近くでよく眺めてみると、それが模っている姿はすらっと背が高く、飾り気のない布地をロープにして纏っているようにみえた。

むかし、何かの絵本で見たことがあるような。それはまるで……

「……天使？」

「回答未定義。この身は、ひとつの世界を守り、維持するもの。それ以外の権能は有しません。呼称もありませんので、好きにお呼びください」

「はあ……」

全く事情が呑み込めないままのぼくに、その天使（そう呼ぶことにした）はゆっくりと話をしてくれた。かれの世界がいま滅びかけているということ。世界を動かすチカラが途絶えて、このままでは無に帰してしまう、とかなんとか。

……話はしてくれたけど、結局よく分からない。

「それでどうして、ぼく……なんですか？」

「回答。あなたには類(たぐい)まれなるチカラがあると、とある旅人から聞いたのです」

「旅人、って、もしかして」

　心のどこかに引っ掛かって隠れていた記憶が、そのとき不意に戻ってきた。そう、いつか見た夢で出会ったのは、黒いカラスのような印象のひとだった。

　それを伝えると、天使は優しく微笑んで、

「肯定。その通りです」と答える。

「我らの世界へと来たその旅人が、万策尽きたこの身に、あなたのことを教えてくれたのです。あなたなら、停滞し隔絶した我らの世界を救うことができる、と。銓衡(せんこう)結果――まさしくその言葉通りでした。この目で見て、確信しました」

　熱弁するその姿は、なんとなく新興宗教のひとみたいだ、とぼくは思った。天使っぽいから、本当に宗教の関係者なのかも。ぼくなんかの夢に来るなんて、いろいろ大変そうだな。でも……

「……でも、ぼくには何もできないよ」

　暗くて重いあのひとの声が、心の中で響く。あんたはなにもできないんだから。

「非同意。今ここで、こうして言葉を交わしていることこそ、あなたのチカラを証しています。夢を航(わた)り、夢を叶えるためのチカラ……推論、きっと我らの世界にて、それは恵みをもたらす偉大な筋肉ともなるでしょう」

「えっ？　筋肉？」

　ついつい問い返してしまったけれど、天使はそれには答えなかった。

「再提示。あなたが来てくださるだけで、我らの世界に未来が生まれます。さもなくば我らは、もはや滅びるのみ。……この身に残された猶予も長くはありません。あなたが最後の希望なのです。どうか――」

「――よく、分からないままだけど。そもそもぼくなんかに、できることがあるのかな。一体どうすればいいの？」

天使の言う世界に行くのは良いけど、夏休みは明日で終わりだし、二学期が始まったらズル休みなんかできない。こてんぱんに叱られるのは目に見えている。……正直、それは嫌だ。

そのことを伝えると、天使は真剣な顔で頷く。

「回答。その解決のために、チカラが必要なのです。あなたが目を閉じ、眠りに落ちて、次にその目が覚めるまで――あなたの魂であれば、我らの世界にお招きすることができるのです」

「魂？　寝ている間、だけ……？」

「肯定。あなたのカラダは寝床から出ることもありません。ですから誰かに気付かれる心配も不要です。ご懸念はこれで解消されます」

天使はそう言って太鼓判を押してくれるけど、果たして本当に、そんなチカラがぼくにあるのだろうか。信じられない気持ちはまだ強い。

でも、夢の中でどこかへ行けるんだとしたら。それは、ずっとやりたいと思っていたことだ。心の奥で長い間疼いていた、ぼくの願いだ。

「それなら……行くよ。良ければ、今からでも」

だからぼくは、天使を信じてみることにした。

「おお……おお！　万謝、この身の全てに懸けて、あなたに御礼申し上げます。それでは……啓行開始。どうぞ、夢に身を委ねてください」

天使がぼくの頭に手をかざす。だんだん、その声がぼやけてきた。顔もだ。深い眠気がぼくを呑み込んでいって――

……ぼくは、まだ夢を見ているんだろうか？

暗くて何も見えない。こういうの、なんて言うんだっけ？　いつか辞書で見た覚えがあるんだけど。――混沌。たぶん、そうだ。何もかもがぐちゃぐちゃになって、ちゃんとしたカタチになっていない、そんな感じ。

少し不安になってきた。ここが天使の言っていた世界なのかな？　もしそうなら、これってもうとっくに滅んでしまってるんじゃないか？

まさか、あの天使に騙されてしまった……？

でも、何故かは知らないけど、ぼくは天使の言葉を素直に信じられると、妙に確信していた。さっき「世界を救ってほしい」と言われたことが、温かくて強いチカラに変わっていく。……根拠もないのに、そんな気がしていた。
(世界を救うだなんて、絶対カッコいいよね)
最初は、ほんのりとそう思っただけだった。カッコいい、けれど、ぼくなんかにできるかは分からない。できたらいいな、とは思う。ぼくにそんなチカラがあればいいな、と。

チカラ、ってなんだろう？　天使が言ってたことを思い出す。ええっと、確か、夢を叶える、恵みをもたらす、それから――

――筋肉。

急に出てきた言葉だった。けれど、たしかにそうだな、とぼくは納得する。漫画のスーパーヒーローも、みんな筋肉もりもりだ。ゲームに出てくるボスキャラもそう。自分でやったことがあるわけじゃなくて、攻略動画を見たことがあるだけだから、たくさんは知らないけれど、ぼくに思いつく限りの作品ではそうだった。
それじゃあ、どうすればチカラを、筋肉を、得られるんだろう。……このぼくのカラダじゃきっとダメで無理だ。新しい世界にぴったりの、新しいカラダが要る。
(だったらそれを、作らないといけないよね)
これが夢だったら、きっとなんでもできるに違いない。何かを一から作り上げることだって。

そう思った瞬間、もこり、と何かが生じた。

何もない混沌に生じたそれは、次第に大きくなっていく。ぼこっ、むにゅ、びきっ、どくっ、と様々な感触を伴ってそれは分裂し、融合し、複雑に絡まって、形を変えていく。

無から有を創り上げるように、夢から現実を紡ぎ出していくように、ひとつの肉体が世界に現れようとしていた。

小さな魂はそれを感じている。一面の暗闇のなか、遥か彼方から微かに光が滲み出してくる。暑さや寒さ、手触りや匂い、何もかもなかったところに新たな五感が生まれていく。温もりが、そよぐ風が、せせらぎの音が、そして——

目が覚めた。

ぼくは、いつも通りの部屋で、いつも通りに布団を蹴飛ばし、ぼんやりと天井を眺めていた。

「変な、夢……」

やっぱりあれはただの夢だったのかと思うと、妙に残念な気持ちが込み上げてきて、はあ、と大きなため息を吐いてしまった。

まあそうは言っても正直、世界を救うだとかどうとか、そういう大袈裟なことに巻き込まれなかったのは良かったのかもしれない。

（今日も怒られないように、目立たないように一日を過ごせれば、それでいいや）

良いことなんてなくても、昨日と変わらない今日を明日に繋げていく。それさえできれば、生きていける。そうやって今までも、なんとかやってきたんだから。

昨日までと何も変わってないかのように振る舞って、今日がぼくの誕生日だなんてことには気付かせない。そういう風に朝を乗り切って、あのひとが仕事に行った後は、ひとまず自由だ。……といっても、目に付くようなことをすれば怒られるから、そこには気をつける。ちょっと前に近所の人から譲ってもらった、お古のタブレットで動画を見るくらいが、ぼくにも許されている数少ない娯楽だ。

ゲームの攻略動画、無料公開しているアニメ、いろんな企画で話題作りをしようとする配信者。ぼくには手の届かない、キラキラした世界。

課せられた家事はなんとか済ませ、あのひとが帰ってきて、うまくできなかったいくつかのことを詰られて、そうこうしているうちにまた夜が来た。誕生日にしては、まだマシなほう。

(今晩も、夢が見られるかな)

いつの間にかそれを心待ちにしていた自分に気が付いて、頭の中だけで小さく笑う。本当に声に出してしまわないよう、注意しなくちゃ。おとなしくしてさえいれば、とりあえずは安全だから。

相変わらずうだるような熱帯夜だけど、夢を見れさえすればそれも気にならなくなるだろう。昨日の夢みたいに、世界を救ってくれと言われても困るけど、もしも、もう一度天使が現れて、知らない世界へと誘ってくれるのなら、まあ、ついて行ってもいいか、なんてちょっと生意気なことを考えているうちに、眠気が訪れて――

何も見えない。

夢どころか、ぼくを取り囲むのは真っ暗な闇だけで、指一本、目線の一つも動かせない。

昨日、あれだけ必死に『ぼくを探していた』なんて口説いてきたくせに、天使の姿はどこにも見えず、一向に現れる気配すらない。

一体、どうしてなんだろう。ひょっとして、ぼくがまたなにか間違ったことをしちゃったんだろうか？　なにか取り返しの付かない失敗をやらかして、あの天使にさえ愛想を尽かされてしまったのだとしたら？

(ああ、あ、あああ……い、イヤだっ……！)

いくら嫌がっても、これは覆らない事実だ。昔っからいろんなことで叱られてきた。それもこれも、全部ぼくが悪い。不器用で、のろまで、空気が読めなくて。……よせばいいのに、嫌な考えばかりが浮かんで止まらない。

怖くて、焦って、カラダがどんどん火照っていくのがよく分かる。……あれ？　でも、ぼくのカラダって、こんな感覚だったっけ？

「――ィちゃん、おーい」

もしも、もしもだけれど、この先もずっと、夢を見ることとさえ許されないとしたら、ぼくはどうしよう。坂道を転がり落ちていくように、悪い方へばかり考えが行ってしまっているのは自分でも分かるけど、どうしても止まらない。こんな風にぐるぐる悩まなくなれれば、せめてもう少しはマシになるのかな。だとしたら――

「なあ、大丈夫か？　ニィちゃん！」

肩を揺すられて、ようやく呼び声に気付いた。天使のものとは違う、太くて聞き覚えのない声だ。もちろん聞き覚えなんてない。

びっくりして目が開くと、青空を背景にしてぼくを覗き込んでいた顔と目が合った。

ゴツゴツした、トカゲみたいな顔だった。

「え？　……うわ」

「ヒトの顔を見て、うわ、とはなんだい。まあでも気が付いて良かった！　アンタ、そりゃあこの良い陽気で眠くなるのは分かるがね、往来のド真ん中で寝こけるのは、よした方がいいと思うなあ」

トカゲ顔は流暢に喋っているけど、内容はまるで頭に入ってこない。ちんぷんかんぷんだ。身を起こそうとしてもうまく動いてくれないし、それとなんだか……いつもより重い？

「お、とと」

でも、ちゃんと身体を意識してみたら、嘘のようにすんなりと持ち上がった。ひとまず声を掛けてくれた相手に謝りつつ、頭を下げる。

「なあに、気にしなさんなって。ニィちゃん、ここいらじゃ見たことねえ顔だが、どっかから避難の途中かい？　よっぽど疲れてたんだろ。町はもうすぐそこだから、ちゃんとした寝床でしっかり寝なよ、なあ？」

相手は声色に心配を滲ませて、ぼくの視線を誘うように指を差す。

どうやら自分たちがいるところは、小ぶりな丘を突っ切るように敷かれた道の真ん中らしい。両脇の明るい野原には、背の低い草花が茂っていて、道は細い川の流れに沿って続いている。

その先に、小さな建物の集まりがちょこんと、確かにあった。

「あ……ありがとうございます」

「おお、じゃあ気ィ付けてな」

ガハハハ、と笑いながら手を振って、町から離れる方に去って行く相手は、顔だけじゃなく身体もゴツゴツしていて、翼まで生えている。

トカゲというか……ドラゴン？

ぼくも手を振り返して、ようやく気が付く。

「わあ」

伸ばしたその手は見慣れた自分の手ではなく、ゲームかアニメのキャラみたいな色をしていた。手の甲は薄い青紫色、手のひらは少し淡くて、白っぽい青色だ。表面はつるっとしていて、触ってみると程よい弾力があった。

……ちゃんと、触った感覚がある。いろんな所の感じ方が自分の慣れてきたものとちょっとずつ違っていて、それなのに違和感は全くない。

〝これは自分のカラダだ〟と、自然に感じる。

当然、変わっているのは手だけじゃなかった。身体全体が、青くてつやつやした質感になっているようだ。そしてどう見ても、眠る前のぼくより大きくなっている。……そういえばさっき喉から出てきたのも、ぼくの声とはまるっきり似ていない、声変わりした後の低い声だった。

「本当に、違う世界にきちゃったみたいだ……」

さっき教えてもらった〝町〟の方をみても、ビルの姿は見えないし、電線もない。道の舗装は大小様々な敷石らしくって、アスファルトののっぺりした表面はどこにもないし、交通標識も見当たらなかった。

こうなるともう認めるしかない。ぼくは違う世界に来て、違うカラダを手に入れて、きっとこれから世界を救うとか、あの天使が言ってたみたいに……あれ、そういえば、天使は結局、どこにいるんだろう？

「ねえ、天使」

――返事はなかった。ほっぺをつねっても、ヒリヒリした痛みを感じるだけで何も起きない。お尻の先がむずむずしたので、なんとなく力を入れてみると、手と同じ色のモノがぴょんっと跳ねて視界に入る。思わずそれを掴んでみると、なんとも言えない妙な感覚がした。

「これ……シッポだ。ぼくの、というよりはもっとこう、手を握られたとき、というような、不思議な感じ。腰の辺りがビクッとなるような、ムズムズするような……シッポ……」

……ちょっぴり、クセになっちゃいそうだ。

しばらくはそうして、新しいカラダの感覚を確かめていたけれど、それ以上は特に何も起こらず、ぼくは途方に暮れてしまった。

（あの天使、言いたいことを言うだけ言って、肝心の時に出て来てくれないなんて。これから一体どうしたら良いのかな）

きょろきょろと辺りを見渡してみても、その手掛かりになりそうなものはない。さっき教えてもらった小さな町が見えるだけだ。

（とりあえず、あそこに行ってみるか）

そう決めてぼくは歩き始めた。それにしても、なんだかお腹が空いてきたな。夢の中なのに、痛みはあるしお腹も空くだなんて、不便だ。

（……まずい、頭がぼうっとしてきちゃった）

思わず目を閉じ、その場に屈み込んで――

――目を開けるとぼくは自分の寝床にいた。朝の日差しが、古ぼけたカーテン越しに部屋に注いでいる。

(そっか、こんな風にあっちとこっちを行き来するってことなのかな)

いつも通りの肌色の、小さな自分の手を見てそう思う。……次は、寝る前にお腹をいっぱいにしておくのが良いかもしれない。

(今夜もまた行けるかな。楽しみだな……)

ふふっと微笑んで、はっと表情を引き締める。……良かった。あのひとには見られていない。

(それじゃあ、ぐずぐずしてちゃダメだよね)

夏休みは終わり、今日から二学期だ。すぐに支度をしないと叱られてしまう。

朝ご飯もそこそこに家を出て、学校に向かう。通学路を行く生徒たちは、夏休みにあんなことをしたとか、どこかへ旅行に行ったとか、宿題がまだ終わってないよとか、みんな楽しそうに話していたけれど、ぼくはその輪には入れない。ひとりで、ただ黙って歩いていた。

目が覚めたときには、夢の中のこともあっちの世界のことも、まだ鮮明に覚えていたはずなのに、今ふと気付くと、全部が曖昧にぼやけて思い出せなくなっていた。

それでもどこか、日常のいろんなことが心に引っ掛かる。……ぼくのカラダって、こんなに小さかったっけ? それに、シッポがないのはやっぱり違和感が強くて落ち着かない。シッポ……そんなもの、ぼくにはもともと生えてないはずなのに。

夢の中でじぶんがどんな姿だったか、どんな体つきをしていたか、思い起こそうとしても、モヤが掛かったようになって、うまくいかない。

それでも、夢の中で手に入れたあのカラダの方が良かった、という喪失感みたいなものが、ないものねだりをするような虚しい気持ちが、心の奥でぶすぶすと煙を立ててくすぶる。

教室に着いたあとも、大して状況は変わらない。大勢の移動しても、始業式のために体育館へ中にいても、ぼくはひとりだった。

壇上では校長先生が、いつもみたいに長くて退屈な話を続けている。まともに話を聞いている生徒なんてたぶん誰もいなくて、みんな仲の良い友達同士で小突きあったり、こそこそ話をしていたりする。

それは、ちょっと羨ましいけれど、ぼくにはきっとこれからも縁のない光景だ。動画の中のゲームやアニメと一緒。

(でも、じゃあ、あの世界なら……?)

体育館に籠もる熱気と、単調に続く長話と、どこかでうるさく鳴いているツクツクボウシのせいで、頭の中がふわふわしている。お風呂でのぼせたみたいな気分だ。こんなとき、ぼくにできるのは、眠気に身を任せるくらい……

――微かにそよぐ涼しい風と、せせらぎの音。

それは一瞬だけですぐ消えてしまったけれど、ぼやけた記憶をくすぐる感覚だった。夢の世界にほんの少しだけでも触れられたという実感で、喜びと安堵が押し寄せてくる。

(今でもあの世界と、ちゃんと繋がってるんだ)

しみじみとそんなことを考えているうちに、校長先生の長い話もようやく終わったらしい。ぼくはクラスメイトの波に呑まれるまま教室に戻って、その後は、まあ、いつも通り。ホームルームで夏休みの宿題を提出して、明日からの授業に向けての心構えなんかを聞いて、二学期最初の席替えをして……今日はそれでおしまい。

結局、誰ともまともに話せないまま、下校の時間になってしまった。

開けるとき、やたらと軋(きし)む古いドア。塗装もだいぶ汚れているそれが、我が家の玄関ドアだ。鍵を開けて中に入り、電気を点(つ)けようとしたら、もうすでに点いている。

珍しくこんな時間から、あのひとが家にいた。その場で引き返したかったけど、そんなことをしたって、苦しむ時間が余計長くなるだけだ。だからぼくは、素直に家に入って「ただいま」と挨拶をする。

――なに、もう帰ってきたの？　ああそっか、今日は始業式だけか。いいよね、子供は。

大体そんな感じの言葉から始まって、些細(ささい)な失点を目敏く見つけられ、叱責の言葉が続く。

小言というよりは、取り留めのない恨み言の連続で、どう反応しても結局は否定されたり、喚(わめ)かれたり、泣かれたり、たまには叩かれたり。

ぼくには、それをどうすることもできない。ただ耐えて、なるべく機嫌を損ねないようにして、できるだけ叱られる時間が短くなるよう祈って、なんとかやり過ごす。今まで通り。

……そう、今までは、それしか仕方がないと思っていた。ぼくは、ここにいるしかなかった。

でも今のぼくには、夢の世界がある。

向こうの世界に、あのひとはいない。そんな世界があるだなんて、考えたこともなかった。

だから夜が待ち遠しい。早く寝て、向こうへ行きたい。ぼくに何ができるのか試してみたい。あのカラダに戻りたい……

それって、現実から逃げてるだけじゃない？

ぼくは身震いする。自分で自分を制する声は、あのひとの声に似ている。あのひとからは逃げられても、ぼくからは逃げられない。

そうして、また少し自己嫌悪が深まるのだ。

……眠りについて、しばらく経った。

いつしかぼくは、今朝目が覚める前にいたのと全く同じ場所で、屈み込んだ姿勢もそのまま、夢の世界にたどり着いていた。振り返って空を見れば、太陽の位置も変わっていないように見える。つまり、こっちの世界での時間は経っていないってことだろうか。

（元の世界で、晩ご飯はちゃんと食べたけど、こっちだとお腹は空いたまんまだな……）

そこら辺の変化もないらしい。とりあえずはこの空腹をなんとかしたいので、立ち上がって町への道をゆっくり歩いて行くことにした。

日差しは穏やかで、川面（かわも）を渡る風は心地良い。町に近付くにつれて他の通行人とすれ違うことも多くなってくる。

（みんな、さっきのおじさんと同じような顔だ）

なんて呼ぶべきなのかな。ヒト？　トカゲ？　それとも、ドラゴン？　どっちにしろ、表情はみんな穏やかで、挨拶もちゃんとしてくれる。

「やあ、良いカラダだね！」「筋肉の祝福を！」「巨竜（きょりゅう）の恵みあれ！」

不思議な響きの言葉だけど、言葉は通じてるみたいだ。……意味は、よく分からない。

そして今更気付いたのは、誰ひとりとして服らしいものを身に着けていない、ということ。……というか、ぼく自身も裸で歩いていた。

だけど何故だか、少しも恥ずかしくないし、周りから何かを言われることもない。気付いたタイミングが遅くなったのも、裸でいることがあまりにも自然だったからだ。

（そういえば――）

と、ぼくは股間に手をやる。ちんちんがあるはずの場所には、何もない。ただ、うっすらと一筋の切れ目が通っているだけだ。周りにいるみんなも同じ。まさか、このドラゴンみたいな生き物には、男……というかオスはいなくて、みんなこうなんだろうか。つまりは、ぼくも？

（それは……ちょっと困ったな。おしっことか、どうすれば良いんだろう……？）

　なんだかトンチンカンな事が気になりだしたけど、その疑問はとりあえず保留だ。……この切れ目の中に、なにかがありそうな感覚はする。きっとそのうち、答えが分かるだろう。

　そろそろ、空腹も限界に近付いてきた……。

「それなら、巨竜教会へ行けばどうかな？」

　町に着いて、どこか食べ物を食べられる場所がないかと尋ねてみると、そう教えてくれた。

　相変わらず相手の顔の見分けがつかなくて、若いのか年寄りなのかもよく分からない。声は結構低くて深みがあるから、案外おじさんかも。

「ほら、あそこ。見えるかい？　広場の真ん中に、背の高い建物があるだろう。もうそろそろご飯の時間だしね、食べに集まってくるヒトも多いと思うよ」

「……でも、お金とか持ってないんです」

　そう言うのはさすがに恥ずかしくて、思わず小声になってしまったけど、そのヒトはぼくの心配をカラカラと笑い飛ばした。

「大丈夫さあ、だってそのための教会だからね。まあ、お兄さんほどの体格で満足できるような大ご馳走とはいかないだろうけど」

　そう言って、ぼくの腰辺りを親しげに叩く。ちょっと照れくさいけど、このカラダは周囲のヒトたちと比べても、割と背が高いほうらしい。

「教会——行ってみます、ありがとう」

「どういたしまして。豊かな肉の恵みあれ！」

　またも、不思議な挨拶だ。

　巨竜教会、って言ってたっけ。巨竜って響きからすると、ものすごくムキムキなドラゴンを崇拝しているのかもしれない。お互い裸だから分かったけど、さっきのヒトもだいぶカラダを鍛えてたっぽいし、そういう信者なのかな。

　……ぼくも、筋肉のことが好きかもしれない。

探し当てた教会は石造りの古びた建物だった。真っ昼間なのにほんのり薄暗くて、吹き抜ける空気が肌にひんやりと感じる。

　入ってすぐのところに柱の並ぶ回廊と、それに囲まれた広い中庭があって、そこにはぼくの他にも食事を待ってるらしいヒトたちがいた。

　みんな、どことなく肌の色がくすんでいて、どんよりした目をしている。

　体つき自体はそう悪くないのに、心の疲れが見た目にも現れて、ひと回り小さく見える……そんな気がした。

　やがて鐘が鳴ると、優しげな笑みを浮かべた聖職者っぽいヒトが奥から出てきて、ぼくたちに歓迎の言葉を掛けてくれた。

　やっぱり服は着ていなかったけれど、何かのシンボルらしい首飾りを付け、額や胸なんかには鮮やかな色の模様を描いている。こういうの、ボディペイントって言うんだっけ？

ちゃんとした由来や意味があるんだろうけど、ほんの少し可笑(おか)しく見える。逆に、裸のカラダに絵の具を塗ってるだけだからえっちに見えるはずなのに、荘厳(そうごん)というか、聖なる感じもする。

　ぼくたちはそこから、食堂へと案内された。簡素な机と腰掛けが並べられ、スープが入った木の椀とパンが用意されている。みんな、好きなところに座って、感謝の祈りっぽい仕草をしていたので、ぼくも見よう見まねでお祈りしつつ、周囲の様子を興味の赴(おもむ)くままに眺めてみた。

　食堂の古びた壁には、一枚の大きな絵が掛けられている。そこに描かれた、どこか見覚えのある顔がぼくの目を引いた。

（……あ、そうだ！　ひょっとして、と思ったけれど。あれは確かに、あの天使だ！）

　スープを啜(すす)りながら、ぼくはそう考える。

とろりとして、少し濁ったスープだった。具らしいものも見えないので薄味なのかと思ったけれど、香辛料がピリッと効いていて結構強い味だ。それに、あまり嗅いだことのない香り。

(結局、天使は何も言ってくれないまんまだ。本当に、これからどうすれば良いんだろう？　どこかへ行けば良いのかな？)

　考えたところで答えがぽんっと出るわけでもなく、ぼくは半ば諦めてもう一度絵の方に目を遣った。天使と向かい合うように、山のような巨体が描かれている。……巨竜教会というからには、信仰の対象になる〝巨竜〟っていうのが当然いるんだろうし、その絵なんだろうけど。……頼りない松明しかない室内では、ちょうど暗がりになっていて、よく見えなかった。

　パンを一口齧って、またスープを飲む。腹の虫もようやく満足してきたみたいだ。

　それにしてもこのスープ、やっぱり不思議だ。変わった味と匂いなんだけど、このカラダには合ってるみたいで、飲めば飲むほどじんわりと奥の方から温まって、なんだかどんどん欲しくなる。美味しい。美味しくて、止まらない。

　いつからか、心臓がどきどきして、息が荒くなり、足の間がむずむずしてきた。ちんちんが無くなっていた、あの切れ込みの辺りだ。……おしっこに行きたい、いや違う、これは一体、なんだろう？

「はぁ……はぁ……？」

　何かが物足りなくて、火照って、疼く。その熱い部分を、ついつい手で触ってしまった。

　気持ちいい。

　もっと触りたい。掻き回してみたい。

　むずむずがもっと強く、深く、固くなる。

「んッ」
切れ込みに突っ込んでいた右手が、なにかに当たった。頭に電流が流れるような、衝撃的な気持ちよさに襲われて、その瞬間、否応(いやおう)なしに理解させられる。

これだ。ぼくが欲しいのはコレなんだ、と。

青かったぼくの肌が、次第に赤みと艶を増していき、ぬらぬらした青紫に染まっていく。
そして、その切れ込みの奥から、この快感の原因が姿を現し始めた。赤黒い肉の塊が、冗談みたいにでっかいソレが、ぼくの意思など全くお構いなしにゆっくり伸びてきて、驚くぼくの手の中で、さらに大きく、みるみるうちに膨れ上がっていく。

ソレは——どこから見ても、どう考えても、ぼくのちんちんだった。

けれど、これはいくらなんでもデカすぎる。〝三本目の足〟って表現がしっくり当てはまるくらい長くて太くて、ぼくの股間から誇らしげに聳(そび)え立っている。……ちんちんというより、これはもう肉の塔と呼ぶほかない。

「あ、アレを見ろ！」「まさか……！」「奇跡のはしらだ」「巨竜のみしるし！」「おお……」「これこそ、奇跡……！」

その場にいたみんながぼくの股間を見ている。ぼくの、ちんちんを。
教会のヒトも、ご飯を食べに集まったヒトも、口々に驚き、ざわめきながら、食い入るように見つめている。——ああ、それが、こんなにも気持ちいい。

（あ、ああ、なんだこれ、止まらない!!）

何かが込み上げてくる。圧倒的なまでの熱だ。それこそ世界を新しく創り上げられるくらいの、全てを押し流してまっさらにしてしまうくらいのパワーがぼくの股間に、ちんちんに押し寄せ、ぶつかり合い、弾けそうに……

「ああああああ、があァッ!!!」

爆発にも似た衝撃。何もかも吹っ飛ばす快感。頭の中まで白く、真っ白く、溢れるべとべとに染まっていって、塗りつぶされて。

とても耐えきれなくなったぼくは、とっくに意識を手放していて――

――そして目を開けると、布団の中だった。いつも通りの人間の手。寝る前と変わらないパジャマ。昨日と同じ朝の様子。……だけど、パンツの中はぐしょぐしょしている。

「や、やばっ」

おねしょ、とは違うみたいだけれど、べとべとしてるし、変な匂いだし……どっちにしても、叱られる前にちゃんと洗わなきゃ。

そんなこんなでドタバタしつつ、また一日が始まる。寝るときまで、あの世界はお預けだ。今夜はどんな〝夢〟が見られるだろうか。

（それにしても……なんか窮屈だな。あれ？）

……なんだか、ちんちんが大きいままだった。

## 二　夕陽色の瞳

　いつか。そう、いつかはこんな日が来ると、かれには分かっていた。
「父ちゃん」はずっと、その時のための準備をしておけと言っていたし、その自慢の仔であるかれは、言いつけをちゃんと守って、何もかも完璧に準備をしていた。
　この後どこへ行けば良いのかも、誰と話せば良いのかも、何をどうすれば良いのかも、大体のところは予定通り、しっかり頭に入れてある。

　だから大丈夫。大丈夫、のはずだった、のに。

　かれはただ泣くことしかできなかった。どうしても、涙が止まらなかった。「父ちゃん」が安心して長い旅に向かえるように、笑顔の練習までしてきたと言うのに。

　地に伏せる〝最後の巨竜〟の前で、大声を上げて泣きじゃくる年端もいかない仔竜の姿は、どう贔屓目（ひいきめ）に見ても、惨めなほどにちっぽけで頼りなかった。

「……もう少し、近くに来て、くれないか、……ムルト。お前の顔を……見せて、おくれ」
　嗄（しわが）れたその声は、死の床にあってもなお威厳と優しさとに満ち、大地を震わすように響いている。普（あまね）く世に救いを与える巨竜の声が、今はただひとりの仔竜にだけ向けられていた。
「父ちゃん。オイラはここにいるよ」
　ごしごしと涙を拭い、努めて普段通りの声を出そうとする。……散々泣き喚いた後で、今更格好をつけても仕方がないのだが、今このときくらいは、弱いところを見せたくなかった。
　自分は大丈夫だ、ちゃんとやっていけるんだ、と示したかった。……けれど涙は止まらない。

溢れる感情を堪えようとして小刻みに震えるかれの頭に、父たる竜は巨大な手を差し伸べ、愛おしげにさすりながら言葉を紡ぐ。
「ああ、ムルト。……巨竜の裔たる、我が仔よ。我、フェルティリス・ジンギベルの名において、汝に……巨竜の、祝福を。世界に恵みを齎し、その名を刻め。――」
それはこの世界の始まりから伝わる、巨竜の儀式のための言葉だ。普段口にすることのない言語、耳慣れない語彙、古めかしい文法。だがその意味を、ムルトはちゃんと理解できる。……できるように、教えてもらえたのだから。
伏した巨竜は一瞬、ひゅう、と苦しげに息を吸い、僅かばかり眉根を顰めたが、力強い目の輝きには一点の曇りもなく、祝詞を述べきった。
「――汝の名は、クルクマ。ムルティフェル・クルクマ。大地よ歓喜せよ、新たなる巨竜は、……ここに、成れり」

＊＊＊

その集落は、高原にぽつんと佇む小さな村で、ちゃんとした教会のある人里からは相当離れていたものの、他ならぬ巨竜の加護のおかげで、ささやかながらも豊かな暮らしを享受していた。
村の住民たちは皆、この地をしろしめす巨竜ジンギベルの血によって産まれた仔たちである。巨竜を祀り、支える文字通りの愛し仔として、かれの恵みを分け合い、広く世に伝えることを旨として日々の暮らしを営んでいる。
そして、ジンギベルが最後に産んだ仔こそ、ムルトであった。
厳密を期すなら、「最後」というのは語弊があるかもしれない。当然ながらジンギベルは、ムルトが産まれてからも、周囲一帯のすべてに命を与え、護り、育んできたのだから。

しかし、ムルトはやはり特別だった。

村の未来を継ぐべき新たな世代はもう何年も産まれておらず、村民たちを悩ませていた。

ジンギベルにとっても、そのことは何よりも辛く、慚愧に堪えないことだった。……自らのチカラが衰え始めていること、遠くない未来に最期が訪れるであろうことはよく理解できたし、それ自体が恐ろしいわけではなかった。

だが自ら亡き後、村を守護する存在がいなくなってしまうことを、かれはただ懼れていた。ただでさえ今この世界には、巨竜の生き残りがもはや存在せず、世界を巡るべき恵みが淀み、行き詰まってしまっているのだから。他ならぬジンギベルは、世界の現状をよく理解していた。

だからこそ、長い難産の末にムルトが産声を上げたとき――ジンギベルをはじめ、村の衆はみな狂喜し、お祭り騒ぎになったものだ。

ムルトはみんなの弟分として、惜しみない愛を注がれ、育っていった。

艶やかな黄色の肌と、夕陽を映したかのように燦々と輝くオレンジ色の瞳は、かれの明るい気性をそのまま顕にしたかのようで、いつでもどこかではしゃぎ回っては、その体を泥だらけにしていた。

本当にちっぽけな村ではあったが、ムルトにとってはそれが世界の全部と言っても過言ではなかった。「兄ちゃん」たちと一緒に過ごした日々が、「父ちゃん」から学んだ巨竜の教えが、その一つ一つがかれの心と体を形作っている。

（だからオイラは、みんなに恩返しがしたい）

そう思えば思うほど、自分がいかに小さいか、身に染みて感じられた。……心理的な意味でも、物理的な意味でも。ムルトの肉体は、なかなか大きくならなかったのだ。

村に住まう竜人たちは大概、産まれて五年もすれば一人前の体格に育っていた。またどんなのんびり屋でも、立派なオトナになるのに八年も掛けることはそうそうなかった。

　けれどムルトは、どれほど時間が経っても、少しも大きくなる兆しを見せなかった。背丈はオトナの腰にすら届かず、柔らかな手足には、竜人たちが尊ぶほどの筋肉は付かず。

　もちろんそれで、周囲からバカにされるわけでも、愛が減じるわけでもない。ただ……そう、父ちゃんみたいにはなれないのか、との思いがムルトの心をじわりと蝕み、沈ませていくだけ。

　巨竜は、その名の通り天下を睥睨するほどの、万物を包容するほどの偉大な巨躯を誇っている。そして、――創造と破壊、巨竜が有するチカラそのものの象徴である、天を摩して貫くほどの巨根を。それこそが、他の村民たち……竜人と巨竜との、もっとも大きな違いであった。

　竜人たちは男根を持たない。竜人の股間には、ただ割れ目が穿たれているだけである。それはかれらに課せられた戒めであり、決して消えぬ過去の罪咎を思い起こさせる縁なのだ。

　ムルトは自分のスリットに目をやる。慎重な手つきでその割れ目を拡げ、ねっとりと湿った奥へ自分の指を突っ込んでいく。

「んッ……あ、――」

蕩けるような快感、甘い痺れと共に、指先に当たるモノ。熱を帯び、微かに震えながら頭をもたげ、スリットの外へ顔を出し始めるそれは、紛れもない〝巨竜のみしるし〟だ。

　ムルトにそれが宿っていると分かったときの、みんなの喜びようと言ったら、かれが産まれたときに輪を掛けて村中がさざめき立ったものだ。特にジンギベルなどは、嬉し涙を滂沱と流し（かれは実際のところ、なにかと事あるごとに泣くタイプだったが）……

そしてムルトは、なんと名付ければ良いのか分からない複雑な感情に、どうやって向き合うべきかと、ただ戸惑っていた。

（そうだよ、オイラは、……）

たとえばその一つは安堵。自分はたしかに、あの巨竜ジンギベルの、血を分けた仔だったのだ、という温かな確信。
あるいはその一つは憂慮。いつまでも大きくならない自分が、よりによって自分が、巨竜の名を継ぐなどできるのか、という危惧、不安。
そのほかにも細大問わず幾多（いくた）の感情が、入り混じり縺（もつ）れ合ってムルトを呑み込み、しばらくまともに寝付くこともできなかった。

（オイラは巨竜の末裔（まつえい）だ。父ちゃんの跡を引き継ぐんだ。そうすればみんなに恩返しができるだけじゃない。世界の役にだって立てる）

こんな僻地の村にも、さまざまな風の便りは届く。そして、みしるしを立てたその日から、ムルトにも世界の弱りゆく声が聞こえるようになっていた。――ジンギベルが〝最後の巨竜〟と呼ばれていることも、その父さえ、もう長くはこの世にいられないだろうことも。
だから、自分に何ができるのか、知りたいと思った。巨竜としての役目を果たせるものか、試してみたいと常に考えていた。

当のジンギベルにも訊ねてみたことがある。
「ねえ、父ちゃん。恵みを巡らせる……って、どうすればいいの？」
「そうだな……なんと言うべきだろう。言葉にしてしまえば単純なことだが、それだとうまく伝わらないだろうな」
「どういうこと？」
上目遣いに聴くムルトに、父たる巨竜は少しだけ頬を赤らめて答える。

「お前たちのことを思い、愛する……ううむ、本当はそれだけではないのだが、むぅ」
「愛？　愛かあ……オイラも、父ちゃんや村のみんなのこと、大好きなんだけどな」

　そんな会話を思い出して、大切なヒトたちのことを思い、念じてみる。特段の変化はない。いや、少しだけ吹く風が強くなっただろうか？　鼻頭がむずむずしてくる。
「え……え……えっくちゅ!!」
　くしゃみの音ばかり盛大に出たけど、当然というか、何も起こらない。風も止んでしまった。全ては気のせいだったということか。

（父ちゃんがやってたこと、真似しようとしても全然できないんだもんなあ）
　はあ、と無念のため息を吐く。何がダメなんだろう。カラダが小さいから？　チカラが足りないから？　……いや、自分に足りてないモノなんて、もっとたくさんあるだろう。それならいったい、自分は何をどうすれば良いだろう？
　そもそも――みんなのことが好きだという、この気持ちそのものが嘘だったのだろうか？

（いやいや、いや！　それは絶対ない、大丈夫。オイラにだってそれくらいは分かる）

　自分を疑うなんて、もってのほかだ。だって今のかれは、すでにジンギベルが認めた巨竜の一員なのだから。自分を否定することは、ジンギベルをも否定することだ。

（父ちゃん――）
　父ちゃんは、偉大な巨竜だった。
　死んで骸（むくろ）となった今でも、その恵みは大地に拡がり、染み渡って、この地に住むものたちの昨日と今日を、そして明日を護ってくれている。
（オイラも、父ちゃんみたいになりたい）

……でも、いくら強く願ったところで、自分ひとりではできること、できないことがある。その二つの間には厳然（げんぜん）たる大きな壁があって、ムルトはまさしく今、自分の限界を目の当たりにしていた。

（オイラが、立派な巨竜になるためには――）

――ムルト。ムルティフェル・クルクマよ。
お前は……世界を、見なさい。

父ちゃんは最期に、そう言っていた。

ひょっとしたら世界のどこかに、まだ巨竜の生き残りがいるかもしれない。ムルトが心から頼めば、巨竜として世界を救うにはどうすれば良いか、教えてもらえる……かも、しれない。

絶対あり得ないなんてこと、誰に言うことができよう。世界中をくまなく探しさえすれば、きっと噂や、何か手掛かりが得られるはずだ。

……そうだ、もう、それしかない。

「道を、教えてもらうんだ。オイラが父ちゃんみたいになれるように。立派な巨竜に、なれるように……！」

＊＊＊

紅（くれない）に染まる空の、最後の輝きが地平線に沈んで、教会の鐘の音が厳かな余韻を響かせる。

ほんの数日前に建てられたばかりという点を除けば、特筆すべきこともない、こぢんまりとしたどこにでもある教会堂。……死せるジンギベルに捧げられた、この村にとっては初めての聖堂だ。

重厚な木の扉を背にして、聖堂の管理を任じられた村長（むらおさ）が、自分の腰にも届かない相手に――小さなムルトに、深々と頭を下げる。

「今日もまたお勤めいただき、感謝いたしますじゃ……クルクマさま」

「ううん、オイラはまだ、そう呼ばれるほどのチカラがないから。今は、ただのムルトだよ」

沈んだばかりの夕陽と同じ色の瞳を少し伏せて、ムルトは首を振る。黄色の手足は、巨竜という名を背負うには余りにも細く、見るからに筋肉が足りない。

「お気持ちは分かりますが……じゃからこそ。名前とは、実に重要なものですからのう」

優しげな微笑みの奥に、きらりと光る思いを湛(たた)えて、村長は語る。

「それに、儂(わし)らは確かに、あなたの身に宿った奇跡をこの目に見ておるのです。故に、ご心配は不要ですじゃ。チカラも、カラダも、必ずやその名前に付いて参りましょうぞ」

「……うん。オイラも、そう信じてる」

言葉の重みを受け止め、呑み込んで、小さく頷く。愛するみんなの前で、誇りを持ってその名を名乗れるように。精一杯の背伸びをして、ムルトは決意を胸に口を開いた。

「オイラ、旅に出るよ」

だんだん暗くなる空の下でも、ムルトの瞳に灯る火は消えない。

「〝世界を見ろ〟って、それが父ちゃんの遺言だったんだ。きっと、みんなにふさわしい巨竜になるから、それまで待っててくれるかな？」

その目の輝きが眩しくて、村長は再び慨嘆(がいたん)とともに身を屈めた。

「もちろんですじゃ。この地において、巨竜の名を継がれたあなたこそ、儂らの希望そのものなのですから」

ムルトはその日、そのまま家に戻って一夜を明かし、夜明けとともに旅立つことにした。

本当はあまり大事(おおごと)にしたくはなかったのだが、出発の時には結局、村中の竜人たちが見送りに出てきてくれた。

村長がその列から歩を進め、ムルトの前まで来ると、小さな壺を捧げ持って口を開いた。

「どうか……あなたの前途に、数多（あまた）の幸（さいわ）いと、祝福がありますように」
　心の底からの願いと共に、かれはその中身を手に取る。ジンギベルの遺骸から採った聖なる染料だ。それを仔竜の額と胸と、お腹に当て、繊細な紋様を描く。――旅立ちを祝し、無事を祈る餞（はなむけ）の儀式。
　返礼として、ムルトも同様に、染料を相手の身体に塗っていく。小さな黄色い手で描かれた紋様は、ムルトの持つチカラに反応したのか、ぼんやりと白く光っていた。
「ほら、ご覧なされ。――やはりあなたには、奇跡のチカラがおありですじゃ」
　微笑みながら村長はそう言い、その後ろから村民たちが口々に声を掛ける。
「気を付けてね」「ちゃんと飯食えよ」「腹を壊すんじゃないぞ」「巨竜の導きあれ！」「豊かな肉の恵みあれ!!」「ジンギベルさまのご加護を！」

　思わず涙ぐみそうになって、ムルトはぎゅっと目を瞑り、なんとか笑顔を浮かべて手を振る。
「うん、ありがとう……！　みんなにも巨竜の――父ちゃんの、加護がありますように！」

＊＊＊

　ムルトの歩幅は小さく、道のりは果てしなく遠く思える。それでも一歩ずつ歩いて行くのが大事だと、かれは自分に言い聞かせる。
　まずは、いちばん近い町にある教会を訪ねた。ジンギベルから見て兄弟にあたる巨竜の亡骸（なきがら）を祀る教会だ。
　ムルトが身元を明かし、みしるしを見せると、喜んで迎え入れてくれた。
「ジンギベルさまの件は伺いました。……誠に残念です」
　聖職者が示した弔意に対して感謝を伝えつつ、ムルトは訪問の目的を告げる。

「オイラの他にも、巨竜の名を継ぐ――しるしを持ったヒトのこと、聞いたことはあるかな？　どうしても会って、話を聞きたいんだ」
　だが、反応は芳しくなかった。
「お言葉、確と承りました。できる限りお力になりたいのですが……私どもの教会でも、他の交流を持つ教会の管轄でも、そういった話は、寡聞にして存じ上げません」
　聖職者は気遣わしげに口ごもる。巨竜の証、聖なる御柱を立てた者は、ムルトの例を除けば数十年――ひょっとすると数百年単位で、存在しないのだという。
　仕方がないので、かれはひとまず足の疲れが癒えた頃合いにその教会を辞去した。
　それからも各地の教会を中心にして町を巡り、南を指して旅を続けることにした。……方角を決めたのは、単にそっちの方が暖かくて、旅しやすそうな気がしたからだ。
　確かに気候は穏やかだし、道もさして険しいものではなかった。しかし、巨竜の手掛かりが見つかるどころか、道中で耳に入ってくるのは良くない傾向の話ばかりだ。
――北の山奥で、最後の巨竜たるお方が亡くなったってさ。
　これは父ちゃんのこと。
――西の方だと、今まで恵みを与えてくださった聖なる遺骸が、奇跡のチカラを失ったとか聞いたぞ。
　これは初耳だけど、由々しき事態だ。
――東でも同じだよ。そのせいで、こっちに避難してきたんだ。似たような奴が大勢いるよ。
　旅を続けるごとに、そんな話が増えてきた。
　ムルト自身も、世界に異変が起きつつあると、身をもってひしひしと感じている。

　だがムルトの心が挫けかけていた頃、ついに、求めていた噂に行き着くことができた。

――南の小さな町で、御柱が立ったらしい！

　当然、その場はやにわに熱気を帯びて、皆が興奮気味に話し合い始めた。その喧噪（けんそう）の中で、ムルトはなんとか竜人たちの話に耳を傾ける。

――南？　南のどこだよ、知ってるかい？
――いや、そこまでは……俺も又聞きだから。
――実は俺も、行商人から話を聞いたぞ。

　わいわいと続く言葉の中に、確実な決め手と呼べるほどの情報はなかったが、南に向かって来たことは間違っていなかったようだ。
　さらに南へ、巡礼を続けていると、他ならぬ教会の伝手（つて）からも情報を得られるようになった。求める噂の発生地についても、目星が付いた。

「幾多の巨竜が眠ると言われる、草原地帯の町……そこにぃ、証を立てられた方が現れたそうですよぉ」
　妙に間延びした喋り方の祭司が、大きな腹を揺すりながらそう教えてくれた。
「じゃっ、じゃあ、そこに行けば、会えるんだよね……!?　やっと……!!」
「それが、どうもよく分からないんですよねぇ。その方に巨竜のことを訊ねてもぉ、ちんぷんかんぷんだったらしくてぇ」
　その町の教会でも、どうすれば良いのか頭を捻っているうちに、どこかへふらりと行かれてしまって、その後の足取りは掴めないらしい。まったく、なんてことだ。
　それでも祭司は、口調を崩さないまま笑う。
「でもひょっとしてぇ、ムルトさまならぁ……巨竜どうしで通じ合う、なにかがあるかも？　近くまで行ったら、ビビッと直感で気付くかもしれませんよぉ」

そんな風に言われて、「だと良いけどね」と笑い返しながらも、かれの脳裏には奇妙な確信めいたものがあった。

（きっとこの先で、これからの生き方がまるっと変わってしまうような、なにかがある）

なぜ、と説明することもできないが、ムルトにはそれが分かった。一大転機があるとしたら、その運命に出会うのは、ひと欠片（かけら）の疑いもなくこの少し先の町だ、と。

「じゃあ行ってくるよ。お話、ありがとう！」

「えぇ、こちらこそご来駕（らいが）に感謝ですよぉ」

聖堂の大扉を開け、外へと踏み出す一歩は、これまでになく軽いものだった。

# 三　赤茶色の大地

その日はいつもと違っていた。

眠りについて、次に目を開けたとき、ぼくの目に映ったのは別世界の景色ではなく、天使に出会ったのと同じ、薄暗い空間だった。

手足も、眠る前と同じ、小さな人間のもの。

……そのことが、残念でならない。

そこでぼんやり待っていたら、しばらくしてぼくの前に天使が現れた。よく数えてみたら、かれに出会うのは五日ぶりくらいのはずだけど、なんだか妙に長いこと会っていなかったような気がする。

「認証――前回から、少々間が開いてしまったようですね。どうかご容赦ください」

思ったことが顔に出てたのだろうか。

「それは、別に良いんだけど……何も言わずに、知らない世界に置いてけぼりにするなんてさ」

言いたいことは山ほどあったので、さっそく文句をぶつけると、天使はすまなそうな表情を浮かべる。

「陳謝、そちらについても申し訳なく思います。……釈明。あちらの世界にあなたがいるとき、この身はあなたに接触できないのです。世界を維持するという役割上、世界を直接変えることができないように、この身は作られています」

「そういう大事なことは先に言ってよ……」

思わずため息がちにそう言ってしまうくらいげんなりしたが、なんとか気を取り直す。

「それじゃあ、ここに来てくれたのは、ルール違反にならないの？」

その問いに、天使は「肯定。その通りです」と頷(うなず)いてみせる。

「夢を通じて他の世界と言葉を交わすだけなら、問題ありません。畢竟(ひっきょう)、それによってあなたが世界に来訪し、変化を齎(もたら)すとしても――それはあなたの意志によるものですから」

「そんなもんなのかなあ……」
ぼくは、完全に納得できたわけではなかったけど、細かいことは気にしないことにした。
それよりも――
「ねえ、天使、教えてよ。ぼくはあの世界で、何をすればいいの？」
この間なんか、お腹を空かしてご飯を探していただけだ。その上、ようやくご飯にありつけたと思ったら、急に……アレが飛び出てきて、大変なことになってしまった。今思い出しても、やっぱり恥ずかしい。

……気持ちよかったのは、本当だけど。

「回答提示。今はまず、世界のことをより深く知っていただく必要があります。そのためには、旅をするのが一番でしょう」
「旅？　そんなことでいいの？　……どこかに隠れたボスを探して、倒したりはしないの？」
自分で言っておきながら、バカみたいな質問だと思ったけど、天使は笑ったりしなかった。
ただ真剣な目で、ぼくをじっと見ていた。
「具申。我らの世界を救うためには、何者かを打倒するのではなく……世界の構造そのものを変革する、巨竜のチカラこそが必要なのです。世界を巡り、あなたが見たもの、感じたこと……その全てがあなたのチカラとなるのです」
かれの言葉は難しくて、よく分からない。
「でも、ぼくにそんなこと、できるかな」
――できっこない、と心の奥から声がする。
「肯定。あなたの魂は既に二度、巨竜の奇跡を顕（あらわ）されています。一度目は、その肉体の創造によって。二度目は、そのチカラを証することによって。あなたにしか、できないことなのです」
……天使は、あくまでも真剣だった。

かれの言葉をなんとか噛み砕き、呑み込もうとして、ふと、なにかが心に引っ掛かった。
「え、ちょっと待って。肉体の創造、ってのはなんとなく分かるけど、二度目の……証、ってなんのこと？」
　起きているときは忘れていた記憶も、ここでならちゃんと思い出せるみたいだ。それでも、チカラの証というのは身に覚えがない。
　問われた天使の方もきょとんとした顔をして、ぼくにどう言えば伝わるかを考えているみたいだった。
「所感――あれは、なかなか忘れられない体験だったと思うのですが。事実、あの教会にて、立派に立てられていたでしょう。周囲の方々も、感動し敬服していたはずです」
（教会で、立てた……？）
　嫌な予感がした。口にしたらその予感が的中してしまいそうで、でも、結局のところ我慢はできなかった。
「――ひょっとして、ちんちんのこと？」
「肯定。その通りですが……なにか？」
（……あ、ああ）
　恥ずかしさというか、脱力なのか、いろんな気持ちが急に込み上げてきて、ぼくはついつい、大声で叫んでしまった。
「だから！　そういう！　大事なことは!!」

＊＊＊

　気が付いたら、目の前の景色が変わっていた。穏やかな草原に、そよそよと流れる小川。
（……そうだ、教会でアレをやらかしたあと、騒ぎになるのがイヤだったから、外に出たんだ）
　はっきり覚えている。――ついさっきのことだから、当然なんだけれど。

　このカラダで過ごす感覚にも結構慣れてきた。最初は小学校の授業と同じくらいで目の前がもやもやして、気を失うようにして元の世界に戻っていたけど、だんだんこっちにいられる時間が長くなってる……気がする。時計があるわけでもないので、本当に気のせいかもしれない。

　目を開く前のことを忘れてるわけじゃない。夢の狭間で、天使と話をしたことも覚えている。教会での出来事を、とても恥ずかしいと思っていたことも。

　――でも、いざこのカラダに戻ってみると、人間として感じていた恥ずかしさは全く無くて、逆に誇らしさが胸を満たしてくる。

（そうだ、教会の人だって褒めてくれてたし。恥ずかしいと思う方が、どうかしてるんだ）

　記憶にある感情とは真逆のことを考えている。人間だったときのほうが不自然じゃないか、と。

（こっちの自分の方が、もっと自分らしい気がする。……いや、というか、今までいた世界のほうが、幻だったんじゃないかな？）

　自分はずっとこの世界にいた、そんな感覚が心のどこかに染み付き、疼（うず）いて、頻（しき）りに存在を主張してくる。……心？　どっちかと言えば、カラダのほうかもしれない。それを確かめようと両脚を踏ん張り、飛び跳ねてみる。背中の翼が無意識のうちにはためくのが分かる。

　ツノのてっぺんから、シッポの先っちょまで、いまここにこうしてある、〝ぼく〟のカラダ。

　あの教会を出てからここに歩いてくるまでの記憶はしっかりと連続していて、その間のどこかで〝むこう〟（元の世界のことを、無意識にそう呼んでいた）へ行ってまた戻ってきた……なんて言うほうが、むしろ嘘臭く聞こえる。

　ぼくの、カ、ラ、ダ。

静かに流れる小川に映る、それを見てみる。
そういえば、こっちで自分の顔とカラダを見るのは初めてだ。緑色の瞳が、こちらを見返す。
予想はしていたけれど、いまのぼくは周りのヒトたちとほとんど違わない、トカゲみたいな顔立ちだ。ツノと翼が生えた、青紫色の爬虫類。
……ドラゴン、なんて自分で言うのは、少し気が引けるけど。
小学生だったぼくとは、もちろん比べものにならないくらい背が高くて、細身だけど筋肉は結構しっかり付いている。胸とかお腹とかにも、いくつも割れた形がくっきり見えていて、前に動画で見ていた戦隊モノのヒーローみたいだ。
――いや、どっちかというと、怪人のほうかもしれない。
股間は相変わらず、つるつるのまま。筋肉と筋肉の間に、ほんのり薄い色の付いた線が一本通っているだけで、ここからあんなにでっかいちんちんが出たなんて、それこそ夢みたいだ。

「ん？　……んん」
気のせいかな？　最初に自分の腕を見たときより、なんとなく太くなってるような気がする。
腕を曲げたり、伸ばしたり、試しに力こぶを作ってみたり（思ったよりも大きくて驚いた）、よくよく眺めてみたけれど、結局ぼくの直感が正しいのかどうかは分からなかった。
そもそも、あの丘で初めて目が覚めて、町へ来てここに至るまでに、こっちの時間だとまだ一日も経っていない。そんな短時間にカラダが大きくなるなんて、あり得るだろうか？
――考え付くことがあるとすれば、それこそ教会でのあの出来事くらい。
（気持ちよすぎて頭の中がぐちゃぐちゃだったけど、そういえば、白いのが出てる間、ずっとカラダじゅうがむずむずしてたなあ）
その快感を思い出すだけで、股の間から熱いモノがどくどく湧いて来そうだったので、頭を振ってなんとか考えを逸らすことに成功した。

（それは置いといて……天使が言ってたように世界を知るためには、どうしたらいいかな）

　そんな風に考え事をしながら、町の道を歩く。教会での出来事はまだ周囲に知れ渡っていないらしくて、誰かに呼び止められることもない。……と思っていたら、見も知らないおじさんがぼくに向かって手を振ってきた。

「おうい、そこの兄ちゃん！　いいガタイしてるねえ」

　一瞬、自分が呼ばれていることに気付けず、周りをキョロキョロ見てしまったけど、かれは確かにぼくの方を向いて、ニカッと笑った。

「ぼ……オレのこと？」

　なんとなく〝ぼく〟は似合わない気がして、ちょっと格好をつけてみる。

「おうよ、見たとこ結構若そうなのに、しっかり鍛えてあるだろ。筋肉のご加護が眩しいね！　兄ちゃんは旅のヒトかい？」

　そう言って笑うおじさんも、十分マッチョだ。太い首に掛けた布きれで額の汗を拭う様子は、工事のおじさんっぽくも見える。

　旅。そうだ、あの天使はぼくに「旅をしろ」って言ってたっけ。でも、ただ散歩してるだけじゃ旅にはならないだろう。

　それに、旅の目的は？　身支度は？　どこへ行くにしたって、お小遣いもないし――

「――ねえ、おじさん。お、オレ、旅のためにお金を稼ぎたいんだけど、なにか知りませんか」

　ぐるぐる回る頭の中が口から飛び出すように、言葉がついて出てきた。

「そんならちょうど良いや。荷物運びの仕事はどうだい？　森で伐（き）った丸太とか、川で捕れた魚を運んだりね。手紙やなんかを届けることもある。なあに、兄ちゃんならきっと余裕さ」

「ん……」

　正直、一瞬迷った。頭の中では人間の子供のままのぼくが、絶対キツいよと喚いている。

でも、頭のもう半分は、このカラダのぼくは、おじさんの言葉にうんうんと強く頷いていた。
――いまのぼくはデカいんだ、と。
だからぼくは、おじさんの申し出を受けた。
「よしきた。仕事場に案内するよ！」
　そのまま連れて行かれたのは町外れの一角で、倉庫らしい小屋がぽつんと建っている。
「それじゃあ今日は、ここに置いてあるモノを運んでもらおうか。最初は届け先の案内がてら、俺も一緒に運ぶから、いくつか荷物をここまで持ってきてくれねえかい」
　そう言われて小屋に入ったら、形も大きさも様々な包みとか箱とかがずらっと並んでいて、ちょっとした壮観だった。
　その中から、いかにも重そうなやつを選んで担いでみたけど、見た目から想像していたほどには重くなかった。
（あれ、案外余裕だな……何回も来るのも面倒だし、もう一、二個持って行くか）
　適当に大きめの荷物をいくつか抱えて戻ると、おじさんは少しびっくりしたように目を丸め、ややあって、ガハハと笑い出した。
「いや、たまげたねえ。そんなに一気に持ってこれるなんて。若さのチカラってやつかい？」
　……そんな風に言われるとは思ってなかったけど、悪い気はしなかった。
　実際、重い荷物を運んでカラダを動かすのは、予想よりも遥（はる）かにラクで、それどころか無性に楽しかった。
　汗をかきながら、全身にチカラを込めるのが気持ちいい。見るからに重そうな荷物が、それだけで軽々と持ち上がる。
（カラダが、喜んでるみたいだ――）
　暖かな日差しと爽やかな微風のなか、えっほ、えっほと声を上げながら、裸の肉体を汗だくにして道を歩くのが、こんなに気持ちいいなんて。

「助かるよ。本当にいい働きっぷりだねえ」
気持ちいい、だけじゃない。役に立ってる。感謝されてる。そのことが、とても嬉しい。
そんな風に感情がどんどん昂ぶってくると、つられて股間も元気になるみたいだ。こないだ見たような、あのでっかいちんちんが膨らんで、割れ目の中がもぞもぞして、股間まわりの肉がぷっくりと盛り上がりはじめるのが分かる。
……服を着てないから、外からも丸見えだ。
「んッ……フウ……」
重い荷物を持ち上げ、運ぶ。広い大地を踏み締め、歩く。肩や腕や、胸や腹や、腿や尻や、至る所の筋肉が、ぎゅむっという音が聞こえるくらい、収縮と膨張を繰り返す。
気持ちいい。気持ちイイ。汗ばむぼくの青いカラダから、湯気がむわっと立ち昇る。
どこか甘酸っぱい、自分の汗の匂い。とても良い匂いだ。そう考えると余計興奮してしまう。するとまた匂いも濃くなって、鼻息も荒くなる。
そして、不思議なことに、興奮とむらむらが増せば増すほど運ぶ荷物はどんどん軽くなっていくみたいだった。
「へへ、へへへ」
気持ちよさと高揚感ですっかり緩んでしまい、バカになったみたいな頭の隅っこで、いつしかふと気付いた。
(荷物が軽くなってるんじゃない。ぼくが、ぼくだ)
ぼくの筋肉が増えていってるんだ、と。
じわじわと、でも着実に、こうしてエッチな気分になるごとに、ぼくのカラダはむくむくと成長し、デカくなっていく。

＊　＊　＊

「肯定。あなたのお考え通りです」
夢の狭間で天使は言った。

「あなたの魂が高揚すればするほど、あなたのカラダもさらに大きく、強くなっていくでしょう。その循環の果てに、山のような巨体となったもの――それを、敬意を込めて〝巨竜〟と呼びます」

またこんな感じで、かなり大事っぽいことを後から説明される。この天使には、改善だとか反省だとかいう機能はないのだろうか。

「補足。――あなたは、世界に溜まった淀みを吸い上げ、自らの血肉に変えることができます。のみならず、それを再び世界へ循環させることで、停滞してしまったあの世界を正常に進めることができる……恵みを巡らせる、それこそがあなたの、巨竜のチカラなのです」

……かといってちゃんと説明されたとしても、天使の言葉は難しすぎて、よく分からないことだらけだったし、夢の中だからなのか、意識もふわふわもやもやして、まともに聞いてるのも大変だった。

「もっと簡単に言ってくれないと分かんないよ」

「失礼しました。回答調整中……完了、再提示。お願いしたいことは、以前お伝えした通りです。世界を旅し、色々な場所を訪れて、巨竜の奇跡を示してください。その道のりこそが、世界の復活を言祝ぐ祭りとなるのです。そして――」

ちっとも簡単に言ってくれない。意識の方も限界だった。瞼がふっと閉じると、そのまま、意識も……

＊＊＊

「見つけた……！　こんなところにいたんだね、アニキ！　ずっと、ずっと、会いたかったよ!!」

いつも通り、荷物運びの仕事をしていたとき、背後から甲高い声がした。振り返ってみると、むこうでのぼくよりはちょっと大きいくらいの黄色いカラダのこどもがそこにいた。

「わ、びっくりした。えーと……ごめん、ヒト違いじゃないかな。ひょっとして、迷子とか？」
　ぼくにこんな知り合いはいないし、そもそも〝アニキ〟なんて呼ばれたことは一度もない。小さい仔みたいだし、きっと誰かと見間違えたんだろう。
　……そう思ったんだけれど、かれはぶんぶん首を振って、ぼくのシッポに縋りついてきた。
「違うよ！　言ったでしょ、オイラ、ずーっとアニキに会いたくて、探してたんだよ。教会で奇跡を起こしたっていうヒトの噂を聞いたから、町中訊ね回って、で……やっと、ここで働いてるのを見つけたんだ！」
「教会……ああ、そっか」
　シッポから伝わるかれの重みに内心どぎまぎしながら、ぼくは呟く。結構目立っちゃったし、誰かが追いかけてくるかもしれないとは思っていた。けれど、こんなに小さな仔が来るとは。一体なんの用だろう？
「ねえ、アニキは旅をしてるんだよね？　いつここを発つとかって、決めてる？」
「……もうそろそろ、かな。お金も貯まってきたし」
　この仔の目的はまだ分からないけど、ぼくは素直に答えることにした。旅についてはまだ、あんまりちゃんと考えてなかったから、目的地とかをそろそろ決めた方がいいのかもしれない。
「そっか、えへへ……ねえ、ちょっといい？　耳を貸してほしいんだ」
　精一杯背伸びをして、そんな風に言うかれを邪険に扱うこともできず、ぼくはそこに屈んでかれの頭と同じ高さに耳を持っていく。
「……ここだけの話だよ。オイラもね、アニキとおんなじなんだ」
「同じって、旅をしてるってこと？」
　そう訊ねると、かれは笑って答える。
「うん。でも、それだけじゃないんだ。見てて、んッ、んあ、ほら――」

仔竜はぼくの目の前で、股間の割れ目に手を突っ込み、気持ちよさそうな顔でこっちを見る。

突然のことにぼくはかれを止める暇もなく、ただ呆然とそれを見ていた。……すると、その割れ目(スリット)の奥から、かわいらしいカラダに似合わない立派なちんちんが、にゅるっと顔を出す。

息を弾ませ、ぬめらかな粘液を纏(まと)う肉の塊を見せつけながら、かれはより朗(ほが)らかに笑う。

――えっちで抗いがたい、オスの香り。

「ね、どうだい。これが証拠さ。――オイラは巨竜の、最後の生き残りなんだ」

「お、おお……」

人前で急にちんちんを出す仔竜の姿に気圧(けお)されて、そんな微妙な声しか出なかった。

でも、実のところ、そんなことに驚いているのはこのカラダの片隅にあるちっぽけな人間の心だけで、竜としてのぼくは、とうの昔にその振る舞いを当たり前のことだと受け入れているようだった。

それに、かれの股間を見ていると、ぼくまでうずうずしてきて、教会での出来事が頭の中で鮮やかに再生される。

――あれは、本当に気持ちよかった。

「前に父ちゃんが言ってたんだ。いつかきっとオイラの前に、巨竜の奇跡を起こす者が現れるって」

嬉しそうな笑顔のまま、かれは言う。

「オイラはそれを信じて、心に決めてたのさ。もしも、そのヒトに会えたら、齧(かじ)り付いてでもついて行くんだ、ってね」

そして、筋肉で太くなったぼくの脚に抱きつくと、カラダ全体をぎゅっと押しつけてくる。

かれの体温は思ったよりも高く、脚を伝ってなにかじんわりと暖かいものが満ちていく。

……悪い気分ではなかった。ぼくのシッポがびくりと跳ねて、空気をゆらゆら掻き混ぜる。

「だからね、奇跡の話を聞いて、ここで働いてるアニキを見つけたとき、オイラは確信したよ。実は一昨日くらいから、アニキのこと見てたんだ。カラダがどんどんデカくなっていくのも、ね」
かれの口調はどんどん熱を帯びていく。
「もう絶対、間違いなく、アニキは巨竜の再臨なんだよ。……ねえ、お願い。アニキの旅に、オイラも一緒に連れてってよ」
ぼくを見上げる仔竜の目は、夕焼けみたいに燃えるオレンジ色の瞳は、この上なく真剣で、涙ぐんでさえいた。
対するぼくは――正直、どうすればいいのか分からなかった。天使には旅をしろと言われていたけど、どこに行く当てがあるわけでもない。
(でも、この仔と一緒なら――)
かれは自分を、巨竜の生き残りと呼んでいた。それなら、巨竜のこととか、世界のこととか、ぼくがまだ全然分かっていないことについても、色々話してくれるかもしれない。

「――いいよ。旅の仲間なら、ぼ……オレも、欲しかったんだ」
ぼくが言うが早いが、わあっと声を上げて、かれは全身で喜びを表現する。
「そうこなくっちゃ!! よろしくね、アニキ!」
「うん、……」
そのとき、ふと思った。
(ぼくがこの世界のことをよく知らないのは、最初から隠さないほうがいいかな。……だけど、いきなり〝他の世界から来た〟とか言っても、混乱させちゃうだろうし)
「……ひとつだけ、いいかな。オレ、実はここに来るまでの記憶がないんだ」
それで結局、ちょっぴりウソを吐くことにした。
かれは、きょとんとした目でぼくを見ている。
「だから、色々と知らなくて、変なことを言うかもだけど。その分、きみに教えて欲しいんだ。巨竜のことも、それから、きみのことも」
――かれは目をまん丸にして、驚いていた。

＊＊＊

世界に留まれる時間は、錯覚なんかじゃなく、いまや明らかに伸びてきていた。

半日が一昼夜に。三日が五日に。今回はまるまる十日も竜のカラダで過ごしている。

……それでも、目覚める時間は変わらない。

〝むこう〟へ戻れば、いつもと同じ朝が待っているだけ。この世界で過ごした十日分の記憶は、たった一晩の夢みたいにどこかへ行ってしまう。ぼんやりと、ただなんとなく、気持ちよかったということを覚えているだけ。

ぼくたちは金色の丘を歩いていた。

町からは結構遠い、まだ足を踏み入れたことのない辺りだった。ススキみたいな植物が一面に生えている坂道。かれの歩幅はぼくとは全然違ったので、いまぼくはかれを肩車している。

その重みがぼくの肩にはちょうどいい。

当然、かれは素っ裸だから、首筋にぴとっと股間の割れ目が直に当たるんだけれど、ふたりとも全然気にはしなかった。

……むしろかれは面白がって押しつけてくるぐらいだったし、その感覚がちょっぴりクセになりそうだったのも事実だ。

ムルトとの出会いのあと、ぼくはおじさんに事情を説明し、かれと旅に出ることにした。

とはいえ、自分とかれが実は巨竜だ、なんてことは言わずに、ただ〝兄弟で聖地を巡る旅をする〟という設定にしていた。

「そいつは感心だ、兄ちゃんの筋肉はまだまだ大きくなれそうだし、きっと巨竜さまのご加護があるよ、そうに決まってらあ」

突然仕事を辞めると言ったのに、おじさんは怒るどころかそんな風に喜んでくれて、今まで働いた分のお給料に、ちょっと上乗せまでしてくれた。

　そうして今ぼくたちは、町から北に向かって歩いているところだ。行く当てがないとかれに伝えたら、「行ってみたいところがあるんだ」と言われたので、案内をお願いした。

「それじゃあ改めて。オイラはムルトって言うんだ。アニキは……」

　肩の上から仔竜が尋ねる。

　ぼくが答えをためらって口を噤んでいると、かれは思い当たったように言葉を続けた。

「……そっか、記憶がないんだよね」

　どうやら、良い具合に納得してくれたらしい。

「名前なんて、好きに呼べばいいよ。なんなら、きみが付けてくれてもいい」

　そう答えながら、自分のウデを眺めてみる。力仕事を続けたり、ひとりで股間をいじったりしているうちに、筋肉がどんどん膨らんで太くなってきた。もやっとした青だった肌の色も、少しずつ黒ずんで、青紫っぽくなっている。

　むこうでの、人間の名前は好きでも嫌いでもなかったけれど、いまこのカラダをその名前で呼ばれると思うと、無性に恥ずかしいというか、なんとなく厭だった。

「ううん、名前は大切だってば。オイラのも、父ちゃんがくれた宝物なんだ。巨竜の歴史とか伝説とか、大事なことはみーんな父ちゃんに教わったんだよ」

　ぼくの肩の上で、小さなドラゴンはどうやら胸を張っているらしい。顔は見えないけれど、きっと自慢げに鼻を膨らませているのだろう。

「だからアニキにも、きっとふさわしい名前があるはずさ」

「……そういえば、きみはどうしてオレのことを〝アニキ〟って呼ぶんだ？」

　そう訊くと、かれは面映ゆそうな声で笑う。

「だって、巨竜はみんな家族みたいなもんだから。オイラはそう思ってるんだ」

「家族、か……」

……正直、それはあまり良いイメージのある言葉ではなかった。

あのひとの声が、また頭の中で響く気がする。ぼくが少しでも楽しそうな表情をしていると、真顔で「どうして？」と尋ねてくる声。ぼくはもちろん、それに正しく答えなきゃいけない。精一杯謝って、相手を刺激しないように。

この世界で、立派な竜のカラダになってまで、そんなことを思い出している。そういう自分がどうにも情けなくて、きっかけになった仔竜に対してさえも、漠然とした不信感を抱きそうになるありさまだ。

（でも、もしも――）

もしも、あのひととと違う家族の形があるなら。

そんなことは今まで考えつきもしなかった。それがどんなものかも分からない。

……でも、いいな、と思った。

「この辺りは木とか草とか、いっぱい生えてるし、ヒトもたくさん住んでるでしょ。こんなに豊かなのは、ここが〝巨竜の臥所（ふしど）〟……〝竜のおくつき〟？　……だからなんだってさ」

そう言って、仔竜は辺りの風景を指差す。

ぼくが本当にまるっきり何も知らないので、最初はちょっと、がっかりしてるみたいだったけど、こんな風にあれこれ説明してくれている。それがとてもありがたい。……自分でも言葉の意味がよく分かってないのか、どうもあやふやな口調だったけど。

「それも〝父ちゃん〟から聞いたこと？」

「えへへ、そうだよ！」

嬉しそうな声色がさらに弾む。それからも、〝父ちゃん〟との思い出とか、故郷の村でどんな風に暮らしていたのかとか、かれは事細かに教えてくれた。キラキラ輝くみたいなその声を聞いていれば、ぼくにも分かる。……それは、きっとすごく大切な思い出なんだろう。

ぼくにはそれが羨ましい。でも、ずるいとは思わなかった。かれと一緒にいると、どうにもそんな悪い気持ちにはなれなかった。

いろんなことを話しているうちに、ぼくたちは丘のてっぺんに着いた。低くなり始めた太陽に背中を照らされながら最後の坂を登り切ると、これから辿ることになる道が、目の前に広がる。

下り道の先へ目線を遣るほどに緑はまばらになっていき、遠くの方ではついに消え去って、赤茶けた岩と砂ばかりの荒れた大地が、はるか彼方まで続いていた。

「――っ」

「これがオイラたちの世界だよ。巨竜の恵みが行き渡ってるところは、もう少ないからね」

予想もしなかった風景を見て絶句するぼくに、ムルトは真面目な声でそう言う。

「巨竜のチカラはね、産み出すチカラなんだ。それがないと土を耕しても草は生えてこないし、生き物も育たない。だから、オイラたちが――アニキとオイラが新しい巨竜になって、世界を変えるんだ！」

力強くそう言ったムルトに返事しようとして、ぐぅー、と妙に低く響く音がした。……ぼくのお腹の音だった。

「……悪い、なんかお腹が空いてて」

「もうっ。オイラの話、聞いてた？　へへっ、まあいいや。それならキスから始めよっか！」

かれは肩から、くるっとぼくの目の前に回り込むと、目と目を合わせて、にっこり笑った。そのまま徐に、真っ正面からぼくの鼻先へと潜り込み、口の中にベロを入れてくる。

（あ……これ、はじめてのキスだ……）

そう意識すると、かれと繋がっている口元が、かっと熱くなるような気がする。さっきふたりで分けて食べた、果物の味がまだ少し残っている。

――それは、ねっとりと濃厚で、ちょっぴり甘い味だった。

「んっ、ぷは。どう？　巨竜は、交わりあうことで大地のチカラを引き出せるんだ。要するに、エッチすればするほど、元気になるってこと。オイラたちも、この世界もね。良いこと尽くめでしょ？　何より気持ちイイし、ね！」
「ほ、本当だ……」
　突然のことだったので、まだ少しドキドキしている。お腹が鳴りを潜めたかわりに、胸の辺りがじんわり熱くなってきて、その熱がそのまま、カラダの下の方にまで伝って……
「あれー？　でもアニキってば、まだまだ満足してないみたいだね？」
　いつの間にか足元に降りていたかれは、赤く色付きだしたぼくの股間を撫でながら、いたずらっぽく笑う。
　割れ目（スリット）からはすでに、前に見たあのでっかいモノが飛び出ていた。ぎんぎんと、湯気が立つほどに膨張し、熱くなって。
「わ、これは……その、なんでこんな……」
「なんでって、巨竜はそういう存在だからね」
　お腹がいっぱいになったら恵みのチカラが湧くし、恵みを巡らせればお腹も膨らむ、それが巨竜なんだと仔竜は言う。〝恵み〟というのがえっちなこと、という意味だろうか。これじゃまるで無限ループみたいだ。
（でも、それを続けてカラダに収まりきらなくなったエネルギーは、どこへ行くんだろう？）
　……そんなことを考えているうちに、満面の笑みを浮かべたムルトがぼくに告げる。
「それじゃ、アニキの準備もばっちりみたいだし、いちばん美味しいヤツ、ヤっちゃおうか！」

＊＊＊

夕暮れの下、静かに揺れ動くススキの間で、ぼくたちは抱き合っていた。

「ね、ここに……まず、指を挿れてみて」

「ん……」

　求められるままに、ぼくはかれの股間に手を伸ばし、ゆっくりと沈めていく。火照った顔のかれが熱い息を吐くごとに、ぼくの指はもっと深くへ、ねっとりと絡みつくかれの奥へと進み、そこで大きなカタマリに出会った。

「んにッ、……へへ、いらっしゃい！」

　ムルトに促され、それを指で掬って引き出せば、大きく脈打つ、かれのちんちんが現れる。

　それを見ていると、何も言われていないのに次にどうすればいいかが頭に浮かぶ。……いや、違う。どうしたいか。どうすれば、気持ちよくなれるか、だ。

「……ぁむ」

　ぼくは迷わず、それを口で咥えていた。

　汚いとか、臭いとか、そんな言葉はまったく浮かんでこなかった。牙の生え揃った口で傷をつけないようにだけ気を付けて、長い竜の舌でかれの性器をしゃぶり、舐め回す。

　キスよりももっと濃厚で、野性的な味だ。

「ん、ぅあ……オイラのちんぽ、美味しい？」

　聞かれるまでもなかった。だから、もっと激しく啜ることで、返事の代わりにする。

　それをしゃぶっていると、どんどん美味しい蜜が湧き出てくるようで、いつまでもそうしていられそうだったが、それだけじゃ物足りない。

　もっとたくさん、もっと深く、かれを味わいたい。口だけじゃ、その欲望に追いつかない。

　じゃあ、どこを使う？

　ぼくのカラダは、その答えを知っていた。

　さっきからずっとうずうずと待ち焦がれて、ぼくに行動を急かすモノ。それは、

「――オレのここに、挿れるよ」



　口からゆっくりと引き抜いたかれのちんちん。それはもはや、かれの胸まで届きそうなほどに育っている。見るだに巨大なそのちんちんを、ぼくは自分の股間、物欲しげに口を開く割れ目(スリット)に押し当てると、一気に奥まで突っ込んだ。

「んッ、あぁッ、がッ――」

「アニキ、すご、締まるッ――」

　ふたりぶんの喘ぎが混じる。ぼくのカラダに乗った小さな竜が、一心不乱に腰を振っている。

　それが何よりも愛おしくて、気持ちよくて、ぼく自身のモノも怖くなるくらい大きくなっている。

「ああぁー、ああああぁ〰〰……」

　かれにも遂に限界が来たのか、ひときわ強い一突きのあと、ぼくの前穴(なか)に白くて熱い濁流が注ぎ込まれる。

　それが何か、実はまだよく分かってなかったけれど、このカラダにはそんなこと関係ない。ぼくのちんちんも、まったくお構いなしだった。

　頭の中が焼き切れるくらいの快楽と、壊れた蛇口みたいにあり得ない勢いで噴出する、白いベタベタ。……けれどもそれは、単に始まりを告げる号砲に過ぎなかった。

　それからぼくの大砲はもう何発も、何十発も、かれが腰を打ち付ける度に発射しまくったのに、まだ物足りないとでも言いたいのか、ぶるぶる元気に震えている。

「そうそう、こうやって、んッ、チカラを巡らせるんだ。アニキ、やっぱ最高だよ、すっごくイイよ！　あッ、オイラもまたイッちゃう、ん、んぃィッ!!」

「オレもッ、気持ちいい、あああッ、頭の中、いっぱいになる……!!」

　太陽も沈んだ丘の上、動くものは風に揺れる植物と、汗だくで汁まみれで息を荒げたふたりだけ。もう一度ゆっくりと口づけをして、ぼくたちは笑いあう。

「あんなに楽しいことがあるなんて、ちっとも知らなかった……すごく、満足って感じだ」

「オイラもだよ。こんなに激しくて気持ちいいのなんて、初めてさ」

ムルトは、仰向けに寝転がったぼくのカラダ（あんなことをした後だからか、またも一回り大きくなってるみたいだ）に乗ってそう囁く。

お腹に感じる、確かな重み。

「でね、こんな風にエッチするだけでもお腹は膨れるけど、筋肉をもっと付けるんだったら、もちろんお肉も食べなきゃダメだよ」

ぼくの胸に黄色い頭を押しつけて、甘え声を出しながら、かれは力説する。

「巨竜はちんぽのみにて生きるにあらず。筋肉と巨根の、両方が必要なんだ。なぜだか分かる？　それはね、こわすチカラと、つくるチカラ……その二つの象徴だからだよ。それがオイラたちの、大事な役割……ってわけ」

んはっ、と嬉しそうに鼻先を埋めたまま、だ。

ぼくの胸筋がそんなに好きなんだろうか。というか、こんなに汗まみれなのに臭くないのかな？　――まあ、今となってはぼく自身、この匂いにやみつきになってるんだけど。

空はもうすっかり真っ暗で、満天の星が光り輝いている。こんなにきれいな夜空を見たことなんて、一度もなかった。

「……星がいっぱいだ」

思わずため息を漏らして、そう呟く。

「アニキ、星が好きなの？　あ、ほら、あそこにイリキウムの八ツ星が見えるよ！　それからあれはラウルスの牙……」

ぼくが知ってるのとは全然違う星々を指して、ムルトは嬉しそうに説明する。

「みんな、昔にいた巨竜の名前なんだ。今でもオイラたちを見守ってくれてるんだ、ってさ。これも、父ちゃんに教えてもらった話なんだけどね」

なぜだか、かれの声がもっと聞きたくなって、ぼくはじっと仔竜を見つめる。
「そういう話、もっと知りたいな」
「ホントに⁉　じゃあ、ご要望にお応えして……えへん。むかしむかし、何千年も前のこと。まだこの世界に巨竜がいた頃にはね、ふたつの種族が世界を導いていたんだって」
壊して、創るチカラをもつもの。それと対を為す、護り、伝えるチカラをもつもの。一方の名前を巨竜という。そしてもう一方は――
その先に続く言葉を、ぼくは知っている気がした。
「――天使？」
テンシ、と発音したつもりで、けれど口から出ているのは、高く低く、異なる響きの連なる竜の唸り声。

おそらく、『天使』という単語は、ぼくらの話している言葉にはないんだろう。
ぼくはぼくの知らない単語を、『天使』だと認識してそう呼んだ、んだと思う。ぼく自身もそれが本当はどんな意味を持つのか、知らない。けれど、ムルトには通じたみたいだった。
「そうそう！　なぁんだ、アニキもそのことは知ってたんだね」
「あ、いや、ぼ……オレは、天使に連れられて、ここまで来たんだ」
とっさにそう答えると、かれは目を輝かせる。
「ええーっ、すごい‼　やっぱりアニキは特別なんだよ！」
ひとしきりはしゃぎ声を上げたあと、かれは昔話を語り始めた。
「巨竜と天使、チカラあるふたつの種族の他に、チカラをもたない種族――〝人間〟という名で呼ばれたものたちが、昔にはいたらしいんだ」

人間は儚く、か弱い存在だった。それ故に、ふたつの種族は共にチカラを合わせ、かれらを見守っていたのだという。

本来であればそのまま、何不自由なく生命を全うできるはずだった。しかし、人間はやがて罪を育む。己の無力さを呪い、身にそぐわない多くを望み、巨竜や天使のもつチカラを妬み、それらを我が物にしたいと思うようになってしまった。

いくつもの不毛な争いがあり、謀略があった。人間は互いに互いを騙し合い、潰し合うようになって、遂には世界そのものまでも汚し果て、その罪に染めてしまった……らしい。

結局、その事態を憂えた巨竜たちは、せめて世界の崩壊を防ぐために、自ら世を去ることを決意した。人間たちの求めたチカラを手放して全地に注ぎ、永劫に至るほどの寿命をも捨て、一頭また一頭と、その存在を消していった。

そして天使たちも、そのとき以降世界に直接関わることを禁じられ、ただ壊れかけた世界をなんとか維持するだけの存在になったという。

一方の人間たちは、巨竜が世界に分け与えたチカラをその身に受けることで、荒れた地でも耐えていける生命力や、精神面の強靱さを得た。

しかし「生命を生み出すチカラ」は大多数の巨竜とともに喪われ、ほんの僅かだけこの地に留まった巨竜の生き残りや、世界各地で没した巨竜の亡骸にのみ、かろうじて遺されていた。

「かくして人間は竜人に身を変え、犯した罪と過ちを自覚し、世界に最後の滅びが訪れるまで巨竜の教えを心身に刻んで生きることになった、ってわけ。以上、教会に伝わる昔話でした」

そう語り終えると、かれはこっちを見上げて、ふと真剣な表情を浮かべる。

「……ねえ、アニキ。もし良ければ、だけどさ。オイラと一緒に、〝巨竜の霊峰〟まで行こうよ」

世界を支えるほどに高い山々の連なり、その頂（いただき）に鎮座する神殿。そこに巨竜が持つチカラの源があり、そこで巨竜が交わったとき、世界に再び奇跡と祝福がもたらされる……らしい。

「立派な巨竜になるにはどうしたらいいのか、ずっと考えてたんだ。最初はね、誰かに教えてもらえるんじゃないか、って思ってた。立派になるための方法を、そのための近道を」

でも、とかれは首を振って言う。闇のなかにあってもなお、その瞳は紅く燃えているようだ。

「アニキに出会って、父ちゃんに教わったことを思い出して、喋ったりして。それで、たぶん、分かったと思う。……オイラはもうとっくに、でっかい巨竜になるための方法を知ってたんだ。でも、目を逸らしていた。見えてるのに、見てないふりをしてたんだ」

そこで少し言葉を切って、弾む呼吸を整える。再びぼくを見上げるかれは、頭上の星々よりも輝く笑みを浮かべていた。

「アニキがいたから――巨竜のことを、教えて欲しいって言ってもらえたから、大切なことに気付けたんだよ。それでオイラ、思ったんだ。オイラとアニキなら、きっと伝説に残るくらいの巨竜になれるって。……だから、これからもたくさん食べて、たくさんエッチなこともして、ふたりででっかくなろうね、アニキ！」

# 四　翡翠色の旅路

最近、少しずつだけれど、夢の中の出来事が記憶の中に残るようになってきた。といっても朧気なのは相変わらずだったし、時間が経つとやっぱり忘れちゃうんだけど。

いま思い出せることと言えば、例えばぼくがあの世界でどんな姿になっていたか、だ。

あのでっかい、青紫色のカラダのドラゴン。びっくりするくらい強靱に育った筋肉。普段はつるっつるの股間。そしてそこから高く聳（そび）える、……ちんちん、というよりは、そう、ちんぽ。

そんな言葉を、ぼくはこれまで使ったことがなかったけど、あの仔はたしか、そう呼んでいた。

その顔や名前はぼんやり霞んで思い出せなくなってるのに、そんなことだけは覚えていて、ちょっと情けない気持ちになる。

それはそれとして、あの誇らしい肉の巨砲を表すには、その呼び名の方がしっくり来る。

（だって、――）

とぼくは、目線を下に向ける。パンツの中で縮こまっているのは、あれとは似ても似つかない、可哀想なくらいに小さな、ちんちんだ。

（あー……なんか、ヘンタイみたいだな）

トイレの中とはいえ、自分の下半身をじっと見つめてため息を吐くなんて、あの世界に行く以前のぼくなら考えられない。

こんなところをクラスメイトに見つかったら、なんて言われるだろう。……いや、何も言われないか。どうせ、無視されるだけだから。

（でも近頃は、みんなに見られてる気がする）

ずっと〝いないやつ〟として扱われていた、そのはずなのに、なんだか視線を感じるような、今までにはなかった違和感。
　けれどそれも、たぶん自意識過剰になってるだけだろう。あの夢の中で、ぼくは主役だったから。でもここでは、現実の世界では、ぼくは脇役、それどころかただの、背景の一部だ。

（あの夢を見るようになって、一ヶ月近くか）

　もう、と言うべきなのか、まだ、と言うべきなのか。十月が近付いてきているけど、気温は一向に下がらない。五年生のぼくらにとってはもうすぐ林間学校なので、教室のみんなはその話で盛り上がったりしている。
　現実でも家以外に泊まれる、それは何よりも嬉しいことだ。実際、ぼくも一ヶ月前までは、その日をずっと心待ちにして、指折り数えていたくらいなのだから。

　今ではもう、そこまで切羽詰まった気持ちは無くなっていた。夜になれば、この目を瞑（つぶ）れば、しばらくは思い悩むこともない。
　夢の世界なら、ぼくにも強いチカラがある。あそこでなら、ぼくは自由になれる。
　だから、それまでは。全部、全部、我慢だ。

　……自分に何度もそう言い聞かせて、ぼくはどうにか教科書と黒板に意識を向けようとする。なのに、ちっとも集中できない。
　今は算数の時間、先生は奇数がどうとか偶数がどうとか言っているけれど、ぼくの頭の中は青い竜の巨体のことでいっぱいだ。
　振り払おうとすればするほど、脳内に巣くうドラゴンは大きく膨れ上がる。まるで掛け算のように、筋肉の厚みも、全身の重さも、そしてちんぽの大きさも、二倍に、三倍に、もっと、もっと……

＊＊＊

その夜、あの仔が待つ世界に戻ろうとしたら、天使がぼくの意識を引き留めた。

光り輝くその顔は、なんだかいつもより心配そうな表情をしていた。困り顔、とも言える。

「謹告。ご留意いただきたい事項があります。目下の分析結果、あなたの魂は事前観測による推算以上に、世界との親和性が高かったようです。現時点における状況改善の進捗率は、想定を一割近く上回っています。現在の世界にとってこれ以上望むべくもない、理想的資質ではありますが……懸念事項提示、あなたにとっては、少々厄介なことになるかもしれません」

相変わらず難しい言葉ばかりではあったが、とりあえず意味が分かるところだけを拾う。

「厄介なこと、って？　世界を救えないの？」

「否定、その点については心配無用です。先程述べた通り、進捗はこの上なく順調ですから。ただ……」

天使は暫し言い淀んで、重苦しい口調のまま言葉を続ける。

「要注意。当初想定にはなかった危険性（リスク）が確認されています。夢での世界への滞在時間増加によって、現実でのあなたの身にも影響の還流（フィードバック）が生じる可能性がある、というものです」

「えっと、それはつまり、なに？」

ぼくがさっぱり理解できていないのは天使も分かってるみたいで、どんな風に答えるべきかと考えあぐねているようだった。

「――依頼。回答調整のため、関連情報検証にご協力ください。この身が把握しているところ、竜として過ごした記憶は、人間に戻った際には薄れて消えるとのことでしたが、その後変化はありませんか？」

「今でも、時間が経つと忘れちゃうよ。けど、覚えていられる時間はちょっと増えてるかな。ぼくがどんなカラダになってたか、とか」
　これくらいならまあ、ぼくでも答えられる。
「追加確認。近頃、カラダが大きくなったりはしていませんか？　声が低くなったりは？」
……思い当たることは、ないでもなかった。シャツやズボンがちょっとキツくなってるとか、風邪引き声みたいに喉がガサガサして変だとか。でも――
「――でもそれは、成長期って言うんでしょ。学校でも習ったよ。えっと、精通？　ってのも、ちゃんと……してた、し」
　あの白いねばねばのことを思い出す。ぐちょぐちょになってしまっていたパンツ。ちょっと生臭いけどなんだか癖になる……あの、匂い。
「限定的同意。成長期だからこそ、です。人間としても、竜としても、あなたは今後ますます、歯止め無く大きくなる恐れがあるのです」
　ぼくには、天使が心配することが未だによく分からない。ただぼんやりと聞くぼくを尻目に、天使は構わずしゃべり続ける。
「当然、巨竜として淀みを吸い上げるためには、世界との結び付きが強い方が有利です。反面、そのせいであなたの魂は、世界に留まる時間が逓増（ていぞう）傾向にあり、その増加量は既に、無視できないものとなっています」
　その声が微かに戦慄（わなな）いていることに、ぼくはふと気付く。
「警告。もしも、あなたと世界が一線を超えて繋がったとすれば、そのとき何が起こるか……この身にも予測できません」
「……どうして、そんな泣きそうな声なの？」
　項垂（うなだ）れて、跪（ひざまず）いて、天使は語る。
「大前提――この身は、ヒトを護ることを最も優先すべき事項、第一の存在理由としています。無論、あなたもその対象たる範疇（はんちゅう）に含まれます。――ですから、お伝えせねばと思ったのです」

＊＊＊

「こういうとき、アニキならどうする？」

　少しくぐもった声は、ぼくのちんぽを舐めるムルトのものだ。小さなカラダで抱きかかえるように、丁寧に味わってくれている。

「どう、って言われても……二つともやっちゃ、ダメなのか？」

　それはちょっとした暇潰し、他愛もない問いかけだった、と思う。旅の行き先とか、昼食のメニューとか、二つに一つ、どちらかを選ぶとしたら？　という、言ってしまえばその程度の言葉遊び。

「ダメだって、そんなのズルだよ。片方を選ぶなら、もう片方は手放さなきゃいけないの。ほら、アニキのちんぽをしゃぶったままだと、後ろに挿れてもらえないでしょ？」

「？　オレのなら、いくらでもあげるぞ」

　ふんっとチカラを籠めれば、仔竜のヨダレに塗れてふやけていたちんぽが、みるみる大きく、硬くなる。

「わー、そういうことじゃなくて！」

「欲しくないのか？」

「欲しいけど！」

　あの丘でムルトと約束をしてから数ヶ月。ぼくたちは一緒に、いろんなところを旅して回った。

　かれの言葉通り、そして天使がいつか言っていた通りに、この世界は……なんと言うべきか、元気がない感じだった。

　赤い大地、涸れた川、険しい岩山。生き物の姿もほとんど見えないくらい厳しい環境だったけれど、ぼくたちのカラダはそれに耐えられるくらい丈夫らしかった。それにお腹が減っても、ふたりで抱き合って〝恵み〟を分け合うだけで疲れも取れるし、体力も満ちてくるのだった。

「あれ……」
何度目かの交わりのあと、ぼくは気付いた。かれと一緒に寝転がっていた地面に、草の芽が顔を出している。周囲は煤けた色の荒地なのに、そこだけぽつんと一点の緑が芽吹いていた。
そのことをムルトに言えば、「ホントだ！」と歓声を上げる。
「アニキのチカラが強くなってきた証拠だよ！　この調子でいけば、きっともっと緑が増えていくはずさ」
そんな風にはしゃぐかれの褒め言葉を聞いて、ぼくは何も言わずに地面を見ている。
――何も、言えなかった。
ぼくはまだ、手放しで褒められることには慣れてなかったから。けれど、だから、かれと一緒にいるのは良いな、と思った。
（ムルトの望みを、やりたいことを、叶えたい）
……その思いが、ぼくの心に根を下ろし始めていることに、薄々ながら気付き始めていた。
世界を動かすほどの、巨竜になること。
それがかれの願いだと、ぼくは知っていた。そしてぼく自身もそれを願うようになっていた。
巨竜らしさとは何か、どんな振る舞いをすれば良いのか。分からないこと、足りないことは山ほどあったけど、ムルトはそれを補ってくれる。

＊＊＊

ある日ぼくらは「狩り」をしていた。大きな獲物を、自分たちの牙と爪とで仕留めるのだ。
ぼくは――むこうにいたままのぼくだったら、そんなの絶対にできっこなかっただろう。でもいまは、巨竜を目指して成長を続けているこのカラダは、喜んでチカラを振るっていた。
荒野にしぶとく生きる野牛のような動物が、オレとムルトの手に掛かると、あっという間に〝食肉〟に姿を変える。

先走りそうになる肉体をなんとか抑えつつ、ムルトの指示する通りに立ち回り、追い詰めた首筋に噛み付けば、盛んに迸る熱い命の血潮。

（狩りって、こんなに楽しいんだ）

　他者の生命を奪ったことに対する恐怖よりも、自分のチカラを余すところなく使えた、という喜びが、猛りが、背筋をぶるぶると震えさせ、タテガミを総毛立たせ、その先にあるシッポをうねらせる。

「やった、大成功だよ！　じゃあ最後に、命の恵みに感謝して……オイラのやり方を真似してみて！」

　ムルトに作法を色々と教わりながら、最初の数口は生のままかぶり付き（そうするシキタリらしい）、残りの肉はかれの持っていた香辛料とともに丸焼きにする。

　香ばしく焼けた巨大な肉の塊は、記憶にあるどんな料理よりも美味しくて、ぼくはムルトと一緒に、心ゆくまで堪能した。

「やっぱりお肉は最ッ高だね……こんなご馳走にありつけるのも、アニキのおかげだよ！」

「いや、ムルトが色々教えてくれたからだよ。狩りなんて初めてだったのに、まさかこんなにデカい獲物が手に入るなんて思わなかった」

　狩った当初は大きすぎるんじゃないかと心配していたけど、いざ食べ終わってみると、まだまだいくらでも腹に入りそうだ。

　……普段はガツガツ食べなくても良いだけに、ここぞというときの竜の食欲ってやつは本当に恐ろしい。

「今日はたっぷり肉も食えたし、あとで筋トレに付き合ってくれるか？」

「もちろん！　じゃあ今日は腕の日ね」

ムルトに言われて、普段からカラダ作りにも励むようになった。トレーニングのやり方も、ムルト先生直々のご指導だ。

胸も腹も背中も、腕も足も尻尾も、あらゆる部位を鍛えていく。ちょっとの運動をするだけでも、ぼくのカラダは覿面（てきめん）に反応して、面白いくらいに筋肉が増えていくのだ。

たとえば腕立て伏せ。青紫色の太い腕を地に突いて、上半身を沈めては持ち上げ、また沈めてを繰り返す。かれはぼくの背中に乗っかって、嬉しそうにそれを眺めている。……その重みがぼくの巨体にとってはちょうど良い。

無尽蔵と言えるほどの体力を持つこのカラダも、黙々とトレーニングを続けているうちに、滝のような汗をかき始める。

でも、だるさやしんどさは感じない。むしろ心地良い運動の余韻が全身を浸して、すっきりした気分になるくらいだ。

「へへ、筋トレのあとはやっぱり、コレがないとね」

汗だくになった胸の谷間や脇のくぼみから、むわっと立ち昇るぼくの匂いを嗅ごうと、仔竜がにじり寄ってくる。

「……本当にそれ、好きだよな、ムルト」

もはや抵抗は無意味なので、鼻息を荒くして抱きつく仔竜の好きなようにさせている。

「そりゃもちろん！　このために生きてるって言っても過言じゃないね!!」

そんなことを良い笑顔で断言するのもどうかとは思うが、いつものことなので、もう慣れてしまった。それに――

「こっちも欲しいんだろ？」

と、小さな変態のシッポを掴み、ぶら下げるようにしてオレの股間に近付けて、もう片方の手で汗の滲む割れ目（スリット）をなぞる。今なら、いつもより蒸れ蒸れだ。きっとムルトにはたまらないご馳走だろう。……オレにとっても、だけど。

「んは〰〰っ……!!　熟成したアニキの雄穴(ナカ)の臭い、最ッ高だよぉ……」

さっきまではまだ一応表情に余裕があったが、それも瞬時に吹き飛んで、もうすっかり蕩(とろ)けた表情になってしまい、呂律(ろれつ)すら怪しい。

自分でも、結構ニオうだろうなとは思ってたけど、そこまで夢中になられると、恥ずかしさも通り越してなんだか心配になるくらいだ。

「大丈夫か、ムルト？　ほどほどにしとけよ」

「えへへー、あー、幸せ……」

これ以上は、ムルトの正気が保たなさそうだ。

……どこかで水場を見つけたら、一度カラダを洗うのも良いかもしれない。

かくして散々スリットを嗅がれているうちに汗も引いてきたので、ぼくたちは就寝の準備に掛かっていた。

適当な岩陰を見つけて、邪魔な石は退かしたり、砕いたりして、即席の寝床を拵(こしら)える。

ふたりで眠るにはちょっとばかり手狭だけど、どうせ抱き合って寝るんだから、問題はない。

横になってしばらくすると、ムルトが小さく声を掛けてきた。

「ねえアニキ、まだ起きてる？」

「ん……？」

仔竜の声は、心なしか少し震えている。

「ごめんね。なんだかちょっぴり……不安で、眠れなさそうで。ううん。変だよね。アニキと一緒になって、もう心配する必要なんてない、はずなのに――」

言葉を重ねるうち、その言葉は涙に滲んでいき、やがて、しゃくり上げる声が響く。

「――オイラ、やっぱりずっとこのままなのかな。大きく……なれない、のかな。さっきだって、実際に動いてたのはアニキだけで、オ、オイラなんて、後ろから指図するばっかりで……」

ぼくの腕の中で肩を震わせ、涙と鼻水で顔をべたべたにする姿は、たしかに小さく見える。

だけど――
「大丈夫、だと思うよ」
気付けば、そう口にしていた。
「最初に会ったとき、ムルトの頭はオレの膝に届かないくらいだった、だろ。今は……ほら、スリットまで届いてるし」
どんな風に言えば相手を安心させられるのか、気持ちを伝えることができるのか、分からないなりになんとかして言葉を探す。
「それに、さ。ムルトも言ってくれてただろ。オレが大きくなってる、って。だったらムルトだって、一緒に大きくなってるんじゃないか？」
「えへ、そうかな……それならちょっと、安心、かな……」
いつしか、かれの言葉は途切れがちになっていき、やがてそれは安らかな寝息に変わった。
（大きくなりたいのは、ぼくも同じだよ）

心の中だけでそう呟く。だからこそ、ムルトの気持ちも痛いくらいに分かった。
（目が覚めて……この世界が夢になっちゃったら、この思いも薄れていくんだろうか）
そのことが心を締め付けるように痛くする。こんなに悲しくなるなんて、ここに来た当初は思いもしなかった。――けれど今は、ムルトの存在がぼくの心の中で、例えようもないほどに大きくなっていくのを感じている。
それは、つまり……
（この仔が好き、ってことなのかな）
ふと心に浮かんだその言葉に、自分でも驚く。でも、ぼくの腕の中で眠る仔竜の顔を眺めて、ふつふつと湧き上がってくる感情には、それが一番しっくりと合う気がした。

（そういえば、もう結構長いこと、むこうには戻ってないな）

＊＊＊

改めて数えてみたら既に四、五ヶ月くらい、ぼくたちは一緒の旅を続けている。
それでもムルトが言っていた〝巨竜神殿〟への道程は、まだまだ遠いようだった。
……歩こうと思えばいくらでも歩けてしまうのがこのカラダの凄いところなんだし、それは別に良いんだけど。
町があれば立ち寄って、ふたりでご飯を食べたり、仕事を手伝ったり。ぼくが前にやってたみたいな荷運びとか、建築とかの力仕事だと、どこへ行っても歓迎された。
ムルトに案内されて、教会へのお参りもした。巨竜にお祈りする儀式に参加して、時にはぼくたち自ら、〝奇跡〟を見せることもあった。
――と言っても、スリットに手を突っ込んで、ちんぽを勃たせて見せるだけ、なんだけど。
それでもこの世界のヒトたちは、泣くほどに喜んでくれる。
「そりゃそうさ。救いの御柱（みはしら）だ、って言ってたでしょ。みんなにとっては、このちんぽこそが世界を救うカギなんだよ」
上気した顔を綻（ほころ）ばせて、ムルトはそのカギを誇らしげに掲げてみせる。やっぱりいつ見ても美味しそうな色艶だ。……実際に何度も味見をしてるぼくが言うんだから、間違いない。

ある程度町での用事が終わったら、また神殿への道を歩いていく。町々を繋ぐ道は、道とは名ばかりの荒地だけれど、ぼくたちが交わり、恵みを巡らせることで、生命が芽生え、草木が茂っていくのだ。
「ね、見てよ。オイラたちの歩いてきた道が、はっきり分かるよ」



険しい山道の最中（さなか）、峠を越えようとしたとき、ムルトがそう言って背後を指差した。

振り返ってみれば、なるほど、かれの言った通りぼくたちの旅路に沿って緑が再生しているのがよく見える。

「キラキラしてる……まるで、翡翠（ひすい）色の飾り紐みたいだね。アニキの目の色と同じ、きれいで、命の輝きに満ちた色だ」

そう言うかれの夕陽色の目も、今まで以上に美しく、光り輝いて見える。

ここへ来るまでにふたりで何度も挿れあい、キスしあっているうちに、かれのカラダも少しずつ大きくなってきた。もうかれをチビと呼ぶことはできないだろう。

ひょっとしたら、この世界に来てすぐのぼくよりも、そろそろ大きくなる頃かもしれない。

この目の輝きは、その溢れるほどの生命力の現れだろうか。

（いや、それだけじゃない）

さすがのぼくにも、もう分かっていた。かれの目がこんなに美しいと思うのは、ぼくの心が次第に変わってきたから、なのだろう。

いや、もっとはっきり言おう。

（ムルトのことが――）

大好きだ。愛してる。かけがえのない存在だ。どんな言葉で言えばいいのかも分からない。それに、きっと、言葉だと全然伝えきれない。

だからぼくは、行動で示す。

この世界のヒトたちはみんなエッチなことが好きみたいだ。言うまでもなく、ムルトもそう。ちんぽを突っ込んであげるとすごく幸せそうな声を上げるし、ぼくの胸にむしゃぶりついてるときのかれは、ふわっと蕩（とろ）けた顔になるので、ぼくもつられて嬉しくなってしまう。

そんな風にして、かれと一緒にいろんなやり方でエッチを試すのが好きだった。

例えば、シッポを絡め合ってみたり、割れ目（スリット）どうしを合わせたり、そこから生やしたモノをぶつけ合ったり、それを挿れたり、挿れられたり。

キスも好きだ。厚い舌で牙を舐め合うと、竜と雄（オス）の豊かで濃い味がよく分かるから。ちんぽをしゃぶりあった後だと、あの美味しい精液の残り香まで味わえて、さらにお得な気がする。

「それにしてもアニキってば、最初に会ったときの倍くらいはデカくなってるよね」

ムルトはしみじみと感嘆（かんたん）しながらそう言う。

自分でも、びっくりするくらい大きくなったとは思ってたから、そうかな、とだけ答える。

「そうだよ！　この聳え立つちんぽ！　たわわな雄っぱい！　それから、山のような筋肉!!　これぞまさに巨竜、って感じ！」

……けれどこれは、ちょっと褒めすぎな気もする。まあ、嬉しいから良いんだけどね。

「……いつか言ってたこと、覚えてるか？　どっちかしか選べないとしたら、ってやつ」

「うん、それがどうかしたの？」

ぼくの腕の中で、ムルトがぼくを見上げる。

そのきょとんとした顔をみながら、ぼくは心に浮かんだ形のない思いを言葉にしようとする。

「改めて考えてたんだ。確かにオレは、何かを選ぶのが苦手かもしれない、って」

「へへ……アニキは挿れるのも挿れられるのも好きだもんね」

「好きだ。気持ちいいから。ムルトもだろ？」

「もちろん！　アニキとなら、何だって大好きだよ！」

「……オレもだよ。独りだときっと、選べないことが多いと思う。でもムルトとなら、何を選んだとしても、きっと楽しめる」

この旅で、ようやくそれがはっきり分かった。

だから――

「これからもずっと、一緒にいて欲しいんだ」

＊＊＊

目が覚める。

(あれ、ここ……どこだ……どうして……？)

どこだ、じゃない。ぼくの部屋だ。産まれた時から知ってる古アパートの、見慣れた一室。

半年近くも竜の世界で過ごしていたあとだと、自分のカラダを確かめるのにも時間がかかる。

(ぼくって、こんなに小さかったっけ……)

手足を動かす感覚や、周りとの距離の取り方、脳に染み付いているはずのそれらが上手く出てこない。眠気も相俟(あいま)ってもたつく肉体のなかで、股間だけが空気も読まずにやたらと元気だ。

……あっちでは、いつも咥えあっていた相手がいたはずだ。でもここにはいない。大事な、とても大事な相手だったはずなのに、名前すら思い出せない。

ここにいるのは、ちっぽけな人間の少年がひとり、ぼんやり寝惚(ねぼ)けて座っているだけ。

「うー……」

物足りない。何が？　何もかもが。頭の中に残っている、竜だった自分のカラダをおかずにちんちんを弄(いじ)ろうとしても、チカラがみなぎることはないし、筋肉が発達していく感覚もない。

それに、何度試してみても不完全燃焼ばかりで、いつまで経っても限界まで気持ちよくなることはできずに、却ってどんどん溜まっていく気がしてならない。

(こんなに小さくて弱いカラダだから――)

――このときはまだ、気付いていなかった。ぼくはちっぽけどころか、夏休みの頃と比べれば見違えるほどに大きくなっていたということに。

背の高さも、そしてもちろん、あそこも。

なんとなく「あれっ？」と思うようになったのは、学校で背の順に並んだときだ。

一学期の頃は前から二番目くらいだったのに、あの世界に行くようになってから、ぼくはいつしか、いちばん後ろに並ぶようになっていた。

(これも、天使が言っていた「影響」なのかな)

まあ、わざわざ気にするほどのことでもないから、別に構わないんだけど。

そういう理由もあって、ぼくのことは色々とウワサになってるみたいだった。ぼくに対する扱いも変わって、今まで話したことなんかないクラスメイトから、おずおずと声を掛けられるようなこともあったし、逆にこれまでに増して接触を避けられることもあった。

どちらにしても言えることは、ぼくの印象が「どうでもいいやつ」から「なんかやばいやつ」に変わったらしい、ということ。そういえば、先生が授業中にぼくを当てるときも、決まってぎょっとした顔をするようになった。

それで困ることがあるわけでもない。むしろ、ぼくの自尊心が小さくくすぐられるくらい。

そうだ。あのひともぼくを怒鳴らなくなった。叩かなくなった。その代わりに、怯えたような目で見てくるようになった。

別にもう、どうとも思わない。あんなにもぼくの心で重荷になっていたあのひとの存在が、急に風船みたいに軽くなって、飛んで行って、そして——弾けたみたいだ。

(ああ、そうか。そりゃあそうだ)

今までは、一日たりともあのひとから離れることはできなかった。それが今では、一回眠るごとに丸々半年くらい、それとももっと長い間、悩みのタネは何もなくて、その代わりに大切な〝あの仔〟がいる世界で歩みを進められるのだ。

……その名前さえ、今ここで思い出すことができれば、もっと良いのに。

「なああ、この前の林間でさ……見ちゃったんだよ。あいつの、ほら、アレをさ」
「おれもおれも！　すげーよな、デケーよな！」
「えー……でもさ、プールのときは、そんなに気にならなかったけどなあ」
「そういやあいつ、最近やたら背が伸びたよな。キンニクも結構付いてた気がする」
「そうそう！　林間で風呂はいるとき、おれもびっくりしたもん。昨日風呂で見たお父さんのより大きかったかも」
「え、お前まだ父ちゃんと一緒に風呂入ってんのかよ」

ひそひそと、けれどもなんだか熱を帯びて、そんな風に盛り上がってるウワサ話を耳にする。

——アニキのちんぽ、でっかくてゴッゴッしてるし、イイ匂いだから、大好きだよ！　へへ、幸せだなあ……

これは〝あの仔〟の声なのだろうか。記憶の底から湧き出て、ぼくの頭の中で響いている。

——オイラ、父ちゃんと同じくらい、アニキのことも尊敬してるんだ。本当さ！

（もしもぼくに、お父さんがいたら——）
どうなっていたんだろう。一瞬、そう考えかけて頭を振る。やめておこう。考えたってムダだから。
あのひとの存在と同じ。もう、ぼくには関係のないこと。もう、気にしなくたって良いこと。
ぼくは——大きくなったんだ。夢のチカラで強くなった。そのはずだ。そのはず、なのに。

……けれど結局、ぼくはまだ、ただの人間だ。図体だけは一人前になったかもしれないけど、ひとりじゃ何もできない、相変わらずちっぽけな、ただの、こども。

性根のところはちっとも変わってないから、そんな弱っちいことばかりが心を揺さぶる。

（はやく、あの仔のところに行きたい）
（こんなぼくは、オレじゃない）
（ぼくのカラダを脱ぎ捨てて、オレのカラダに戻りたい）……

たった一日。起きてる時間にすれば、ほんの十五、六時間。それも既に半分は過ぎている。
それなのに眠るまでただひたすら長く感じる。待つだけの時間って、一体どうしてこんなにものろのろとしか進まないのだろう。

……あと少しの我慢。あの世界に戻るまでは、ぜんぶぜんぶ、ガマンだ。

# 五　黒曜色の神殿

　あのあと、どれくらい歩いただろう。数々の町と教会を経巡り、荒野の道なき道を進んで、ぼくたちはついに、〝巨竜の霊峰〟の麓にまでたどり着いた。
「あの頂上に、〝神殿〟があるんだっけ？」
　眼前を覆うのは、雪に覆われ白く輝く山々の連なり。そのなかでも一際高く天を指すのが、ぼくたちの向かう霊峰だ。
「うん！　あの山はね、遠い遠い昔——最初の巨竜、キンナモーム様がこの世においでだった何千年も前から、ずっと変わらずオイラたちの聖地なんだよ」
　いつものように教えてくれるムルトの声も、今日はいつも以上に張り切っている。
　ぼくたちは霊峰の頂上へ続く道を、ふたりでのしのしと踏み締めて登っていった。
　さすがは聖なる地というべきか、山裾一帯は豊かな緑に溢れていたが、上の方へ登るにつれて空気は薄く、植物もまばらになっていき、黒い岩肌や白い雪が目立つようになっていく。
　霊峰とはいえ立ち入りが禁止されているわけではないけど、これだけ険しい山道をわざわざ登るヒトは皆無に等しく、この道も長きに渡り誰も踏み入ることがなかったようだ。
　それでも、ムルトの言っていた何千年も前には、何頭もの巨竜がこの道を行き来したのだろう。
　ぼくらの足元には時折、整然とした石畳が敷かれ、道の脇には時折、柱か彫像らしきものの名残がぽつんと残されていることもあった。
「……すごい景色だ」
　思わず嘆息を吐いてしまうほど、そこからの眺望は素晴らしかった。麓にある人里の町並みや、遠くに広がる海の、陽光を受けて輝く水面。

やがてぼくたちは、霊峰のてっぺん、神殿の入り口へと近付いた。強大なチカラで削られた山肌に、黒く、重く、分厚い岩をいくつも積み重ねた、この上なく立派で荘厳な聖堂だ。

その一つ一つの岩まで丹念に磨き上げられていて、一体どれほどの労力が費やされたのか、想像もできない。

あんなにも険しい山道を登った先にこれほど大きな建物を造れる存在なんて、確かに巨竜を措いて他にはいないだろう。

「ついに来たね、アニキ！　……ウワサ通り、立派な神殿だ」

弾む呼吸のまま、誇らしげに鼻息を立てて、ぼくの隣にムルトが立つ。

かれは今やぼくとも肩を並べるほどに大きくなった。鬱金（うこん）色の肌は、たなびく雲海を抜けた青空のもと、煌めく陽光に照らされて艶やかに光っている。筋肉のハリも申し分ない。

「やっぱりオイラの直感は間違ってなかった。アニキを信じてついて来たから、楽しいこともたくさんできたし、大勢のヒトと恵みを分かち合えたし……みんな、アニキのおかげだよ」

ムルトの声が、長く伸びた耳にこそばゆい。

――ぼく自身、カラダの成長はまだ続いている。ウデに目をやれば、はち切れんばかりの筋肉にうねうねと血管が這っている。紫がかった濃い紺の体色。勃（た）ったときのちんぽも同じ色になる。

首元から胸筋、腹筋、スリットも越えて、太いシッポの内側までは、なめらかなブルーグレーだ。大きな翼の内側は、暗い赤色に染まっている。

「……オイラさ。ずっと、ずっと怖かったんだ。だってオイラ、チビだったでしょ。アニキに会うまでちっとも大きくなれなかったし。そりゃ、父ちゃんの言うことが信じられなかったわけじゃないけど……ね？」

かれはぼくのシッポを抱きながら呟く。

「でもね。アニキがいてくれたから、ここまで連れてきてくれたから、いまになって自分でも分かったんだ。オイラが教わった世界のこと、巨竜のこと、それから恵みを巡らせるってこと。その本当の意味、っていうのかな？　……へへ、思ってたより、ずっと簡単なことだったんだね。気持ちよくなる。デッカくなる。それでブッ放して、みんなにも気持ちよくなってもらう！　それだけなんだよ。アニキのおかげで、それに気付けたんだ！」

にこっと笑う顔は、太陽よりもずっと眩しい。ぼくはかれの、そんな笑顔が大好きだった。

そう、ここに辿り着くまでにも、ぼくたちは「世界に溜まった淀みを浄化する」とか天使が言ってた、巨竜の役割を果たして回っていた。立ち寄った先の教会なんかで、いろんなヒトにせがまれてエッチの相手をすることもあったけど、ぼくもムルトもそれは大歓迎だった。

……そんな風にしてここまで来られたのも、隣に大事な相手がいたから、だろう。

「オレだけじゃない」

胸の内に溢れる気持ちをなんとか言葉にして伝えたかったので、ぼくは口を開く。

「あのとき、ムルトがオレを見つけてくれたから。どんなときもずっと一緒にいてくれたから。……オレを、巨竜にしてくれたから」

言葉を続けるうちに胸に込み上げる熱いモノがついこぼれそうになったので、ぼくは慌ててあらぬ方向に視線を向ける。ムルトもどうやら顔を赤らめているらしい。

「そ、そんなの反則だよ、アニキ！　てっ……照れちゃうじゃんか、……もう!!　ほ、ほらっ、神殿に入ろうよ！」

そんな風にして、半ばムルトに押し込まれるような形になりながら、ぼくたちは旅の目的地に足を踏み入れた。

＊＊＊

黒く輝く石造りの正面から一歩内側へ入ると、ごうごうと吹き荒んでいた外の風音もぴたりと止んで、辺りを怖いくらいの静謐が包む。

天井は巨竜の基準からしても高くて、それを支える壁には昔の巨竜たちの姿を写した浮彫が一面に施されている。

「あれはラウルス様に、いと古きピペル様……間違いないよ！　この奥でアニキと交われば、巨竜のチカラが目覚めるんだ」

物知りなムルトがはしゃぎ声を上げる。

「そしたらこの巨竜たちがみんな、オイラたちを仲間として認めてくれる、ってわけだね！」

筋肉を誇示し、巨根を晒し、そしてまぐわいあう偉大な生き物たち。かれらの勇姿に見守られながら、ぼくたちは歩みを進めた。

やがて行き着いたのは、神殿のいちばん奥。

――もっとも神聖な、秘密の部屋だ。

それまでの通路とは違って明かり取りさえもないので、ぼくらの目ですらはっきり見えないほどに暗い。

中央部は祭壇のように少し高くなっていて、それを取り囲むように何体もの石像が安置され、その間に燭台が置かれているようだ。

そこにかがり火を点せば、揺らめく光が精緻に刻まれた石の筋肉をぬらぬらと照らし出し、まるで生命を吹き込んだかのようにも見える。

きっとこの祭壇で、遥か昔の巨竜たちは儀式をおこない、互いに精液をぶちまけあったのだろう。

そのときの匂いがまだ残っているかのような、濃密で、淫靡なふんいき。

ぼくとムルトは、その美しい像のどれよりも大きい。そのことが無性に嬉しくて、ぼくたちは顔を見合わせ、ニヤッと笑う。

そのままふたりは、部屋の中央、祭壇の前へ歩み寄り――

そして乱交がはじまった。



最初は口づけから。ねっとりと甘く舌を絡め、抱き合ったまま祭壇へ倒れ込む。お互いの鍛え上げた腹筋で、ボッキしたちんぽを擦るように刺激する。その快感はすぐにちんぽにも伝わり、みるみるうちにサイズが膨れ上がっていく。
「へへ、アニキのもオイラのも、本当にデカくなったよね。はむッ――」
言うが早いが、ムルトは巨大化したぼくのモノにむしゃぶりつく。もちろんぼくだって、我慢するつもりはない。すぐ目の前にまで来た肉の巨大な塊を、ぼくは愛しむように口に含む。
大好きな相手の、大好きな味。
とめどなく溢れる蜜塗れのその味を堪能して、まずは濃厚なミルクを飲ませあう。
「んぐッ、ぷは、ごくっ、んぐ」
「あむ、じゅる、んふッ――」
巨竜の与える恵みとは、この精液に他ならない。ぼくたちはそれを大量に出しては飲み続ける。
喉から流れ込む白い奔流は全身の隅々を巡り、そしてまたちんぽから噴き出していく。
繰り返すその快楽は、無尽蔵の体力と性欲を持つぼくたちにのみ許された至福の饗宴だ。
留まることを知らない甘やかな疼きに、ぼくたちのカラダもびくびくと喜んで大きくなる。
巨竜の名に恥じないよう、誰よりも、どんなものよりも強く、大きく、気持ちよく。
「あぁっ……アニキぃ……！　もっと、もっとちょうだいぃ!!」
快楽にふやけ切ったような声で、頭の中まで精液でいっぱいにしながら、ムルトがそう言う。
「オイラの、こと……めちゃくちゃにしても、いいからッ！」
そう言われたら、もう抵抗なんてできない。ぼくの股間に聳える巨竜の〝みしるし〟は一向に萎える気配もないし、ムルトの大好きなミルクだって、当然まだ何リットルでも出せそうだ。
……きっとそれはムルトも同じだろう。

ふたり分の汗と精液に塗れ、つやつやと照り輝くムルトの筋肉。それを見ているとどうしても堪らなくなって、ぼくは暫しちんぽから口を離し、その凹凸に沿って分厚い竜の舌で舐めなぞっていく。肉厚の翼、背筋に生えるヒレ、盛り上がる幾筋もの筋肉の山脈。

（……ああ、そろそろぼくの〝みしるし〟も、挿れるべきところに挿れてあげないと）

口やスリットも格別だけど、いちばん気持ちいいのはやっぱりお尻だ。うつぶせになったかれの短くも太いシッポを持ち上げれば、露になった尻穴が物欲しそうにぐぼっと口を開け、ひくひくと動いてぼくを誘う。

「へへへ、オイラのケツもアニキが待ちきれないってさ」

「それじゃあ……思う存分、たっぷりサービスしてあげないとな！」

意識しなくてもそんな言葉と笑みが漏れる。ぼくは勢いそのままその大穴に、自慢の竜根をためらいなくズッと突き立てる。

「がァッ、あー、デカぁい……！」

「まだまだ、もっとデカくなるぞ。——ふんッ、たぎって、きたッ！」

「んお、ご、んん——！　いいよぉ、アニキぃ、い、グゥッ!!」

石像たちをびりびり震わせるほどのものすごい咆哮とともに、ムルトの巨砲が白く濁った竜のタネをブッ放す。ふたりのカラダだけじゃなく、神殿の床までどろどろに汚しても、その熱量は衰えることを知らない。

いや、それどころか。筋肉と筋肉をぶつけあうたび、お互いの精液を浴びせあうたびに、ぼくたちはとめどなく大きくなっていく。尻の奥も、割れ目も、口の中も、カラダじゅうのあらゆるところで相手の出す全てを呑み込み、巡らせていくのだ。

揉みくちゃになって、どこまでがじぶんで、どこからがムルトなのかさえ分からなくなって、一緒にどこまでもどろどろに溶けていくような夢見心地に引きずり込まれる。
ぼくたちはその快感を全身で味わっている！
「オイラのナカのアニキ、どんどん、大きく、なってるっ」
「ムルトの筋肉とちんぽだって、さっきから膨らみっぱなしだぞ」
「へへ、ぐへへへ。じゃあ次はオイラがアニキをいっぱいにしてあげる番、だね！」
鼻息を荒げたムルトがぼくを裏返しにする。丸見えになった後ろの穴を、旅の途中で何度もムルトに耕してもらった肉の壺を、いまここでもう一度、大好きな相手が満たしてくれる。
気持ちいい。気持ちいいが増えると、筋肉が増える。筋肉が増えれば、ちんぽもデカくなる。筋肉とちんぽが大きくなればなるほど、もっともっと気持ちよくなれる。

ぼくたちの射精には、肉体の交わりを通じて吸い上げた〝世界の淀み〟も含まれているんだ、とムルトは前に言っていた。
溜まりに溜まったそれを、ぼくたちは全力で放出しあった。聖域の床も壁も、もうとっくに元の色が分からなくなっている。
淀んで停滞した世界を、ぼくたちのナカで浄化し、そこに新たな活力を与えて流し出す。それが白濁となってぼくたちふたりの巨根から噴き出ていく。神殿に染み付いた古代の香りと、それを覆って混ざる、新しいふたりの匂い。
いまここに再び巨竜が生まれたことを世界に知らしめるための、大切な儀式。やがてぼくは、部屋全体が光り始めていることに気付いた。
「奇蹟がはじまるんだ」
とろけた顔でぼくに跨る、ムルトが話す。
「巨竜の誕生を言祝ぐ奇蹟。世界に恵みを巡らせるための最初の第一歩。さあ、ここからが本番だよ、アニキ！　ここから――」

――意識が薄れ、そして戻る、あの感覚。

気が付けば目の前にあるのは、一面のはいいろ。なにもない世界。さっきまでの快感も絶頂も急に頭から剥ぎ取られて、戸惑うばかりの耳に聞き覚えのある呼び声が届く。

「……深謝、ご無礼の段はどうかご容赦ください。しかしもはや一刻の猶予もなかったのです」

そちらを見れば、何かを堪えているかのように険しい表情の天使がいた。

「究竟（きゅうきょう）、あなたの巨竜としての力量は今まさに汪溢（おういつ）し、世界の淀みはようやく解消され、正常に巡り始めています。あなたと共にいた巨竜の末裔も、無事に覚醒したことを確認しました。総括――あなたはこの身の付託に見事応えられ、余蘊（ようん）なくそのチカラをお貸しくださいました。……もう、ご心配には及びません」

天使が何かを喋っていたが、ぼくの頭はそれを理解できない。ぼくはただ、じぶんの手を見ていた。……巨竜のものとは似ても似つかない手。人間のこどもの、ちっぽけな手だ。

「でも、……そんな！」

なんとか言葉を返そうとして口を開いても、出てくるのは擦れた震え声だけ。

「ぼくは、まだ、あの世界をちゃんと最後まで見届けたいんです。たくさん、楽しい思い出もあるし、あの仔と……ムルトとだって、もっと話したいことが山ほどあるのに」

「――緊急。危機切迫時の特例により、対応を要請します。どうか、お聞き入れください。あなたの魂は、すでに許容限度上限まで巨竜と同一化しています。これ以上あそこに留まれば、あなたの存在まで塗りつぶされてしまいます。……もはや、取り返しがつかなくなるのです」

「じゃあ、せ、せめて、お礼とか……そうだ、お別れだけでも！」

　なんとか食らいつこうとするぼくに対して、天使は努めて頑(かたく)なな表情を保ったまま、難しい言葉を並べ立てる。

「現状、世界の停滞が解消されたことで、この領域における時流の特殊性――他の世界との乖離(かいり)はなくなり、同時性を回復しつつあります。換言、あなたが元の世界に戻られてもこちらの時は進み、あなたがこの世界に留まればその分元の世界でも時間が経過するようになるということです。……警告、これが最後の機会です。あなたの魂がいまここを離れなければ、あなたの元の肉体は魂を――生命を喪い、不可逆的な朽壊(きゅうかい)が進行してしまいます」

　天使の声はこんなときでも優しい。けれど、すこし震えていた。

「……どうして」

　ぼくはただ、そう呟く。それしかできない。

「ぼくにチカラがあるのなら、巨竜との相性が良いって言うんなら、どうしてぼくは最初から、この世界に生まれなかったんですか。どうして今までずっと、ぼくは、こんなにもちっぽけなカラダで生きてこなくちゃいけなかったんだろう。……そうじゃなきゃ、今こんな選択をさせられなくても済んだのに」

　途中から涙が溢れて止まらなくなっていた。泣きじゃくるぼくを、天使はただじっと見つめている。

「回答未定義。その答えは、この身には分かりません」

　硬い口調でそう告げて、しかしそれだけでは足りないと思ったのか、天使はゆっくりと言葉を続ける。

「推察――そこには何らかの意味があったと、解釈可能です。あなたの魂は、それほどまでに特別で……それだけに、些細な間違いのせいですべてが台無しになる危険性もありました」

　巨竜のチカラを持つ者が間違った道へ進めば、世界は再生どころか今度こそ滅亡してしまう。それを回避するためには、相応の時間と経験が必要だったのだろう、と天使は言った。

「ぼくが、間違わないために？」

　なんとかしてその言葉を理解しようとするぼくに、天使は真剣に頷く。

「付言。――これはこの身に与えられた権能を越えた私見に過ぎませんが――もしもあなたが最初から巨竜として生まれていれば、あなたはきっと最初から強く、成長するごとにより強く、ずっといつまでも〝強い〟ままでいたでしょう。弱さも、強さに憧れる気持ちも、それ故に過ちを犯す危険も知らぬままに」

　かれが口にする言葉は、なんだかいつもより分かりやすくなっている気がした。かれなりに、どんな言葉を使えばぼくにも理解できるのかを一所懸命に考えてくれたのかもしれない。

「所以（ゆえん）、あなたは弱くある必要があったのです。本当の強さを知り、真なる巨竜として覚醒し、同じ境地へ仲間を誘（いざな）うためには、却って弱さを、その重みを、そこから抜け出す術（すべ）を、知る必要があった……というのは、考えすぎでしょうか」

　所々で自分の言うべきことを探るかのように口を止めつつも、なんとかそこまで言い終えて、ちょっと恥ずかしそうに天使は微笑む。

　それを見たぼくも、頬が緩むのを感じた。

「かもしれない」

　天使が易しい言葉を選んでくれたおかげか、じっくりと考えてみたからか、かれの言いたいこともなんとなく分かる気がした。

「自省、この身が為すべき具申の範疇（はんちゅう）を逸脱しました。……あとはあなたの判断のみです」

　天使がぼくのことを真剣に考えてくれていることは明らかだ。それが伝わったから、ぼくも、ちゃんと正面から向き合うことにした。

「ありがとう、天使。でもきっと、ぼくの言いたいことも分かってくれてるんだよね。……あの世界に戻ることも、できるんでしょ？」

ぼくは、ぼくの手を見た。

「……肯定。ですが、これはこの上なく重要な選択です。あなたが得た肉体は、あの世界とあまりにも密接に結び付き、ふつうの巨竜をさえ凌駕（りょうが）する存在となっています。結果、あの世界が滅びるその日まで、あなたは――」
「良いんだ、これがオレのしたいことだから。生まれて初めて、自分がやりたいと思ったことを、自分で決めて、選んだんだ」

か細く小さな人間の手が、目の前でむくむくと膨らんでいく。熟れた果物みたいな、夏の空のような、鮮やかな色に染まっていく。

「最初は確かに、言われたから来ただけだったし、ぜんぜん訳も分からなかった。でも、ムルトがいてくれたから、一緒に世界中を旅してくれたから、オレは心から、この世界を救いたいって、思えたんだ。自分も、あの仔も、それから世界も、みんなが満足できる方法なんて、めったにないだろ？　――今のオレなら、それができるんだ。それに、ほら！」

驚き顔の天使に向けて、オレは腕にチカラを籠（こ）める。青く逞（たく）しく頼もしい、巨竜の腕だ。
「オレはもう、とっくに巨竜になっちゃってるんだし、巨竜のオレはワガママなんだ。もっと強くなりたい。もっと気持ちよくなりたい。もっと巨竜の数だってもっと増やして、世界を恵みで満たしたい。だからこれからも毎日、ムルトとヤりまくりたい。……な、単純だろ？」

にかっと笑ってみた。我ながら良い笑顔ができたと思う。

「いまはまだオレとムルトのふたりだけだけど、仲間はどんどん増えていくと思う。根拠はないけど、分かるんだ。ほんのちょっと先の未来のこととか、ね」

「――所感、それはきっと、あなたと繋がった世界の夢ではないでしょうか」

　天使がそんなことを言うのがなんとなく意外だったので、オレはふっと噴き出す。

「そうか、夢だってんなら、叶えないとなあ」

　オレにつられて、天使も笑顔になってきた。

それでいい。

「そういや、巨竜のチカラが蘇（よみがえ）ったら、また争いが起きたりするのか？」

「否定、その危険性は低いと評価しています。現在の世に住むヒトたち、所謂（いわゆる）竜人は、かつて持ち得なかった巨竜の遺産を既に手にしているのですから」

「そうだよな。……それにみんな、チカラがどうのっていうより、オレたちのちんぽの方が気になるみたいだったしな」

　旅の途中、いろんなヒトたちに散々ちんぽを突っ込んであげたし、それでみんな幸せそうに喘（あえ）いでいたのを、オレは目の当たりにした。

　だから間違いはない。オレがこの足で歩み、この手で触れた、世界。

　世界（みんな）をもっと幸せにするのが、巨竜（オレ）の仕事だ。

「なあ、天使。これからも会えたりするかな？」

「――回答。以前にも申告した通り、この身は世界の秩序を維持し、保全するという役割上、世界の中に住まう方々とは直接接触することができません。無論、それは巨竜といえども例外ではありません。ですが……」

　天使はもっともらしい表情を浮かべながらも、声色に機転を滲ませる。

「……代案提示。あなたのチカラを使い、夢を航(わた)ってこられたのであれば、〝世界の中〟という制限の条件には合致しませんので、言葉を交わすことも可能です」
「そうか……それなら、良かった」
　ふたりで顔を見合わせて、笑みを浮かべる。天使をずっと悩ませていた心配事も、どうやらこれでようやく片が付いたらしい。
「前にムルトから聞いたんだ。昔、この世界は巨竜と天使、ふたつの種族が導いてたんだ、って。だったら、これからはオレたちが天使と一緒に世界を見守っていくわけだろう？　オレたちがこわして、オレたちがつくった、この世界を。だから、そうだな――」
　オレは天使に向けて、片手を掲げた。
「――これからもよろしく、天使！」
　そして天使は、おずおずと、けれど隠しきれない喜びを表情に宿して、微かに光り輝くその優美な手を、オレの巨大な手のひらに重ねた。

　その感触に思いを留める暇もなく、目に映る景色はだんだんと薄れ、天使の姿もぼやけた色に呑み込まれていき……

# 終　濃紺色と鬱金色の巨竜

……目の前に、ムルトの顔が戻ってきた。

「あれ？　どうしたの、アニキ……はぶっ」

どうしても胸の疼きが収まらなくて、オレはその口を貪る。オレたちがふたりで注ぎ合ったたっぷりのミルクと、甘い蜜の味。チカラ強く濃厚な、オスのドラゴンの匂い。

オレの、大好きな相棒。

口を離しても、まだ興奮が醒めない。ろくに考えることもできないまま、オレの喉から言葉が溢れそうになる。……どうせいくら頭を捻って言葉を尽くしても、まるごと全部は伝えきれない思いだ。

それならいっそ、心を満たす思いをそのまま、いちばんストレートに言ってしまえば良い。

「ムルト。好きだ。大好きだ。きみのすべてが世界でいちばん好きだ」

「き、急にそう来るなんて、ビックリしちゃうじゃんか、アニキ……！　嬉しいけど!!」

鬱金色の顔が、そばで見ていて分かるくらいに赤くなった。そんなところも、やっぱり可愛い。

「いま、言いたくなったんだ。オレのやりたいことが、ようやく分かったから」

この気持ちは、言葉になんかしなくて良いと思っていた。でもいざ言ってしまえば、なんて勿体(もったい)ないことを考えてたんだ、と思う。

……ひょっとしたら、こんな簡単なことさえ言えないままお別れになっていたかもしれない。

オレは、いまこうして、大好きな相手にそうだと言える幸せを噛み締めている。

「ムルトはオレを変えてくれた。オレの身体も、オレの心も、ぜんぶ」

オレの目の前で、夕陽色の瞳が燃えている。

「自分の歩く道を自分で選ぶなんて、ムルトに出会うまで考えたこともなかったんだ。前へ進む道も、逃げ道さえも。ムルトがいてくれたから、オレは本当にやりたいことを見つけられた。なあ、分かるか？　――ムルト、きみがオレをこんなにもエッチにしたんだぞ」

ムルトといっぱい愛し合いたい。そう考えただけで、既に汁塗（まみ）れになっているオレのちんぽは何度でも復活し、バキバキに硬くなって、迫（せ）り出す胸筋のすぐ前にまでそそり立つ。

「ううん。アニキは変わってないよ。……いや、違うな。変わったけど、同じなんだ。はじめて会ったときから、ずーっと、アニキはオイラの特別だから」

ムルトは両腕を回してオレのちんぽを抱え、自分のモノと擦り合いながら、幸せそうな目でオレに笑いかける。

「オイラも、アニキが好きだ。世界でいちばん大好きだよ」

捏（こ）ねられ交わる肉の快感と、甘やかな言葉がもたらす心の悦楽。どちらも到底耐えられないほどの衝撃となって、オレという存在そのものを揺さぶる。

「ムルト」

「なんだい、アニキ」

「オレと、これからもずっと一緒にいてくれないか？」

「えへへ、何をいまさら。当然そのつもりだよ。オイラからお願いしたいくらいだ！」

それからオレたちは、もう何度目になるかも分からない種付けを互いに終えて、尻の穴やら割れ目（スリット）やら、カラダじゅうの至る所から精液をぼたぼたとこぼしつつ、ニッと笑い合った。

――そしてオレは、ずっと考えていたことを口にする。

「お願いがあるんだ。……オレに名前を付けてほしい。きみの考えた名前で、呼んでほしい」
ムルトはちょっと驚いた顔をして、けれどもすぐに笑顔になり、しっかりと頷く。
「オイラも今まで、うんと考えてたんだ。巨竜らしいカッコいい名前にしなきゃ、ってね！」
「『名前は大切』……だもんな」
名前の案は、長い間頭の中にあったのだろう。ムルトは畏(かしこ)まって咳払いをすると、オレの頭にその手を置く。
「――巨竜ジンギベルが末仔(ばっし)たる我、ムルティフェル・クルクマの名において、汝に巨竜の祝福を。世界に恵みを齎(もたら)し、その名を刻め。――」
ムルトは祝詞を紡ぐ。偉大な巨竜だった父から受け継いだ血を、思いを、言葉を、その全てを捧げるほどの思いで、愛しい相手と歩む未来に祈りを載せて、世界の全てに知らしめるべく、高らかに宣言するのだ。
「――汝の名は、クロクス。グランディフェル・クロクス。大地よ歓喜せよ！　新たなる巨竜は、ここに成れり!!」
古めかしく荘厳で、けれど瑞々(みずみず)しい若さとチカラに満ちたその声が、オレの胸を浸す。
グ、ラ、ン、デ、ィ、フ、ェ、ル・ク、ロ、ク、ス。
その名前がオレの魂と分かち難(がた)く結び付いたのを、オレは確かに感じていた。
「それじゃ、あともう一回、続きをしようか。……グランのアニキ！」

＊＊＊

「あぁ、なんと素晴らしい……！　あなたたなら、成し遂げてくださると信じておりましたよぉ」
まだ小さかった頃のムルトと面識があるらしい、やけに間延びした口調の祭司が、感涙にむせびながらそう告げる。

オレたちは、今までに訪れたところも、足を向けていなかったところも含め、世界中を巡る旅を続けていた。今日来たのは、オレが初めてムルトと出会った町の、少し北側にある教会だ。

「どこの教会でもぉ、御恵(みめぐ)みのチカラが戻ってきているんと、その話で持ち切りなんですよぉ」

ムルトとオレがあの神殿でおこなった儀式は、少しずつ世界に良い影響を及ぼしつつあるようだった。

かつて巨竜が姿を消したときに遺したチカラ、莫大ではあったが、永い時を経て着実に目減りしつつあった、生命を創造するそのチカラも、オレたちが世界を旅することで再び補充されていくらしい。

「まあ要するに、オイラたちの旅が世界を回復させてるってコトだね」

ムルトは自慢げにそう言う。

「でも、これだけ広い世界の全てにチカラを与えてた、なんてさ。伝説に出てくる昔の巨竜って、やっぱりすごいよ。同じ立場になって、ますますその偉大さが分かるようになった気がする。……オイラも、そんな風になれるかな」

「心配ご無用ですよぉ、ムルトさま――いいえ、クルクマさま。あなたはどこからどう見てもぉ、立派な巨竜に成長されましたからねぇ」

大きな腹を抱えながら、司祭はそう請け合う。オレも同じ気持ちだったから、言葉を添えた。

「ムルトのそばには、オレも一緒にいる。ふたり分のチカラを合わせたら、昔の巨竜にだって追いつけるだろ」

「そう……だよね、うん！」

「私たちの教会でもぉ、お手伝いできることがあれば仰ってくださいねぇ。いつでも歓迎ですよぉ、クルクマさま、そしてクロクスさま！」

そんな風に言ってくれた司祭に感謝を伝え、オレたちはその教会を後にした。

外を歩けば、世界が蘇りつつあることが目に見えてよく分かる。以前に見た赤茶けた大地には少しずつ緑が増え、生き物の数も多くなって、豊かになりつつあるみたいだ。それがそのままオレたちのチカラを示しているようで、嬉しくなったオレはムルトと笑い合う。

チカラと言えば、「夢を航る」と天使が言っていたやり方も、練習を続けている。いまはまだ使いこなすとまではいかないけれど、おかげで天使と話すくらいはできるようになった。

「報告。巨竜クロクス、巨竜クルクマの両名による世界環境再生の進捗率は、前回報告時より三・二六ポイント上昇。所感——おふたりとも旅は順調なようですね。肉体面、精神面ともにお変わりなさそうで、何よりです」

そう言う天使も相変わらず真面目な顔と口調だが、なんとなく以前よりも打ち解けたような雰囲気がある。

……世界を運行する仲間同士の絆、といったところだろうか。

「参考。巨竜の再来により、世界の存在が安定しつつあります。結果、他の世界との繋がりも微弱ながら回復し始めているようです」

「他の世界、か……」

ぼくがかつていた〝むこう〟とも、オレが今いることとも違う世界。そんなものがあるなんて、考えたこともなかった。言われてみれば確かにあってもおかしくはないんだけれど、心の盲点だったとでも言うべきか、そんなものはないと思い込んでいたのだ。

「予測。外部との繋がりがより強固に確立すれば、今後〝客人〟が来訪する事態も想定されます。……無論、逆も然りです。あなたのように夢を航るチカラがあれば、他の世界へ旅することも可能でしょう」

世界を越えて旅をする——不思議な響きだ。けれど不快ではない。心が沸き立つのを感じる。

「興味はある……でも、とりあえずは目の前の仕事をやり遂げないと、だな」
「同意、繋がりの確立にも今しばらくの時間が必要です。状況に変化があった際には、お知らせしますね」
ああ、と頷いて、オレはぼんやり頭に浮かんだことをそのまま口に出す。
「――オレたちの仲間になって、世界に恵みを巡らせる手伝いをしてくれるようなやつは……まあ、そう簡単には来てくれないかな」
「試算中……完了。残念ですが、実現の確率は高いとは言えません」
冗談だと受け取ったのか、天使の返答は少し苦笑交じりだった。
「当面は来訪者数自体も少ないと見込まれますし、この世界のルールに逆らうことはできません。補足情報、当人の魂がもつ傾向……魔法的資質とでも言うべきものの多寡(たか)で、この世界に滞在する際の姿や能力が変わる可能性もあります」

……と、そんな風に天使と会話したんだよ、などとムルトに告げれば、良いなあ、すごいなあ、と感心しきりの様子だった。
「オイラもいつか天使さまと話してみたいな。旅人さんも、もし来てくれるなら会えるかな？」
オレは楽しげに語るムルトを眺めていたが、そのとき記憶の片隅に置き忘れていた不思議な出来事を思い出していた。
（コートを着たカラスっぽいヒト……そうだ、天使よりも丁寧で堅苦しい言葉遣いだった）
この世界に来る前、いつとも知れない過去の夢。そこで出会ったかれも確か〝一介の旅人〟だ、なんて言っていた。
（そういえば天使は、その旅人からオレのことを聞いたとか言ってたっけ）
もしもかれがこの世界にまた来てくれたら、その時は是非ともお礼を言わなきゃいけないな、とオレはひとり頷いた。

「ねえアニキ、次の行き先だけどさ……」
と、その時ムルトが言った。
「向こうの方、見えるかな？　あの山の谷間に、ずっとアニキを連れて行きたかった場所があるんだ。――オイラの、ふるさとなんだけどね。良ければ、一緒に来てくれないかな？」
ちょっとだけ照れ臭そうな、けれどもずっと胸の中で温めていた想いの籠もったムルトの声。それを聞いているだけで、そこがかれにとってとても大事な場所なんだと分かる。
その想いを、分かち合おうとしてくれている。なんて嬉しいことだろう。……オレは、そんな大事な場所なんて、今まで持っていなかった。
〝家族〟も〝故郷〟も、好きな言葉じゃなかった。
でも、これからは。ムルトと一緒にいれば、それもきっと変えていける。オレはそのことを知っている。
「もちろん、一緒に行こう」

＊＊＊

一体どこから漏れ聞こえたのか、オレたちが村に着いたときには、村の入口に住民が総出で出迎えに来ていた。なかでも一番年配に見えるヒトが、目には感涙を浮かべ、声を震わせながら、一歩前に出た。
「ああ、ムルト――我らの巨竜クルクマさま！　立派に、本当に立派になられましたなあ……」
「へへ……村長も、この村と父ちゃんの教会を守ってくれてありがとう！　オイラがちゃんと巨竜になれたのも、こうして帰って来れたのも、父ちゃんと、村のみんなと……ここにいる、アニキのおかげなんだよ」
ムルトにそう言われ、その場にいた村民たちから感謝とか崇敬の籠もった目で見られるのはさすがに気圧されそうだったが、ムルトの前ではやっぱりカッコよくいたい。なんと言っても、オレが巨竜になったのは紛れもない事実だから。

そんなわけでオレはムルトと一緒になって、村民たちに求められるままに奇跡の〝御柱（みはしら）〟を披露したり、その場で白い雨を降らせたりもした。

ある程度の区切りが付いたところで、村長が何かを大事そうに抱えながら、オレたちの前に進み出てきた。

……それは、安らかに寝息を立てる、小さな赤ん坊の姿だった。

「つい先日、ジンギベルさまのご遺骸が眩しく輝きだしましてな、そこにはなんと、この仔が産声を上げておりましたのじゃ」

「ええっ、それじゃあオイラの、弟……!?」

ムルトの声は、興奮のあまり上擦っている。赤ん坊を見つめる両目もキラキラと輝いていて、隣にいるオレまでつられて嬉しくなりそうだ。

「まさしくその通り。お二方のおかげで、この村も遂に、新たな家族を授かったのですじゃ。……どうか、この嬰児（みどりご）に巨竜の祝福をお与え下されませぬか」

村長はそう言いながら、捧げ持つようにして赤ん坊をムルトに手渡す。受け取ったムルトは、その自慢の巨体さえも縮こまって見えるほど、恐る恐るといった様子でその仔をあやしていた。

「わあ、……不思議だなあ。オイラ、ずーっといちばん年下だったからさ……兄ちゃんになるって、こんな気分なんだね」

心の中から色々な想いが溢れ出たのか、眦（まなじり）から一滴こぼれ掛けた涙を指で拭って、ムルトは微笑む。

「アニキも、この仔を抱いてあげてみて！」

「ああ、――うお、……！」

ムルトから渡された、毛布に包（くる）まった小さな生命。触れるだけで壊れてしまいそうなほどに儚げで、羽のようにふわふわと軽いはずなのに、今までに持ったどんなモノよりもずしりと重いように感じた。

（ムルトの言った通りだ。こんな気持ちになるなんて、考えたこともなかった……）

どのように扱うべきか悩むあまりに、動きが止まってしまった腕の中は居心地が悪かったのか、それまでおとなしく寝息を立てていた赤ん坊は急にむずかり、大きな声で泣き始めてしまった。

それを見ていたムルトには、苦笑い混じりに肩を叩かれる。

「アニキったらー、ほら、顔が厳ついんだから、怖がっちゃってるよ！　笑って笑って!!」

「こ、こうかな？」

ぎこちなく笑顔を作りつつ、心の中の動揺はなんとか表に出さないように、軽く息を整える。

たどたどしいながらも腕を揺らしてみたり、オレの知ってる子守歌を口ずさんだりしているうちに、赤ん坊の泣き声はだんだん落ち着いてきたようだった。

「――ムルトが前に言ってたこと、なんとなく分かってきた気がする。巨竜はみんな家族みたいなもんだ、っていうやつ。……ああ、家族って、こんな風にもなれたんだな」

オレがそう言うと、ムルトは一層笑みを深くして、そっとシッポを絡ませてくる。

「へへっ、じゃあ、オイラたちの新しい家族に、祝福を――名前をあげなくちゃね！　これからみんなで教会に向かうよ！」

オレたちは村長に先導されながら、村の中心、まだ新しい聖堂を目指し、静々（しずしず）と進んでいった。

「ここには、父ちゃんが眠ってるんだよ」

ムルトの声はいつもと違う響きを帯びている。厳粛というか、大事なものを奥に秘めたような、重みのある声色だ。

教会に入ると、一同は奥の方にある祭壇へと向かった。……巨竜が二頭並ぶには、さすがに狭いと思ったけれど、オレはムルトと肩を密着させながら、そこで跪いて祈りを捧げる。

「いとも畏（かしこ）き巨竜ジンギベル、……父ちゃん、見てくれてるかな。ここにいる新しい家族と、オイラたちのこれからのこと、お話（はなし）しに来たよ」

ムルトはオレを見てこくりと頷き、それから教会に集ったみんなの方へと向き直って立ち、赤ん坊を掲げて、厳(おごそ)かに告げた。

「――ジンギベルの仔らよ。今これより、巨竜クルクマと巨竜クロクスの名において、祝福の儀を執りおこなう。ここなる嬰児を我らと同じ血を引くもの、ジンギベルの末の子と認むるに、異論はありや？」

朗々と響くムルトの声に対し、村民たちから「異議なし！」との答えが返る。そこで村長がオレたちの前に進み出てきた。手には小ぶりな壺を抱えている。ムルトがその壺を受け取り、オレに差し出す。

「ねえ、今度はアニキが祝福をしてあげてよ。これを額に塗って、名前を唱えてあげるんだ」

心の準備もないままにそう言われたけれど、不思議と焦りは感じなかった。何をするべきか、まるでどこかで聞いたことがあるかのように、カラダが自然に動いてくれる。

差し出された壺の中身を、小さな額にそっと塗っていく。そして、この仔に贈るべき名前を見つけるべく、思いを巡らせる。

（幸せがいっぱい、って感じの名前が良いな）

――フルークトゥス。

頭の中で、そう告げる声が聞こえた気がして、それはそのままオレの口を突いて出て行く。

「すごく良い名前だよ！　古い竜の言葉だけど、アニキも知ってたの？」

「いや、ふっと頭に浮かんだんだ。誰かの声が聞こえたような……」

さっきのは何だったのだろう？　重々しく、けれど何故だか、懐かしい感じのする声だった。

「そっか。ひょっとしたら、父ちゃんが教えてくれたのかもね……！」

ムルトはこっそり、そう言って笑った。

そしてオレたちは再びみんなを前にする。

「ここに巨竜の祝福は為された！　願わくば、汝の前途に恵み多かれ、……新しき同胞(はらから)よ！」

歓呼の声とともに村民たちが立ち上がって、フルークトゥスと名付けられた赤ん坊を迎える。
オレたちの腕から村長へ、そこからまた別のヒトへと、心を籠めて手渡されていったかれは、そのまま村のみんなに連れられて、教会の外へ出て行った。
オレたちもついて行くのかと思っていたら、ムルトがオレの腕を引いた。
「ごめんね、アニキ。あともうちょっとだけ、どうしても一緒に来て欲しいんだ」
その場には、ムルトの他に村長だけが残っていた。村長もムルトが何をしたいのかは分かっているようで、首に掛けていた鍵を手に取ると、祭壇の奥へ向かい、そこに設えられた両開きの重厚そうな扉を解錠し、両手で押し開いた。
軋む扉の奥へと、村長はオレたちを誘う。
「さあ、このままお進みくだされ。私はここで待っとります」

静かな、仄暗い階段だった。通路の両脇には灯火が疎らに置かれていて、それを辿って下るごとに、空気はひんやりと肌触りを変えていく。
階段はぐるりと回り込むような構造になっていて、どうやら教会の地下に続いているらしい。
やがて、教会の中央にあたる位置に着くと、そこは開けた広間になっていて、なにか巨大なものがその中央に鎮座していた。

「――ただいま、父ちゃん」

ムルトはそう言って、その場に膝を突く。
よく見れば、オレたちの目の前にあるものはとてつもない大きさの巨竜の体躯だったようだ。これが遺骸だと言われても信じられないくらい、汚損や腐敗などの様子は欠片も存在しない。
……しかし、その眼は頑なに閉じられたまま、爪先もシッポの先も静止している。それはまるで霊峰の神殿にあった石像たちみたいだった。

「遅れちゃったけど……改めて、紹介するね。オイラの大事なアニキだよ。父ちゃんに貰った名前に倣って、オイラが名前を贈ったんだ」

落ち着いた声色で、けれど胸いっぱいの想いが籠もったムルトの声を聞きながら、オレも隣に身を屈める。なんだか、胸がどきどきしてきた。

「――こんにちは、初めまして、ジンギベル。オレの名前はグラン。大好きな相手にこの名前を貰って、巨竜の仲間になれたこと……嬉しくて、今もすごく誇らしい気持ちが溢れ出しそうだ」

そんなありきたりな内容を言うだけのことで、なぜだかひどく緊張してしまう。けれど、隣にいるムルトの顔を見れば、オレの心も少しずついつものペースを取り戻せそうだった。

ようやく部屋を見渡す余裕が戻ってきたので、薄闇のなか、竜の目を凝らしてみる。

遺骸の周囲には、淡い光を放つ結晶が何本か生えており、その合間に大小様々な植物の苗が芽吹いているのが見える。……そこから感じるチカラは、オレとムルトが交わったときのものと同じ。巨竜に備わった、創造のチカラとかいうものだろうか。

世界と繋がった今だから分かる。ジンギベルのチカラは、死後に遺されたものでさえ強力で、思わず息を呑むほどだった。

「これが、巨竜のチカラなんだな。昔の人間が奪い合ったってのも分かる気がする。……なあ、ムルト。オレたち、責任重大だよな」

オレの言いたかったことはムルトにも伝わったようで、かれは表情を引き締めて口を開く。

「オイラたち、このチカラをちゃんとみんなに届けるよ。これからも、どんどん世界に恵みを巡らせていくから。――巨竜の名に恥じぬよう、アニキと一緒に生きることを、このみしるしに掛けて誓います」

ムルトはすっと立ち上がり、立派に成長した竜根を誇らしげに屹立させてみせた。もちろんオレもその傍で、そそり立たせた自慢のモノをムルトのそれとぶつけ合う。

――新たなる時代の巨竜たちよ。汝らの決意、確（しか）と聞き届けた。……楽しみにしているぞ、我が愛する息子たちよ。

　そのとき、オレたちは確かに聞いた。さっき儀式の最中（さなか）に聞いたのと、同じ声だ。
　きっとそれはムルトがずっと聞きたいと願い続けていた声だったのだろう。かれは一瞬だけ、驚いたような、泣きそうな顔をして、でもすぐに首を振り、大きな笑顔を浮かべた。
「うん！　ありがとう、見ててね、父ちゃん。……それじゃあ、行ってきます！」

＊＊＊

そんな風にしてオレたちは山間の村を離れ、世界各地を巡る旅を再開することにしたのだが、オレはその間もずっと、〝故郷〟について考え続けていた。
　世界は再生に向かっているとはいえ、いまだ傷が癒えていないところも多い。
　住む場所を失ったヒト、家族を亡くしたヒト、今まで手にしたもの全てと引き離されたヒト。旅先ではそんな人々と出会い、それぞれの話を聞いたりもした。
　そうかと思えば、ただ単純に新天地を求めるヒト、真っ白な未来に希望を抱くようなヒトも結構いた。そういった人々に、巨竜であるオレたちは何ができるだろう、とふたりで考えた。
「だったら、作ろう。みんなが住める町を。
――オレたちの新しい〝故郷〟を」

オレがそう言うと、ムルトは少しキョトンとした顔をしていたので、オレは言葉を続けた。
「巨竜のチカラは、壊して、創るチカラなんだろう？　あの霊峰の神殿だって、巨竜たちが山を切り開いて、石をたくさん運んで作り上げたってことなんだし、オレたちにも、同じことができるはずさ」

それから、もし作るならどんな町にしたいか、ふたりで好き勝手に話し合った。
　みんなが集まりやすい町が良いな。それなら町に繋がる道も整備しなきゃね。町の中央には広場も作って、みんなに〝奇跡〟を見せられるようにするとか。そうだ、霊峰の麓（ふもと）だったら、巨竜神殿にも参拝しやすくなるかも。あそこの構造とか、聖なる部屋の秘密だとか、知りたいことはたくさんあるし。巨竜の教えをみんなに広める学び舎とかも欲しいな。……
「……へへ、色々考えてたら、どんどん楽しくなってきちゃった。じゃあ、出発する？」
「ああ。でも、その前に」
　そう口にして、ムルトの顔をじっと見据える。その意図は、かれにもすぐに伝わったようで、にやっと大きな笑みが返ってきた。
「そうだね、景気付けに二、三発、ヤってから行こっか！」
　勢いを付けて飛びついてきたムルトの巨体をしっかりと抱え、オレたちは笑い合った。

# 幕間

時間というのは、往々にして相対的なものだ。世界どうしの〝繋がり〟から絶たれた僻地ならなおさらのこと。

だから、どれくらいの時間が経っていたのか、正確には分からない。外から見ればほんの一瞬でも、内側では何十年、何百年分の変化が積み重なった結果なのかもしれない。

ともあれ、変化は確実にあった。そのことに気付くことができたのは純然たる幸運だろう。当て所ない捜し物の旅でいくつもの世界を巡り航っているうちに、それまでほとんど〝繋がり〟が切れかかっていた世界が、復活しつつあるのを耳にしたのだ。

（実に、珍しいこともあるものです。あそこは確か『巨竜の世界』と呼ばれていたはずですが、はて……誰か知り合いでもいたでしょうか）

色の粒が吹き荒ぶ空間にて、その旅人は独り頭を捻るが、ややもせぬうちにいつかの記憶を探り当てる。

（……そうでした、あの小さな男の子が彷徨い歩いていたのは、この辺りでしたね）

頼りなげな存在感ながら、世界の狭間であるこの空間で自我を見失うことなく漂っていた、類まれなる資質を秘めた子。かれと別れたあと、旅人は羅針盤の指すとおり『巨竜の世界』へと向かったのだが、旅慣れたその翼を以てしても、〝繋がり〟から断絶しかかった道程は、思ったより骨が折れるものだった。

（あの印象深い出会いと、出来うるなら何度も通りたくはない悪路……そう容易く忘れられるようなものではありませんでした）

しかしどういうわけか、いま目の前に広がるのは、悠々たる大通りとまでは行かなくとも、慣れないヒトでさえ安心して通ることができるほどに安定した経路だった。

（一瞥は百の言葉に勝ると申しますが、まさにその通りでしたね。まだ完全ではないにせよ、この様子であれば程なく復調するでしょう）

その変化を実現したのは一体何だったのか。瀕死だった世界を立て直すほどの偉業が成ったことは詮ずるまでもないが、それを為し遂げたのは果たしてどんな傑物なのか。

自らも世界のつつがない運行、混沌の〝無〟に沈んでしまわぬような舵取りを担う身として、興味は尽きない。旅人はそう考えて微笑んだ。

（近いうちに再訪する必要がありそうですね。ふらふらしてばかりだと怒られてしまいますし、せめて有益な情報の一つは持ち帰らねば）

世界が維持できなくなり崩壊する危険はどこにでもあり、かれの故郷とて無縁ではいられない。実際、すでに滅んでしまった世界を、この旅の間だけでもいくつも目にしてきた。

そして〝無〟に呑み込まれるという末路から運良く脱した残骸や、世界になりきれなかった断片、あるいはなんらかの要因でちぎれ、漂う切れ端……そういったものたちはやがて互いに引き寄せ合い、集い連なって、特定のところに滞留する。

それは世界と世界の狭間にあって、ふとした瞬間にそれらと重なり、時折意図せぬ来訪者を招き入れることもある。

（そういえば、この辺りには彼女もいたはず。長らく拝趨もできておりませんでしたし、先にご挨拶をしに伺いましょうか。……となると、何か良い手土産を……）

しばらくそうして考えを巡らせているうちに妙案が思い付いたのか、旅人は小さく頷く。

（折角ですから、あちらを訪うお客様が増えるような符呪を施すのが良いかもしれません）

＊＊＊

――ここはどこだ？　俺は何をしてるんだ？
……俺は、誰だ？　俺は誰だ。俺は。

　なんだかふらふらする。脳内は混乱というか靄（もや）が掛かったように現実感が乏しくて、身体は不規則に揺れている気がする。……というより、いつの間にか勝手に歩いていた。何も見えず、何も聞こえず、一面ただひたすらの闇。

　そして心の中の靄だけが俺に問い掛け続ける。
お前は、誰だ？

（分からない、けれど、何かが見える気がする。これは何だろう。深い森？　山の中？）

　俺の問いに答えるように、闇の中から情景が浮かびだした。でもそれは、森でも山でもない、取り留めのない変なイメージばかり。

（俺は……ああ、そうだ……にんげん、だった）

　思考がそこに至ると、糸を手繰（たぐ）り寄せるかのように、記憶が連なって浮かび上がってきた。ここに来る前にしていたこと。ほったらかしにしてきた仕事。生活。人生。

　俺は確かに、二十数年の間、にんげんとして生きていた。姓は卯野（ウノ）、名は寿人（カズヒト）。大学を出て、会社に入ってから、働いて、働いて、働いて、えっと、……何をしていたんだっけ。

　思い出した。いつものように次から次に襲い来る仕事に忙殺されて、たしか十二連勤からの二徹目……あれ？　三徹目だっけ。まあそこは、たいした問題じゃない。

　モニターの前で何度か意識を喪失しかけて、気が付けばここにいて、変なところを歩いている。

　目に映るのは水晶のにょきにょき生えた砂漠だったり、紫色に泡立つ、いかにも怪しい沼地だったり。情景は移ろい変わっていく。

そういえば周囲には変なイキモノまでいる。うねうねと動き回るスライムっぽいぐちゃぐちゃとか。甲高い叫び声でコトバらしきもの（意味不明）を口にする、犬と猫を足して二で割って立たせたみたいなやつとか。そんな有象無象（うぞうむぞう）の間を訳も分からず歩き回って、どこかでふっと天啓が頭の中に舞い込んできた。

　ここは日本じゃない。というかきっと地球ですらない。――これは夢の中だ、俺の脳みそはたぶん一時的に機能停止して、寝落ちしたんだ。

（そりゃあそうだよな。ははは。ああ、でも、夢なら安心だ。別にもう醒（さ）めなくたっていい。どうせ起きてても辛いだけだから）

　もうちょっとだけ、こんな風にゆっくりしていてもバチは当たらないだろう。いまここには特大炎上真っ只中のクソ案件もないし、最悪のタイミングでお陀仏（だぶつ）になったシステムもないし、現場のことなどお構いなしに無理を押しつけてくる上司もいない。ああ、いないったらいない。

　いくつもの風景が流れ、変わり続けて、いま俺は木々が深く生い茂る山道にいた。いちばん最初に思い浮かんだイメージと似たような場所なのは偶然だろうか？

　時刻は……わからない。真っ暗ではないが、薄暗い。それでいて不気味に静かだ。木の葉が擦（こす）れる音も、鳥や虫の声も聞こえない。

　俺はそのまま歩き回ることにした。散歩っていう雰囲気でもないけれど、構わないだろう。

（自由な時間なんて、いつぶりだ？　思い出せないくらい遠いのだけは確かだ。だからせめて夢の中くらいは好きにしたい……）

　認めよう。俺はたぶん、何もかも限界だった。正常な判断力など、とっくに枯渇していたのだ。

入ってから気付いたけど、新卒で苦節の末に内定を得た就職先は、割とやばい会社だった。
入社してすぐ、ちょうどこんな感じの山奥に連れて行かれたっけ。新人研修という名目の、よく分からない合宿行事だ。同期入社の奴らと一緒に、寝たり起きたり飯を作ったり、けれど飢え死にの一歩手前までその飯は食えなかったり、泣いたり叫んだり怒鳴られたり、俺たちの人生をまるまる否定されたり、まあいろいろあった。
あの時点で逃げた連中もいたっけな。賢明な判断だと思う。俺にはそれさえできなかった。逃げたいと思いながらも、結局それからずっと会社に残っている。……

俺の弱点は、自分でも分かっている。周囲に流されやすいタイプだとか、小さい頃から散々言われたものだ。貧乏クジは引きやすい方だし、優柔不断なくせに一度決めたら動くのが面倒になって、ずるずるべったりになってしまう。

自己嫌悪にため息を吐きつつ、俺はふわふわした道を歩いていた。足を下ろす度に、腐りきった落ち葉が音もなく崩れて粉々になっていく。
視線を上げれば、歩みを進めるごとに木々の種類が変わって目の前を覆い尽くす。見慣れた木、見たことのない木、まっすぐな木に、ねじくれた木。ぐにゃぐにゃのゴムみたいな、……木？
いかにも北国っぽい針葉樹のすぐ傍らには、常夏の浜辺にでも生えていそうな椰子が平然と陣取っていたりもする。いたるところから寄せ集めたものが奇跡的に共存し、居着いてしまったという雰囲気だ。

見ている分には面白いけれど、生態系とかはどうなっているんだろう――などと、頭の中に浮かんでは消える思考の残渣。それに気を取られていたせいか、俺は一瞬、目の前になにかが現れたことにすら気付けずにいた。

なにか、ではなく、人影だった。変な色でも形でもなく、妙な音も匂いもしない、普通の、女性の姿。

「××、××××？」
「えっ、な、誰⁉」
「に、人間⁉ だよな、えっと、――」
「――私の言葉は、お分かりになりますか？」
「え？ あ、はい」
ついつられて返事をしてしまった。
（地球でも日本でもないはずなのに日本語？ あれ、でも、これってそもそも夢の中だよな。……夢の中で、会話？）
混乱する俺とは裏腹に、その女性は嬉しげな表情で言葉を繋ぐ。
「まあ、良かった！ ここのところ、遠くからいらっしゃるお客様が多いので、ひょっとしてと思ったのですが、ふふ、やっぱり」
その優しげな顔つきと所作は、どこか記憶に引っ掛かるのだが、思い当たる節はとんとない。でも、夢ならそういうものなんだろう。〝見たことがある顔〟という設定の見知らぬ顔なんて、今までも何度か夢に出てきたたし。
「そうだよな、これが夢なら……」
「夢？」
女性はくすっと笑う。いつの間にか、思ったことが口から漏れていたらしい。俺の悪い癖だ。
「いいえ、違いますよ。この地面も、木々も、そして私も、あなたの夢の産物ではありません」
「でもそれなら……これが、現実だって言うんですか？ こんなデタラメな世界が？」
「世界、というのは不正確な言葉ですね。ここは世界ではありませんし、どこでもありません。敢えて言うなれば、どこかのなにかの寄せ集め、いくつもの世界からこぼれて落ちたものたちが積もり積もった、世界の狭間」
「はあ……」

「――というのでは呼ぶのに不便ですし、魅力もちっともありませんので、私はここのことを勝手に〝温泉〟と呼んでいます」

正直な話、俺にはちんぷんかんぷんだったし、徹夜の疲労が蓄積した脳では情報を処理できていなかった。あまつさえこんな異常な状況だ。

彼女の言葉を聞いてもまだ、夢を見ていると思い込んでいたし、それならそれで成り行きに任せていれば良いか、なんて気楽な気持ちで、機械的に受け答えを続けていた。

「なるほど。お客様は『日本』にいらっしゃったはずが、いつの間にかここへ来ていた、と」

「はい……なんか色々なことが限界になって、気が付いたら変なところを歩いていて。どこへ行く宛もないし、帰るにしてもどうすれば良いのか分からなくて」

帰る気もあまりないけど、とは言わなかった。

「心中、お察しします。そうですね、少し私について来ていただけますでしょうか。この先にちょっとした高台がありますので、この辺りのご案内をいたしましょう」

そう言って手招きをする彼女に誘われるまま、俺は斜面を登っていった。森はやがて途切れ、吹き抜けてきた風が俺の頬を打つ。

「ほら、ご覧になれますか。あちこちに温泉が沸いているでしょう?」

女性の指し示す先、俺の眼下に広がる景色は、ちょっとした見物だった。もうもうと湯気を立ち昇らせる大小の水溜まりが、あちらこちらで口を開けている。

「あれらは全て、どこかに通ずる水鏡です。世界と世界の繋がりが、ここでは水面となって現出するのです。そこから溢れるエネルギーは熱となって、その水を温めます。……それが、温泉なのです」

そう言われ、改めて見てみると、雨上がりの道端にできるような小さなものから、湖と呼べる規模のものまで、その数量は百や二百では到底効かないほどだ。

　遠くから見ている分にはよく分からないが、その水面はどこか、全く別の場所を映している……ように見えなくもない。

「あんなに沢山、世界があるってことなのか」

にわかには信じられなくて、訊くともなしにそう呟く。

「ええ。もちろん『日本』に続く温泉もございますよ。ここからは少し距離がございますが、お望みでしたらご案内もいたします」

　ただ、と言って俺の顔を窺（うかが）うと、女性は少し表情を曇らせる。

「……拝見しましたところ、たいへんお疲れのご様子ですね。差し出がましくはございますが、あちらに私どもの旅館があるのです」

　女性に言われた通りの方向へ目を向ければ、靄（もや）のむこうになにかの建造物が微かに見える。言われてみればそれは、かなり大きな旅館風の建物らしかった。日本ではない、元の世界ですらないという触れ込みの場所にしては、これ以上望むべくもないほどに立派なものだろう。

　驚きが顔に出ていたのだろうか、女性は俺に笑みを向け、柔らかな所作で頭を下げる。

「元いた世界にお帰りになるとしても、せめてその前に、たとえ一時（ひととき）なりとも、憂いや悩みをいったん忘れてごゆっくりお寛ぎいただく時間をご提供できればと思いまして……」

　混乱した俺の思考に、その言葉は妙にすっと入ってきた。

「温泉で、ゆっくり……？」

「ええ」

「ごはんも食べられる……？」

「もちろんでございます」
「行きます」
食い気味に言ってしまったが、女性はそれを気にする素振りもなく、満面の笑みを浮かべて歓迎の言葉を述べた。
「ではどうぞ、こちらへ。きっとご満足いただけると思いますよ！」
――彼女が先導する道を、期待半分、自棄（やけ）になった気持ちがもう半分、というような感じでふらふらとついて行く。
湯けむりの先に何が待っているのか、その時の俺は当然、知る由もなかった。

# 湯けむりを巡るものがたり



## 一　秘境！　森深くに佇む謎の温泉旅館

「おんせん……オンセン……」
　どすどすと大きな足音を立てて、聞き慣れたはしゃぎ声が近付いてくる。
「温泉ーッ!!」
　背後からのその声に振り向けば、人懐っこい笑顔のドラゴンが興奮に息を切らしていた。
「……って、何だか知ってる、アニキ？」
　極限まで発達した筋肉を身に鎧（よろ）う、鮮やかな鬱金色の巨竜。オレの誇れる相棒にして大切なパートナーの、ムルトだ。
　わくわくと浮き足立つかれの質問に、オレは少し虚を衝かれつつも口を開く。
「え、ああ、一応。でもどうしたんだ、急に？」
「麓の町（クロキウム）にさ、珍しい旅人さんが来たんだよ。あちこちの世界を旅してるんだって。それでね、旅先の色んなお話とかを聞いてたんだ」
　身振り手振りで、自分が聞いてきた話を伝えようとするその姿は、傍（はた）から見れば岩山が揺れ動いているかのように見えるかもしれない。
「その温泉ってのも、旅の途中で行ったことがあるんだってさ。暖かい水がたっぷりあって、美味しい料理が食べられて、楽しいこと尽くめの場所なんだ……って聞いたよ！」
　未知の歓喜に巨大なカラダを震わせて、聞きかじった話から想像はどんどん膨らんでいき、期待と憧れにその目は輝く。
　初めて会ったときに比べれば、肉体はだいぶ成長したけれど、その純真な竜の魂は、ずっと変わらないままだ。
　その話を聞くオレも、知らず知らずのうちにシッポがピンとなっていたらしい。
「おっ、アニキも結構、興味津々って感じ？」
「そりゃあ……気になるよ」
　温泉なんて、聞いたことはあっても、行ったことはない。まして、大好きな相手と一緒なら。

「でもオレたちには、やることがあるだろう。世界の恵みを巡らせるのが、巨竜の仕事だ」

「そこなんだよ！」

と、オレの言葉を待っていたと言わんばかりにムルトが突っ込む。

「オイラ、ここんところずーっと思ってたんだ。アニキったら、全然休んでないでしょ？　町も作ったしさ、だんだん住むヒトが増えてきて、みんなのお手伝いも大変になってきてるでしょ。だから、ここいらでそろそろ休憩しても良いと思うんだよね」

「休憩？」

「そうそう！　旅人さんにお話を聞いてたら、案内しましょうか、って言ってくれたんだ」

　がんばるアニキのことオイラは大好きだけど、たまには休まないと、と言いながら、ずいっと身を乗り出して、ムルトはオレの手を握る。

「だからさ。オイラと一緒に、温泉に行こう！」

＊＊＊

「諒解（りょうかい）。そんなことでしたら、何ら問題はありません。固（もと）より、この世界を護り、伝え、存続させるのがこの身の役割です。そして万が一、あなたがたが倒れてしまえば、世界は今度こそ立ちゆかなくなってしまいます」

　そうならないためにも休息は必要ですから、むしろこちらからお願いしようかとさえ思っていました——と、普段は決してオレたちの営みに口出しをしない天使が、そう言ってくれた。

　いつものように夢の狭間で世界のあれこれを相談しているときに、なにか心掛かりなことがあるのでは、とわざわざ訊いてくれたのだ。

「ああ……いつもありがとう、天使」

「委細承知。お礼は不要です、巨竜クロクス。ご不在の間は、この身が世界の維持に努めます。安心して休息をお楽しみください」

「天使さまがそう言ってくれたの？　やっぱりすごいな……教会が伝える昔の伝説みたいだ」
ムルトはしみじみと感心した顔をする。
「そう言うムルトだって、伝説に負けないほど立派な巨竜になったよ。オレが保証する」
山のようなカラダを丸めて、へへへ、と照れ臭そうに笑う姿を見ていると、なんとも言えない暖かいものが胸の奥に込み上げてくるようだ。
心を甘く蕩(とろ)かす、巨竜の炎。
「その筋肉も、心も、それにもちろん竜根も」
昂(たか)ぶる気持ちのままにその全身をまさぐれば、巨体相応に低く轟(とどろ)く、それでいてかわいらしい嬌声(きょうせい)が漏れ出す。
「もうっ！　……アニキがそんなこと言うから、ムラムラしてきちゃったよ。ねえ、町へ行く前に一発ヤろっか！」
「……しょうがないな」
全然しょうがなくない。オレもギンギンだった。

それで結局、ねぐらを出たのはあくる日の昼だった。一発では到底収まらなかったからだ。
ねぐらは霊峰の中腹、眺めの良い場所にある。ここからなら遠くの海や、麓(ふもと)に広がる町並みも一望することができるのだ。
オレたちが作った町には数多くのヒトたちが集まるようになり、いつしかクロキウムという名前で呼ばれるようになった。
この世界の地名は巨竜にちなんだものが多いらしいけれど、まさかそれが自分になるとは。さすがに予想外だったが、気分は悪くない。
「この道、オレたちでもちゃんと通れるように作ったつもりだけど、ちょっと手狭だな」
町に入った後、ぼそっとそう呟いたら、隣でムルトが軽く笑って同意する。
「まあオイラたち、あれからまたデカくなったからね」
「……え。そうなのか」

あまり意識していなかったせいか、ムルトの言葉にそんな反応をしてしまう。

「へへ、鈍いなー、アニキってば！　ねぐらも最初は全然余裕があったのに、近頃はお互いにくっつかないと狭くなってきたでしょ、気付いてなかった？」

「あれはムルトが抱きつくのが好きなだけかと」

「それはそれとして。うん、ていうか、そっちが本命だね」

正直なのは良いことだ。屈託ないその笑顔に免じて、それ以上の追求はやめることにした。

そうこうするうちにオレとムルトは町の中央に位置する広場にたどり着いた。

この世界の一般的な住民は、色とりどりの鱗で身を鎧う竜人（りゅうじん）たちだ。

体格は他の生物と比べても大柄だし、それに見合うだけの強靱（きょうじん）にして頑丈な心身を誇っているが、ひとつ大きな弱点がある。

竜人たちには、そしてこの世界を守ってきた天使にも、古きものを打ち壊し、新しきものを産み殖（ふ）やす能力だけは与えられていなかった。

その証拠に、竜人たちの股に刻まれた割れ目（スリット）の奥に生命の源である御柱……つまりちんぽは存在しない。互いに交わって生命を育むことも、叶わない。

それが許されているのは、他ならぬオレたち——巨竜だけだ。

道を行く町の竜人たちが、オレとムルトを見て笑顔を浮かべ、手を振ったり会釈をしたりして通り過ぎていく。

「ここで待ってれば良いって言ってたんだ」

ムルトの声には、うきうきした色が滲（にじ）む。

「その〝旅人さん〟が来てくれるんだったか。そもそも、どういう見た目なんだっけ？」

「えっと、フク？　っていうの？　大きな布をすっぽり被ってて、不思議な雰囲気でさ……」

そう言えばそうだった。この世界のヒトには服を着る習慣がない。それがすっかり当たり前になっていたので、オレも一瞬、何のことだか分からなくなりかけてしまった。

「オレが昔いたところだと、みんな服を着てたんだよ。〝むこう〟の人間は、こっちの竜人に比べればカラダも弱かったから、身を守ったり、寒さを防いだり、綺麗に飾ったりするためにね」

「へえ……面白そうだな。あ、もしかしてさ、別の世界に行けるなら、アニキがいた世界にも行けるのかな？」

「……うーん、オレたちがあそこに行ったら、だいぶ目立っちゃうな」

怖がられて、鉄砲とかを撃ちまくられるかもしれないし、テレビやネットなんかで騒がれることにもなるだろう。それは相手にとっても、オレたちにとっても、良いことではない。

「そっかあ。まあ、それだったら仕方ないね。……あっ、旅人さんが来たよ！」

ぶんぶんと腕を振るムルトへ律儀に手を振り返す、細身の人影が近付いてきていた。

くたびれた外套を身に纏い、フードを被ったその姿は、周囲の竜人たちに比べて背の高さは同じか、頭一つ低い程度に見えたが、胴回りはオレの腕より細いくらいだった。

そしてそのフードの下から覗く顔は――

「びっくりした、旅人さんって、あなたのことだったんだ。……なあ、オレのこと、覚えてるかな？　あれから色々あって、オレの見た目もずいぶん変わっちゃったけど」

「おや、まさか……！　このような場所で再びお目に掛かるとは！　ええ、もちろん記憶しておりますとも。その類まれなる魂の輝き、ふふ、決して見違えることなどございませんよ」

――夜の闇より黒いカラスが、驚きを露わにしつつも、柔和な笑みを浮かべていた。

＊＊＊

「申し遅れました。今更名乗るのも可笑しくはございますが、私のことはどうぞ、ドーマとお呼び下さいませ」
　旅人はそう言って深々と頭を下げる。
「それにしても、世界の要たる巨竜になられていたとは。大いなることを成し遂げる定めとはお見受けいたしておりましたが、私めの管窺など及びもつかないご鴻業、感嘆措く能わずとは、まさにこのことでしょう」
　よく分からないけれど、どうやら褒められているらしい。オレはとりあえず曖昧に頷いた。その隣で、ムルトは目をまん丸にしている。
「ええっ、もしかして旅人さんとアニキは知り合いだったの!?　じゃ、じゃあ、旅人さんって、アニキが前にいた世界のヒトなのかな？」
「残念ながら、違います。しばらく前に近くへ参りました際、拝顔の栄に浴しまして」
　その頃はまだ、今とはまるで違うお姿でしたが、とかれは誰にも聞こえない声で呟く。
「さて——温泉をご訪問なさりたい、とのことでしたね。私の微力がお役に立てるようでしたら、喜んでご案内差し上げますよ」
「ありがとう、ドーマさん！　温泉って、別の世界にあるんだよね。そんな遠くまで行くって言うとさ、なんだか難しそうだけど、誰にでもできることなの？」
　期待に声を弾ませるムルトに、旅人は微笑を返す。
「そうですね……無条件で、とは申せませんが、コツさえ掴めばさほど苦労はしないはずです」
　あなた方のように強いチカラをお持ちならば尚更です、と言葉を続けて、オレに瞳を向ける。
「グラン様は既に、世界を航る術もご存知だと伺いましたが、いかがでしょう？　どのようにして彼我の境界を越えて行かれるのですか？」

「うーん……実はまだよく分かってないんだ。それに、オレがたどり着けるのは、今のところ夢のなか——天使がいるところが限界で、他の世界になんか行けたことはないよ」

そう答えつつ、隣に立つムルトに目を遣る。オレひとりなら、もっと練習すれば良いだけなのかもしれないが、それじゃあ意味がない。オレはムルトと一緒に行きたいんだから。

具体的にはどうしているのですか、と重ねて問われて、オレは顎に手をやる。

「本当に、他人に教えられるようなことは何もやっていないよ。そうだな……普通に寝るときみたいに横になって、天使に会いたいって思うだけ。そうしたら向こうから迎えに来てくれるんだよ。——こんな答えで、いいのかな」

「ええ、それで差し支えありません。むしろ、そこにこそ真髄が宿るとも申せましょう」

ドーマは訳知り顔で頷いたあと、ふと表情を引き締めて言葉を繋ぐ。

「何よりも必要となるのは〝信じる〟ことです。自分は世界の境界を越えて行ける、と。行って帰って来られるだけのチカラがあるのだ、と。その強い想いこそが、あなた様を導く杖となり、且つは帰るべき地を指す道標ともなるのです」

けれどその答えはやっぱり難しい。あの天使といい、どうしてみんな、ややこしい言葉遣いが好きなんだろうか？

「……なんだか、捉えどころのない話だな」

「失敬、どうにも胡乱な物言いになってしまうところが、私の悪癖ですね」

そうだ、確かこんな感じのやりとりを前にもしたことがあったな、と懐かしい感慨に浸っていると、腕組みをしながら唸っていたムルトが考えを整理したかったのか、声を上げた。

「えーと、つまり、世界を越えるなんて楽勝だー、って思うだけで良いの？　道具とか準備とかは要らないのかな？」

その問いを、旅人は微笑んで肯定する。

「その点はご心配なく。ひとまず今回は、私の手を握って、ともに念じていただきさえすれば、それだけでお好きな場所へと飛んでいけます。ただし逆に申せば、条件が揃うだけで、世界の壁は脆くも崩れ去ってしまうということ――」
　歌うような口調で、かれは言葉を続ける。
「自分自身を信じられなくなったとき、茫然自失したとき、精神が己を繋ぎ止められなくなったとき、ひとは何の前触れもなく、世界から滑り落ちてしまいます。ひとつの世界に留まる能力を失ってしまう、とでも申せましょうか」
「それは、なんとなく分かる気がする」
　なにせオレにとっては身に覚えがある話だ。とはいえ、オレがこの世界に来れたのは天使のおかげでもあった訳だけど。
「かくして世界から世界へと彷徨い漂う魂は、決して少なくありません。本来、私のお役目は……ああ、いえ。くだらない話を長々と続けてしまいました」
　ドーマは非礼を詫びるかのように頭を下げ、再び穏やかな笑みを形作って正面を向く。
「では早速、参りましょうか？　数多の世界を旅するというのは、やはり楽しいですからね。その第一歩を踏み出す一助となれれば、これに勝る幸いはございません。さあ、お二方とも、お手をこちらにどうぞ」
　オレとムルトは、差し出されたかれの両手、というかカラスらしい黒い翼に恐る恐る触れ、言われた通りに意識を集中させる。
　自分が世界を飛び越える様子をイメージし、瞼を閉じて――
「着きました」
　――再び開けばもう、見知らぬ森の中だった。
　一瞬、眩暈に似た感覚がしたような気もするけれど、それだけだった。オレたちは拍子抜けするほど簡単に、世界の壁を越えたらしい。

実感らしい実感はない。でも、目に映るもの、漂ってくる匂い、肌で感じるこの場の雰囲気がこう物語っていた。

ようこそ、見知らぬ場所へ。オレたちの旅は、ここから新しく始まる。

＊＊＊

「これが！　ウワサの!!　オンセンってやつ!?」

こちらに来てすぐ目の前に現れたのは、話に聞いたり画面で見たりしかしたことがないような、大きく立派な旅館というべき建物だった。

オレとムルトは初めての光景に圧倒されつつ、興奮冷めやらぬまま、連れだって中に入った。

ここまで案内してくれたドーマにも、一緒に入ろうと誘ったのだが、少しばかり用事がありますので、と丁重な断りを受けた。

「一度(ひとたび)世界を越えられた今ならば、元の世界に戻ることも容易(たやす)いはずです。とはいえ、慣れるまでは何度か経験を積まれるのがよいでしょう。よろしければ数日後に、お迎えに上がりますよ」

ドーマがそう言ってくれたので、オレたちは申し出をありがたく受け入れて、しばらくの間かれと別れることにした。

「いやあ、でもワクワクするね！　今までも、アニキと一緒にたくさん旅をしてきたけれど、こんな雰囲気のところには来たことがなかったんじゃないかな？」

「オレたちが来る前からこんなに緑豊かな場所なんて、初めてだもんな。なんだか、懐かしいような気持ちになるよ」

温かみのある木造りの廊下をふたり並んで歩きながら、しんみりとそんな言葉を交わす。

旅館側にもドーマがすでに話を付けてくれていたようで、逗留(とうりゅう)の手続きもすんなりと済み、オレたちは晴れてこの温泉旅館の客となった。

あとは、気が済むまでゆっくりするだけだ。

建物自体が相当大きいので、オレたちの巨体でもあまり窮屈さを感じずにいられる。これは本当にすごいことだと思う。

始終身を屈めていなくてもオレたちのツノが天井を突き破る心配は要らないし、自慢の筋肉が廊下に挟まって身動きがとれなくなる、なんてこともない。……旅先でのいつもの悩みだが、今回ばかりは無縁なのがありがたい。

「ねえねえアニキ、見て！　すごく綺麗な庭だよ——あっ、あっちは何か売ってる！……」

いつにも増して浮かれた声の弟分が微笑ましく、自分もつられてあちこちに目を向ける。ムルトの言う通り、外の庭は鮮やかで瑞々しい緑に彩られ、はっとするほど美しい。その少し奥の方には、うっすら立ち昇る湯けむりが見えた。

「露天風呂か、いいな……」

つい口から漏れた言葉に、ムルトが振り向いてにこやかに笑う。

「入り口はすぐそこだってさ。行こっか！」

歩みを進めるムルトと共に、オレは風呂場に続く暖簾をくぐった。

＊＊＊

のし、と一歩を踏み出す。

穏やかな色を湛えた空の下、もうもうと湯気の立つ露天風呂がオレたちの目の前に現れる。巨竜が二頭、並んで入っても余裕があるくらいの、広く大きな湯船だ。

「わーっ、あんなにお湯がいっぱいあるなんて……すごいな、どんなチカラなんだろう！」

豊饒を司る巨竜としてはその辺りもちゃんと確かめておかなきゃね、と口調だけは真面目を装いつつはしゃいでいたムルトは、ふと視線を上げる。

「あっ、他のお客さんだ。こんにちは！」

「!!」

　びっくりした表情でこちらを振り向きながら会釈を返すその先客は、オレやムルトに負けず劣らず立派な体格の竜人だった。黄金色とでも言おうか、ムルトの体色に少し似ているけれど、もっと渋くてメタリックな感じの色合いだ。

　いくら広い湯船といっても、規格外の巨体が三頭も並べばさすがに窮屈だったが、ムルトはそれをまったく苦にもせず、これ以上ないくらい楽しそうだった。湯の気持ちよさに蕩かされたような笑顔は、いつも寝床で見ているのとよく似ている。オレが、なによりも好きな表情だ。

「あの……」

　そんな風にぼんやり考えていたとき、先客が話しかけてきた。低く深く、迫力がある声――のはずなのだが、声量はやけに小さい。

　改めて見てみれば、堂々とした体躯はまるで芸術品のようで、オレでさえ惚れ惚れするような筋肉の持ち主だったし、顔つきだって立派な竜人なのだが、その表情はカラダに似合わず、どうにも自信なさげに見えた。

「急にすみません。俺、……バルズっていいます。その、おふたりとも、すごいカラダですよね」

　ためらいがちではあるが、紛れもない讃辞だ。ムルトは照れ臭そうに頬を掻く。

「へへへ、ありがとうね！　そういうバルズさんこそ、お世辞抜きで最高の肉体だと思うよ！　オイラさ、父ちゃんとアニキ以外で、そんなにデカいカラダ見たことないもん」

　オレもその意見には賛成だった。オレやムルトみたいに、ひたすら大きく、ぶっとく、ゴツゴツ張り出すというよりは、徹底的な節制と調整によって、細部に至るまでバランスを考え尽くしたような体型の美しさ。たぶん、体脂肪なんかもほとんどないんだろう。

「オレはグラン。こっちはムルト」
「よろしく、バルズさん！」
　既に肩が触れあうくらいの近さだったけど、手を差し出せばかれは少し含羞んで握手を返してくれた。
「別に呼び捨てでもいいですよ。図体だけはデカくなったけど、それで偉くなったわけでもないし」
「いやー、でも、その筋肉は混じりっけなしの本物だよ。カラダを見てるだけで分かるもん。自信を持って良いと思うな」
「ホンモノ、ハ……」
　無邪気に誉めそやすムルトの声を聞いていたバルズは、一瞬だけひどく寂しげな顔になったが、すぐに表情を繕い、言葉を繋げた。
「……もし、おふたりさえ良ければ、ちょっと俺の話を聞いてくれませんか」
　思いがけないかれの言葉に、オレとムルトは顔を見合わせた。
「それは別に良いけど……オイラたちがチカラになれること、何かあるかな？」
「悩みの相談、と言いますか、本当に話を聞いてくれるだけで良いんです。そうだ、せっかくだし、飲み物も奢らせてください」
　オレたちはバルズに誘われ、いったん風呂から上がることにした。ちょうど良い具合に休憩用のスペースがあり、冷たい飲み物を揃えた屋台も出ている。
　そこに腰掛けて涼を取っていると、バルズはオレとムルトに瓶入りの飲み物を手渡してくれ、自分も同じものを一口呷った。牛乳……よりも濃厚で、ふくよかな香りが漂う。
「それで、聞いてほしいことっていうのは？」
　オレが訊ねると、バルズは小さくため息を漏らし、表情を堅くする。
「はい。俺は……本当は、こんなカラダの持ち主じゃないんです」

　湯気が立ち昇る巨体を物憂げに丸め、心奥（しんおう）に抱え込んだ悩みをぽつぽつと吐露するその姿は、傍（はた）から見ると滑稽（こっけい）だとさえ言えたかもしれない。

「なんて言えばいいのか、難しいんですが……生まれてからずっと、俺は身体付きも平凡で、性格も見ての通り、明るい方じゃなくて。でも、ここへ来てから色々なことがあって、身の丈に合わないほどの巨体になってしまったんです。それが、他人を騙しているような気がして」

　身の丈に合わないカラダ――なんて変な言葉ですよね、と自虐めいた笑みを浮かべ、かれは恥ずかしげに肩をすくめる。

　けれど、かれの言葉はどこまでも真剣だった。だからオレたちも、かれの想いに応えて、続く言葉に耳を傾ける。

　――バルズのものがたりは、そんな風にして始まった。

## 二　激白！　限界会社員の幻想と現実

そう、そうだ。俺はげっそりとやつれ果てた人間としてここに迷い込み、歩き回った挙句、この温泉に来たはずだ。

それが今となっては、こんなにデカいバケモノみたいな図体になってしまっている。

……いや、でも、これは俺が望んだことだ。いつも通り周りに流されただけかもしれないが、俺が願った結末なのは確かだ。

俺は——快感を望んだ。気持ちよくなることを望んだ。そして、温泉はそれに応えてくれた。

＊＊＊

少し高めの湯温が、凝り固まり蓄積した疲労を溶かしていく。知らず知らずのうちに、ふうと息が漏れる。

こんなにゆっくり湯船に浸かったのは、いつ以来だろう。……年単位なのは確かだ。今まで住んでいた部屋で風呂を沸かした記憶はない。

「お湯加減はいかがですかい、お兄ィさん？　熱過ぎやしませんかね？」

声を掛けるのは、さっき背中を流してくれた三助さん。簡素な腰巻きだけという出で立ちの、……直立した爬虫類みたいな見た目のヒトだ。

「きもちいい、です……お風呂自体、久しぶりなので」

「そいつぁ良かった！　なんせ、えらくお疲れでしたからねえ。思う存分ゆっくりしていってくださいよ！」

快活に笑う顔は薄緑の鱗に覆われ、髪の毛がない頭からは、太いツノが何本も生えている。トカゲというより、ゲームでよくあるドラゴンみたいな厳つい顔。ここに来るまでに見たものよりは常識的だが、充分ファンタジーだろう。

最初に見たときは、それはもうびっくりして腰を抜かしかけたけれど、そんな俺に女将さん（最初に出会った女性がそう呼ばれていた）は至極平然とした顔で言った。

「あら、竜種をご覧になるのは初めてでしたか。この辺りは日本とも繋がりがありますが、竜の世界はもっと近くにございますので……」

はあ、と気の抜けた返事しかできなかったが、そんなわけで宿の中は従業員も客も、竜っぽいヒトビトでいっぱいだった。というより人間は俺だけだったんじゃないだろうか。

「いやあ、今日はたまたまなんじゃないですかね。あちらのお客さんもちょくちょく来られますし、おかげさまでホラ、お兄ィさんみたいなカラダの扱い方もこの通り覚えましたからね」

浮かんだ疑問を三助さんに投げかけてみたら、背中を摩りながらそんな風に答えてくれた。

鱗の生えた大きな手は、天然のブラシのように適度に硬く、妙に心地よく感じる。

それにしても、と、湯に浸かる自分の身体を見ながら思う。総じてゴツい印象だった。竜のヒトたちはみんな結構大柄で、三助さんはその中ではまだ小柄なほうだけど、それでも俺より二回りくらいはデカい。意味もなく劣等感めいた気持ちが頭をもたげてくる。

（……あれ？）

自分の肌がなんだか変な色になっている……気がしたが、見返してみるとそうでもない。

ほんのり青みを帯びた湯の色のせいで、変に見えてしまったのだろうか。

（まあ、見間違い……だよな。温泉に浸かりっぱなしでのぼせるのも良くないし、そろそろ上がろう）

「おッ、上がられますか。それじゃあ浴衣を用意しますね！」

と言って三助さんが出してきたのは、明らかに丈の合っていないブカブカの浴衣だった。

「あの、これ、サイズが……」

「あーすいません、今お出しできるのはそれか、もっと大きなものしかご用意がないんでさあ」

　仕方ないから着てみたが、背中には切れ込みが入っていて妙にスースーする。……やっぱり、竜のヒトたち用なのだろうか。

　まあ、我慢しよう。俺は裾（すそ）を踏まないようにたくし上げながら、案内された部屋に入った。

＊　＊　＊

　もうしばらくしたらお食事をご用意します、と言われたので、それからは部屋でごろごろしていた。内装は和風旅館に近いようだが、どことなく細部の様子や雰囲気が違う。ファンタジー世界の東洋風、とでも言った方がしっくりくるだろうか。

（確か、どこかの温泉が日本に繋がってるって言ってたっけ。あと、『竜の世界』にも）

竜。想像上の生き物。……だと思っていた。いや、今までの人生ではそうだったんだろう。ここでは、違う。

　それにしてもさっきから、なんだか妙に暑い。湯あたりでもしたのだろうか？　やたらと喉が渇くので、水をがぶがぶ飲んでしまう。まるで自分ががらんどうの枯れ木にでもなってしまったかのように、乾いて、渇いて、仕方ない――

「お食事の用意ができましたよ。お部屋でお召し上がりになりますか？」

「あ……」

　女将さんの声に、はっと我に返る。

「あら、どうされました？　もしご気分が優（すぐ）れないようでしたら、いったんお下げしますが」

　そう言われて気付いた。これは喉の渇きだけじゃない。もっと根本的な、根源的な、生命を繋ぐためのエネルギーが足りないのだ、と。

「――いや、むしろ、どんどん運んで下さい。お腹ぺこぺこなんです！」

それから俺は食べに食べた。
煮物、焼き物、汁物、海の幸に山の幸、次々に出て来る料理を片端からぺろりと平らげたし、ご飯だって三杯はお替わりした。
「お食事はお気に召していただけましたか？」
にこやかに膳を下げながら、女将さんが俺に話しかける。
「いやー……美味しかったです。俺、料理とかあんまり分からないんですが、自分に合ってる、っていうか」
実際、今までの人生で一番美味しかったかもしれない。
「……板前さんも、別の世界から来たひとなんですかね。ああいや、なんか、見たことのない料理もあったので」
俺がそう問い掛けると、女将さんは頷く。
「ええ、この温泉にいるものはみな、どこかの世界から来たものばかりです。旅館の従業員も例外ではありません」
「へー……」
「ですから、ここで温泉を開こうと決めたとき、私は考えたのです。目標……いえ、夢のようなものですけれど」
静かな熱意と、少々の含羞(はにかみ)を滲ませて、その言葉は続く。
「ここは誰にとっても異郷です。だからこそ、誰もが全ての懸念やしがらみから解き放たれて安らげる場所になりたい――なんて、ちょっと大仰かもしれませんね」
女将さんの言葉を、しかし俺はあまり聞いていなかった。腹がいっぱいになって急に眠気が襲ってきていたし、さすがに食べ過ぎたせいだろう、余裕があったはずの浴衣さえ心なしか窮屈に思えてくる始末だ。俺の様子に気付いたのか、女将さんは立ち上がって、
「よろしければすぐにお布団をご用意しますね」
と、俺に微笑んで部屋を後にした。
そして俺は……いつしか眠りに落ちていた。

「……ん」

　どれくらい寝ていたのだろう。瞼の向こうに陽光のきらめきを感じて、俺は微睡の浅瀬から徐々に引き揚げられていく。

　そのときの感覚は今も鮮明に記憶している。あんなにすっきりと清々しい気分の目覚めは、生まれて初めてだった。

　とりあえず起き上がり、伸びを――しようとして気付く。妙に視点が高い。

　それに、この手は。瑞々しい青緑の、大きいながらにゴツすぎはしない手。人間の手に似ているけど、人間のものでは絶対にない手。

「え!?」

　見覚えはあった。旅館のスタッフや逗留客、竜人とでもいうべきヒトたち。それはそうだが……でも、どうして自分が？

　頬を引っ張る。しっかりした強度、これまた人間ではない感覚だ。見えないけれど、きっと顔も変わっているんだろう。

「痛く……はない、けど」

　頬に触れた感覚は、夢の続きなどではない。紛れもない現実だった。俺のカラダは、いまや正真正銘、竜人と化している。そう認識すると、このカラダが余計に喜んでいるような気がした。

＊　＊　＊

「金色じゃなくて、青緑？」

「ああ……そのあとも色々とありまして」

「そっか。それでそれで？」

　大体そんな調子で、俺はつらつらと喋っていた。相手に自分の常識が通じるかは不明だったが、概ね理解してもらえたようだ。

　我ながら突拍子もない俺の身の上話を聞いて、相手は時折頷いたり、相槌を打ったりしていたが、ややあって青紫の方――グランと名乗った巨竜が、つい興味を抑えきれなくなったという様子で口を挟んできた。

「バルズが前にいた世界って、日本のこと？」
　故郷とはいかにも縁遠そうな相手からそんな言葉が出てきたので、俺は一瞬面食らう。
「！　知ってるんですか。ああ、でもそう言えば女将さんも知ってたな……この辺りだとみんな日本のことは知ってるんでしょうか」
　しかしグランは首を振って、俺に答える。
「さあ、どうだろう。オレたちも別の世界からここへ来たんだ。あと、オレも元々は人間で、日本にいたから」
「え……」
　さらっと言われた衝撃の事実に、俺は二の句も継げないままで、手に持った飲み物もこぼしかけてしまった。
　慌ててそれを飲み干したあと、無意識のうちにかれの巨体を上から下までまじまじと眺め、はー、と息を漏らしたところで、我に返る。
「あッ、急にじろじろ見てしまってすみません。その……俺たちの他にもいるとは思わなくて」
　息を整え、改めて頭を下げる。
「おふたりのこと、もっと詳しく伺っても構いませんか？」
「もちろん良いよ。そっちの話もまだ聞きたいし、時間はいくらでもあるからね」
　二頭の巨竜は自己紹介も交えつつ、かれらの世界でどんな仕事をしているのか、かいつまんで語り聞かせてくれた。
　人間だったグランが巨竜の世界へ導かれたときの話や、ムルトと出会って世界を巡り始めた話、その旅が、ふたりを巨竜へ成長させたということ。
「つまり、グランさんは選ばれた存在だったんですね」
「そりゃあもう、なんてったってアニキは特別だからね！」
　我が事のように胸を張り鼻息を荒げる相方を小突いて、グランは少し恥ずかしげに俯（うつむ）く。

「……確かに、天使はオレを選んでくれたよ。そのおかげでオレはムルトとも出会えたんだし、巨竜にもなれた。でもそれまでは――オレは、なんにも持っていなかった。人間だったとき、オレは誰にも選ばれなかった。……まあ、今となってはどうでもいい話だけどね」

　内に秘めた思いを呟くように語るかれの姿は、筋骨隆々たる巨体とは裏腹に、どこか儚くさえ見える気がしたが、自らの言葉通り、もう既にそのことで心を悩ませてはいないようだ。

　……そのことが、俺には眩しく見える。昔の悩みも苦しみも、俺の心の中では今なお燻っているからだ。縺れて煙たいその気持ちが、はあ、というため息となって牙の隙間から漏れる。

「俺も……本当にちっぽけな人間だったんです。会社に入ってから、心が壊れるくらい働いて、でも何も手元に残っていなくて。挙句はこんな訳の分からない所まで来て、カラダだけは立派になったけど、心は追いついてくれなくて」

　弱音をこぼし始めると、もう止まらなかった。見栄を張って言うまいとしていたことも、どうせ誰にも聞いてもらえまいと諦めていたことも、あらゆる思いが堰を切ったように、俺の口から流れ出ていく。

「鏡で自分を見る度に、怖くなるんです。お前なんかにそのカラダは勿体ないんじゃないか、って。いつまで経っても理想には近付けなくて、なんだか酷いズルをしてるみたいで……」

　そのとき、途切れがちになる声を遮るように、黄色の巨竜が俺をそっと抱きしめてくれた。

「大丈夫だよ、バルズさん」

「……」

「オイラたちも、色んなことがあって〝巨竜〟って呼ばれるようになったけど、その前も後も、オイラはオイラだったし、アニキはアニキだったから。なんて言うのかな、言葉にしにくいけど、自分が自分だって思えるようになると思うよ」

ムルトというかれの言葉は、俺をじんわりと包み込むような優しい温もりに満ちている。それは本当に心地よかった。……けれど。

「うん、――ありがとう」

俺はせめてもの感謝を込めて、笑顔を作る。そうしてゆっくりと、かれの抱擁から身を引いた。

「あー、それでその……この際なのでもう一つ、聞いておきたいんです。困り事、というか……竜のカラダって性欲が暴走しがちなんですよね。夜になるといつも、その、色々なところが疼いて……正気を失ってしまうようなんです。それもなんとかしたいんですが……」

言える間に言っておこうと口に出したは良いが、やっぱり恥ずかしい。きっと顔も真っ赤になっているのだろう。しかし、グランたちはまったくそれを気にする素振りも見せない。

「いままであまり考えたこともなかったけど、言われてみれば確かにそうだな。オレが正気を保ててるのも、ムルトがいたからなのかも」

「それでも一日中ヤりあってることもザラだしね。オイラたちの世界だとそれが仕事みたいなモンだったし」

「オレたちが交わることで世界が豊かになるんだ。我慢してても良いことは一つもないからな」

「趣味と実益を兼ねた天職ってやつ？」

そう言って、ふたりは笑い合う。そしてごく自然な調子で俺に話を戻す。

「バルズには、決まった相手はいないのか？」

俺は少し口籠もった。

「ああ、えっと。一緒に暮らしてる相手はいますけどね。前からの知り合いだけど、もともとは親しかったわけでもなくて、いまは……うん、なんて言えば良いんだろう」

あいつとの関係を表す言葉を考えあぐねて、ふと中空に目を向ける。

「悪いヒトではないんです。俺に付き合ってもくれるし、性欲をぶつけ合ったりできる相手なんて他にはいないし」

(——だアからさ、オマエは——)

　あいつの声が脳裏に響く。

「ただ、ちょっとした一言が引っ掛かったり、些細（ささい）な考え方の違いに耐えられなくなることもよくあったりして、……難しいんですよね」

「そうか。悪いな、立ち入ったことを聞いてしまったようだ」

「あ、いやっ、別に良いんですよ。仲が悪いとかいうわけでもないですし！　ただ、時々独りになりたくなったりもするんです。そんなときはこうして、お風呂に来るのが一番ですから」

　俺は手に持っていた飲み物をぐっと飲み干すと、空き瓶を回収用の箱に置いた。少し伸びをして胸の奥に溜まった澱（よど）みを息と共に吐き出す。

「でも、おふたりとお話しできて、少しホッとしました。あいつはこんな話、したがらないでしょうから」

「へへ、こうして出会えたのも、きっと意味があることなんだよ。オイラたちはまだ数日間はここに泊まってるから、また良かったら一緒にお話しようよ」

「はい……では、また」

　手を上げる二頭の巨竜に俺は軽く会釈（えしゃく）すると、その場を後にした。とりあえずの気は済んだし、ふたりとの会話はとても面白くて、有意義でもあった。機会があればまた会いたいのも本心だ。

(でもまあ……こればっかりは話して解決する問題でもないからな)

　やたらデカく張り出す胸と、ボコボコの腹筋、更にその下——俺を悩ませる元凶が潜む割れ目（スリット）。順々に目を遣って、またも嘆息を漏らす。

(とりあえずは部屋に戻るか。いまの時間ならあいつもまだ帰ってないだろうし……)

＊＊＊

（――オマエは、もっと自分のデカさを考えろって。大会優勝者(チャンピオン)の名前が泣くぜ？）

ふとしたとき、気を抜いた瞬間に、心の中で蘇るのは、悪戯(いたずら)っぽい子供のような高い声。その声の主こそ、俺がいまこうしてここにいる理由を拵(こしら)えた張本人だ。良きにつけ、悪しきにつけ。

俺がこんなカラダになってから、それなりに時間は経っているはずなのだが、それでも時折距離感や力加減を間違えてしまうことがある。

そんなときは決まって、あいつがどこからかやってきてはあの声で揶揄(からか)ってくるのだ。

うざったいけど、そのおかげで俺はまだ俺でいられるような気がして、安心感と、拭い去れない不安のようなものを覚えて――

……ええと、何の話だったっけ。

ああそうそう、夢の話だ。この旅館に来て、青緑の竜人に変身を遂げた後も、時々夢を見た。

――良い夢ではない。会社にいる夢だ。

下請けの下請けの更にまた下の零細企業で、クソみたいな研修が終わったあとに配属されたのは、俺を含め部長以下四名しかいない〝先端技術開発部〟だった。

配属早々、燃えに燃え上がる案件にどっぷり浸からせられたけど、その頃はまだ残業時間も一応はよくある範疇(はんちゅう)に収まっていた。

そんなこんなで、一月のことだったかなあ。

部長を除けば最古参の先輩が、といっても三十になるかならないかだったけど、月内いっぱいで辞めることになって、もうひとりの先輩、俺より三つ上の練谷(ネリヤ)さんに引き継ぎをおこなっていた。

俺は……まあ、新人なりに仕事に追われて、割と遅くまで会社に残っていたけど、ふたりの先輩はそれよりもっと遅くまで頑張っていた。

それでたぶん、表面上は上手く行っていたんだろう。少なくとも辞める方の先輩、更原（サラハラ）さんという名前のそのヒトは、退職の段取りを着々と進めていたし、周りも当然そのつもりでタスクの割り振り（別名、押し付け合い）をしていた。そうして更原さんの退職の日になり——

練谷さんが音信不通になった。

俺が見たのはちょうどその時の夢だ。死んだような顔の更原さんから、複雑怪奇でいつ果てるとも知れぬ職務の引き継ぎを受けていた。

……ああ、死んだような顔というのは、若干不適切だったかもしれない。更原さんはあの後、自ら世に別れを告げてしまったからだ。だから実際には〝引き継ぎ〟なんてものはなかった。

もはや誰も全貌を知らない仕事が雪崩（なだれ）を打って俺を襲ってきた。夢の中にすら逃げ場はない。

——そんな、悲惨極まる過去の再現だった。

で、当然目覚めはあまり良くないので、俺は気分を変えようと朝風呂に出向くことにして、ひとまず借り物の浴衣を身に着ける。

……ここへ来た時に着ていた服は試すまでもなく袖も通らなさそうだったし、いつの間にか大きな翼と長いシッポまで生えていたせいで、パンツすら履けない。

その一方で、ブカブカだったはずの浴衣は、心のどこかで危惧していた通り少し窮屈にさえ感じられる。けれど、いまはこれしか着るものがないのだから、仕方ない。

湯を浴びるべく廊下を歩いていると、他の客たちが気さくに挨拶（あいさつ）をしてくれる。この数日でようやく見慣れてきた〝竜〟という存在。……いまの俺も、かれらに勝るとも劣らない体格の竜人になってしまっているのだ。

その変化は肉体のみならず精神にも及んでいるらしい。以前はみんな同じような顔に見えていたのに、いまは各々（おのおの）の見分けが付くようになった。

一口に竜といっても、いろんなタイプがあるらしい。肩幅が広く、がっしりした者もいれば、ほっそりと優美で、しなやかな体躯の者もいる。でもなぜか、

「オスばっか……だよなあ」

そのことは疑いようもない確信として、俺の心に根を張っていた。――無意識に〝オス〟と表現して、いまや自分もその一員なのにと思うと、なんとも言えない複雑な気持ちになる。

オス、もとい、男性という確信はあるのだが、その象徴は隠れていて見えない。服を着ているからではなく――浴衣を着た者も少しはいたが、大部分は何も見に纏(まと)っていなかった――股間にあるモノがぶらぶら揺れる肉棒ではなく、ただの切れ目だけだったからだ。

かく言う俺の股間にあるのも、薄く色付いたスリットだけ。それが人目に触れること自体は、何故だか恥ずかしくない。と言いつつ、公衆の面前で堂々と触るのはさすがに気が引ける。

（この中身は気になる、けど……）

「どれどれ」

「ひぃやッ!?」

足元から、唐突に股間を撫でられる感覚がした。慌てて振り返ると、そこにいたのは小さな――ちょうど股間に手が届くほどしか身長がない、子供らしい姿だった。

「ち、ちょっと、何してるの！　そんなところ触ったら……あぁッ！」

「へへ、思った通り。やっぱり感度が良いねェ。〝なりたて〟ならまだ慣れちゃいないだろうし、まア、ちょうど良いだろ」

ちまっこい魔の手をなんとか振り切り、息を整えながら犯人に向き合う。にやにやと性悪な笑みを浮かべつつ俺の股間を眺めているのは、紅(あか)い鱗(うろこ)の色も鮮やかな、竜人の少年だ。

「あ……あのねえ、キミ。こんなことやっちゃいけないよ。誰かおとなのヒトと一緒じゃないのかな、ははは……」

「へーエ、どうして触っちゃダメなのさ？」
見た目に似つかわしい、高めの元気な声音。
しかしその口調は憎たらしいほどに軽々しく、こちらをおちょくるような響きに満ちたもので、俺は眉根が引きつるのを感じた。
「どうしてって……そりゃ、汚いし……」
「汚かアねえよ、綺麗なモンさ。なんだったら舐めても良いくらいだ」
「……あのね、こんなにヒトが大勢いるのに、そういうのは……」
俺はどうして、異世界のガキんちょ相手に、他人の股間を触ることの是非を説こうとしているのだろうか。
「ほっほー、じゃあふたりっきりなら良いってことかい？　意外と積極的だねエ、カズヒトは」
「いや、そういうことじゃなくて……って、え？　俺の名前？」
聞き違いと断じるにはあまりにもはっきりと、仔竜の声が俺の頭を揺さぶる。――まさか。
「なアんだ、やっぱり気付いてなかったのか。冷たい奴だなア。何度も夜を一緒に過ごした仲だろ？」
自分でも頭がおかしくなったかと思ったが、考えれば考えるほど、目の前の小さな生き物にまったく似ても似つかない相手の姿が重なる。
「ね、練谷……先輩？」
「大正解」
ぴんぽーん、と口で言いながら、かれは笑みを大きくする。
「いやア、会いたかったぜ、卯野後輩！」

＊＊＊

結局、混乱した頭を整理する暇も与えられないまま、俺はこの先輩と称する謎の仔竜と一緒の風呂に入っていた。
露天風呂に並んで浸かる大小の竜。傍からは親子に見えるかもしれない。悪い冗談みたいだ。

「どうした？　せっかく感動の再会だってのに、やけに渋い顔してるじゃん？　あ、さっきのことまだ気にしてんのか？　ったくよォ、あんなのはただの軽いスキンシップだろ」

「いやそれもありますけど、なんていうか……もう何から突っ込んで良いのか分からなくて」

「お？　この穴ならいつでも使って良いぜ？」

「……例えばソレとか」

これ見よがしに大股開きになり、身をくねらせる相手を見ていると、比喩ではなく頭が痛くなってくる。

「そもそも、なんで先輩がここにいるんですか。なんで、子供の竜？　になってる上に、言動がまるっきりセクハラになっちゃったんですか。ていうかなんで俺までこんな……」

「さア？　知らね」

俺の口から漏れ出た疑問の洪水をその一言でばっさり斬り捨て、紅い仔竜の冷笑的な態度は小揺るぎもしない。

「会社もなにもかもダルくなって、ふっと気が付いたらここにいた。大方オマエも一緒だろ？　なんか世界の狭間だとかって言われたけど、よく分かんねえし」

はーっ、と気持ち良さげに身体を伸ばして、かれは湯船にぷかりと浮かぶ。——練谷先輩はいつもそんな風に伸びをしていた。

その仕草は確かに、会社で過ごした幾夜もの間に見慣れたもので、だからこそ俺は余計に複雑な気持ちになる。

「まアせっかく温泉に来たってんなら、シケたツラしてちゃ勿体ねえしな。とことん楽しんでやれってだけさア」

「そりゃあ……俺も、そう思いましたけど」

これ以上疑問の答えを求めても、いまはまだ意味がなさそうだ。

とりあえず風呂から上がった俺たちは、そのまま中庭に出て、点在する四阿のひとつに腰を下ろす。

　先輩は近くでビン牛乳を買っていたらしく、わざとらしく腰に手を添えて一気飲みしていた。
「んく、ぷは。いやア、一汗かいた後はこれに限るね！　オマエも飲め飲め！」
「股間に当てないでください」
「仕方ねえじゃん？　こんなカラダだし、届かねえの。あ、下の口で飲むってのもアリだぜ？」
「そういうのもう良いですから……っていうか冷たいですって！」
　相変わらず過激なセクハラを繰り出してくる魔の手から逃れつつ、手渡された牛乳は素直に口に運ぶ。牛乳？　いや、思っていたのとは違う味だった。でも美味しい。とても濃厚だ。
「ったく、オマエは前からカタいんだよなア。仕事じゃねえんだし、力抜けよ。そんなんだと肩凝っちまうぞ？　あー、そうだ、せっかくだしマッサージでも受けりゃいいや！」
　股間への攻勢をいなされ行き場を失った手をわきわきとさせながら、仔竜はそう言う。
「マッサージ……あるんですか？」
「おーとも、なんてったって疲れを癒やすための温泉だ。あれはなア……〝良い〟ぜ。若返る。いや、オマエも試せば分かるって」
　妙にしみじみと力説するかれの意図する所はよく分からないが、正直な話、それは魅力的な提案だった。竜人のカラダにまだ慣れていないためなのか、元気自体は有り余るほどあるのに、どことなく拭い去れない違和感がある。
　ひょっとすると、マッサージやら整体やらをしてもらえれば、このむずむずと落ち着かない感じも和らぐかもしれない。マッサージなんてそう言えばもう何年も行ってないし――
「いきます」
　気付けば即答していた。あれ、こんな返答、前にもした気がする。まあいいや。
「そう来なくっちゃなア！　よーし、こっちへついてきな。この可愛いお助け仔竜が案内して進ぜよう！」

＊＊＊

そんなわけでかれに連れられて向かった先は、人通りも少ない、静かな雰囲気の一角だった。

「いいかい、寿人くん。この温泉で大事なのは一つだけだ。——全てを受け容れ、楽しむこと。オマエはもう、細かいことにかかずらって悩む必要もない。流れに身を委ねれば良いのさ。どんなことが起ころうとも、な」

「なんか急に怖いこと言うじゃないですか」

　どこからか心安らぐ匂いが漂ってくる部屋を前にして、わざとかしこまった口ぶりで先輩がそんなことを言うので、ついツッコミを入れてしまった。

「怖くない怖くない。ドーンと構えてりゃいいのさ。んじゃ、ごゆっくりー」

「えー……」

　結局、言いたいことだけ言い放って、かれはどこかへ飛んでいってしまった。

　逡巡していても仕方がない。意を決して一歩踏み入れれば、すぐさま笑顔の受付に迎え入れられ、あれよあれよと言う間に薄暗い部屋のベッドに案内されていた。

　植え付けられた不安と、それでも頭を擡げる期待にどきどきと高鳴る鼓動を感じていると、柔和な顔つきをした初老の竜人が近付いてきた。

「それじゃ、マッサージを始めますよ」

　言われるままに、ベッドにうつ伏せになる。俺の身体を触るその手は驚くほどに滑らかで、心地よい暖かさだった。自分でもまだ扱い方が分かっていない竜の筋肉を、適切な手技で揉み、摩り、ほぐしてくれる。

　あるべきものを、あるべき場所へ収めていくような……身体がより正しい状態になる感覚。

「お客さん、結構いいカラダですねえ。透き通るみたいに綺麗な緑色だし、このタテガミだってサラサラだ。細身だけど、筋肉はちゃんと付いてる。揉み甲斐があるってもんでさ」

聞き慣れない讃辞に、褒められた経験なんてほとんどない俺は返す言葉も知らず、ただ快楽とともに呻くのみ。

「こちらへ来られた時には、竜じゃなかったんですってね。――どうです、竜のカラダも良いもんでしょう？　最初はまあ戸惑うこともあるでしょうが、なに、これからじっくりと慣れていけば良いんですよ。時間はいくらでもあるし、楽しいことだって山ほどありますから」

「え、ひ、あぁあ、きもちいい……」

　尻の先で、想像だにしなかった鋭く強い快感が生まれる。そこから背筋を登って脳みそを直撃する爆発的な喜悦。たぶん……シッポ、だろう。

　俺のシッポが、ぐに、ぐにと揉まれ、先へ先へと進む度に、思考を全て放棄してしまうほどの刺激が俺の全身を襲う。

「うーん、これでもまだカラダの硬さが残ってますねえ。良いですか、心の持ちようは、そのまま肉体の調子に直結しているんです……」

　遠い海鳴りのように優しく深いその声が、俺の心を包み込み、じわじわと浸透していく。

「……いまはとにかく、全てを忘れて。そう、私の声に、ただゆっくりと身を委ねて下さい。そのまま深呼吸しましょう。吸って……吐いて……心を解き放って、自由な子供のように――」

　本当にどこかへ飛び立ってしまいそうな、心がそのまま溶けて流れ去ってしまうような、未知の心地よさが押し寄せてくる。

　それは、波打つ眠気のように抗いがたい恍惚だった。温かなその手が俺の肌を撫でるだけで、まるでそこから新しく作り替えられていくような、いや、生まれ変わるような、……ああ。

「はい！　――終わりましたよ。あとはお水をたっぷり飲んで、溜まった良くないモノは全部出しちゃってください」

「ありが……とう？」

俺の喉から出た声が妙に甲高（かんだか）い。というか、このスタッフさんってこんなにデカかったっけ。俺が見上げるほどの、背丈……？

　手を見る。いつかの目覚めの時に初めて見て驚いたのと同じ、青緑色。しかし色ツヤやハリが全く違う。なにより節張っていない、小さく柔らかな、子供の手だ。

「え、俺、またなんか変になってる!?」

「よオ、終わったか？　うむうむ、見立て通り。良い感じに可愛くなったなア！」

　ひょっこりと現れて覗き込む先輩の顔が、さっきまでとはまるで違う近さだ。もうこれは認めるしかない。

「俺、竜になった上に子供にまでなっちゃったのか……」

「言ったろ？　受け容れて、楽しめって」

　今では俺とさほど変わらない大きさの仔竜がそう茶化す。

「この温泉はさ、自分を見つめ直す場所でもあるらしいぜ。何かする度に姿が変わる、なアんてこともザラだ。でもそれも心の持ちようでな。気に入った姿がありゃそのままでいられるって寸法さ」

　こんな風にな、と先輩はカラカラ笑う。

　俺たちはマッサージの部屋を離れ、散歩がてらその辺りを歩いていた。子供サイズになると、ついさっき通ってきたはずの道も違って見える。十数年ぶりの視線の低さにはまだ慣れない。

「俺、まだよく分かんないんですけど……」

　自分の声音があまりにも高いので、二、三度咳払いして調子を整える。当然だが何も変わらない。気休めだ。

「これは夢じゃないんですよね？　でも、現実でこんなの、あり得るわけないし」

俺の混乱を、隣の仔竜は鼻で笑う。

「なアに言ってる。他ならぬオマエのカラダが、そこで感じるモノ全てが証拠だろ。これは現実さ。なんなら、もっとしっぽり教えてやろうか？」

「うう、訳が分からない。そもそも竜ってなんなんだ」

「そオだな。いくらでも好きなだけ気持ち良くなれる、最強で最高のイキモノってとこか」

「気持ち良く？　……でも、こんなことばかりしていて良いんだろうか。俺にはまだ、なにか、やらないといけない、ことが――」

「そう、ヤらないといけない」

　鼻息を荒げ、声を上擦（うわず）らせつつ、かれは俺に迫ってきた。

「近頃は色々マンネリで、溜まりすぎててさ。見てくれよオ、スリットから今にも出そうなんだ。パンッパンだぜ？　へへ、いやホント、オマエが来てくれてちょうど良かったよなア」

「は、な、何言ってるんですか、練谷先輩!?」

　明らかに様子のおかしな先輩を払いのけようとするが、思ったよりも重い。というか、小さくなった今の俺には、相手を押し返すだけの力はなかったんだろう。

　しかし先輩は、一旦その場でにじり寄るのを中断し、不満そうに鼻を鳴らす。

「アルバ」

「え？」

「名前。竜になってから付けた。分かるだろ、練谷快活（ネリヤヨシカツ）なんてクソダサい名前はうんざりでさ。全然竜っぽくもねえし。だからもう昔の名前で呼ぶのはナシにしてくれ。虫酸（むしず）が走る」

「アルバ……先輩？」

　なんとか受け答えはしたが、その間にも相手は再びこちらに迫ってくる。俺はそれをなんとか抑えようとするが、どうも敵（かな）わない。というかこのカラダ自体、俺の意思をすっぱり無視してかれの猛攻を受け止めたくてうずうずしているようだ。さっきから、股間の辺りがむず痒い。

そして俺を襲いつつある仔竜は、頬を赤らめ、息を弾ませつつ、小さな顔をにやりと歪めて、今にも舌舐めずりさえしそうな様子だ。
　――発情している、とでも言うのだろうか。

「あアもう、その〝先輩〟ってのも要らねえや。言葉だってタメ口にしろ。ンなことより、だ。さっさと一発ヤっちまおうぜ。オマエ、最初は受けで良いだろ？」
「え、ちょ、あッ――!?」

　そしてついに、俺はアルバに――かつて先輩だった竜の子供に押し倒され、組み敷かれてしまった。
「だいじょーぶ、すぐ分かるさ。竜は頑丈なのが取り柄なんだ。小さい頃から慣らしときゃ、今後もラクに気持ち良くなれるし、な！」
　そう嘯くかれの股間から、腰回りよりも太く、身の丈より巨大で非現実的なブツが聳え立つ。
「いやいやいやおかしいですって！　何ですかソレ!?」
「ヘッ、気にすんな。オマエもすぐこうなるんだし、別に良いだろッ！」
　よく分からないが恐ろしげなセリフを吐いて、アルバは俺の細い腰をがっしりと押さえつけ、鼻息も荒くソレを押し込む。

「痛ッ……く……ない？　え？　なんで……」
「へへっ、ふへへ。いいぞ良いぞ!!」

　アルバが腰を動かすたびに、俺のずっと奥から正体不明の熱さが溢れ出す。それは、たぶん、快感だったのだろう。狂ったエンジンのように魂の根本を揺さぶる、性的な衝動だ。
「ッ、アルバ……！　そ、それ、も――」
「――もっと欲しい、だろ？　分かるぜ、竜の性欲なら当然だよなア。しかもいちばん最初の体験だ。ハマらねえ方がおかしい」

　ぱんぱんとリズミカルに淫（みだ）らな音を立てつつ、息を切らす素振りは見せず、口調もいつも通り軽々しい。けれどその声を彩るぎらぎらとした欲望の艶色（えんしょく）は、いっそ狂気と言ってしまっても良いほどで、この仔竜自身が得体の知れない衝動に呑み込まれていることは明らかだった。

――けれど、そんなことはどうでもいい。

「〰〰〰、〰〰〰ッ！」
「お、ノってきたな。うんうん、良いことだ。かく言うこっちも同じだったよ。最初のうちはどうすりゃ良いのかさっぱり分かんなくてさア。でも安心しろや、オマエもすぐにそのカラダの楽しみ方が身に染みて分かるから、な！」
　先輩だったはずの、色狂いのイキモノが囁きかける言葉を、いまの俺は否定できない。ただひたすら、このまぐわいが与える快感を貪っていたい。
　もっと大量に、もっと気持ち良く、そしてもっともっと力強く！……
　でもそのためには、このままでは不十分だ。いまの自分には足りないものがある。何がだ？
……ナニが、タリナイ？
「とりあえず一発、受け取れッ！」
「ンあッ、ぐ、ぼ――」
　相手と繋がっている股間の穴に、突如巨大な熱量と肉棒自体の急激な膨張を感じ取る。

爆発。まさしくそう形容するしかなかった。
　小さくなったカラダをまた膨らまされそうなほどの量と勢いで、アルバの巨砲が精を噴（ふ）く。腸を逆流し、胃さえこじ開けて、口内が生臭い味でいっぱいになる。……苦しい、はずなのに多幸感が広がる。これは俺の好きな精液の味だ。訳が分からないが、いつの間にかそうなっていた。俺はもう、嗜好さえも塗り替えられていて。

……それでも足りないもの、　タリナイモノ、

それハ、何ダ？

「ああ」

初体験の過度な快感に焼け切れかけた脳髄は、

その答えが閃きかけた寸前で機能を一時停止した。

## 三　密着！　紅い仔竜と熱い夜

「あんな風には言ってたけれど、バルズさんの悩みは解決した様子じゃなかった、よね……」
　バルズの話を聞いた後のオレたちは、かれが立ち去った後になってもかれのことが気掛かりで、なにか手伝えることはないだろうかと話し合っていた。
「せっかく知り合いになれたんだし、チカラになりたいもんな。性欲……性欲の暴走、か」
「一度、限界までヤってぱーっと発散できれば、気持ちもスッキリするかも？」
　どことなくうずうずした声のムルトが、腕を広げながらそう語る。確かに一理あるかもしれない。
「……というかそれ、ムルトがヤりたいこと、じゃないのか？」
「てへ」
　ムルトはそう言って舌を覗(のぞ)かせるが、すぐに困り顔に戻って、うーん、と唸る。
「でも、溜まるたびに発散するってだけじゃ、今と同じことだろうし、キリがないよね……。なにか、根本的な解決策があれば良いけど」
　しばらくそんな風にふたりで喋っていたら、ばたばたと慌ただしい足音が近付いてきた。その響きからすると、体重が軽く歩幅も短い、子供が走っているようだ。
　そうして入口にひょっこりと顔を出したのは、案の定、オレたちのスリットにも届かない背丈の仔竜だった。

「——お、ここにいたか！」

　燃え盛る猛火よりも、秋空に沈む夕陽よりも、なお鮮やかな真紅の体色。鼻筋にだけうっすらと蒼い模様が走っている。

その少年はまっすぐムルトのもとへ走り寄り、
「探したんだぞオ……って、ん？　おおっと、ヒト違いだ」
　すぐに自分の勘違いに気付いてぺこりと軽く頭を下げると、やにわに満面の笑みを浮かべる。人懐っこい、というよりむしろ、馴れ馴れしいとでも形容すべきだろうか。
「いやア、あまりにもデカいカラダだったから、うちのヤツと間違えちまってね。色合いも似てたもんで、ついうっかり」
　ハハハ、と妙に軽い笑い声を立てて、仔竜は言葉を続ける。
「それでさ、せっかくだしちょいと聞きたいんだがねエ、おにイさんたち。アンタらみたいにでっかい、金ピカの竜を見なかったかい？」
　やけに偉そうな口調にはちょっと引っ掛かるところもあったけど、誰のことを言ってるのかは明白だった。

「ああ、それならついさっき、ここを出て行ったところだ。バルズと名乗っていたよ」
「そうそうそいつ！　なアんだ、入れ違いか」
「うん、オンセンの中で一緒になったんだよ。オイラたちに話を聞いてもらいたいから、って飲み物も奢ってもらっちゃった」
　ムルトは、まだ手に持っていた瓶をふりふりと見せてそう答える。そう言えばあの味、よく知ってる味だったな。あれはたぶん――
「話……そうかア。アンタらにも迷惑掛けちまったみたいだな」
　先程までの軽々しい口調は嘘のように鳴りを潜め、仔竜は面目なさげに頭を下げる。一瞬、なにかを考えるような素振りを見せて、すぐに頭（かぶり）を振り、かれはオレたちに背を向けた。
「邪魔して悪かった。アイツの話に付き合ってくれてありがとな。せっかくの温泉なんだし、ゆっくりして行きなよ。さアてと……アイツは部屋にでも戻ってるかな――」

「――あっ、ねえ、ちょっと待って」

早々に立ち去りかけた紅い仔竜を、ムルトが呼び止める。

「オイラたち、さっきバルズさんの話を聞いてから、どうしても気になっちゃって。悩み事があるならチカラになりたいんだ。それでさ……えっと、キミの名前は？」

「……アルバ。呼び捨てで良い」

「良い響きだね！　おせっかいかもだけれど、キミの話も聞きたいんだ。キミと、バルズさんのことを。ねえ、いいかな、アルバ？」

屈み込んで視線を合わせようとするムルトを奇異なものを見る目でしげしげと見返しながら、アルバと名乗った仔竜は小さく頷く。

「アイツのこと、か。言っとくけど、こっちもそこまで詳しいって訳でもねえぞ。付き合いもそんなに長くはねえし。……ただ、まア。それでも気付くことはあらアな」

どことなく自嘲的な笑みを浮かべて、かれはオレたちふたりを順々に見る。

「教えて欲しい。アイツを見て、どう思った？　アイツの筋肉はただのウソっぱちに見えたか？　薄っぺらいコケ威(おど)しの、お飾りに見えたか？　……違うよな」

アルバの言葉に籠(こ)もる、上手く言い表せない感情の重みに押されがちになりつつ、ムルトとオレはそれぞれ口を開く。

「うん、バルズさんにも言ったけど、あれだけの筋肉はおいそれと身に付くモノじゃあないし、あれは、ホンモノだと思うよ」

「オレもムルトに同意だ。バルズの身のこなしはすごく馴染んでいて、あのデカいカラダをどう扱えば良いか、ちゃんと分かってたから」

そう言いながら、オレはふと頭に浮かんできた言葉を舌に載せた。

「……そういや、カラダの色がいつから金色になったのか、結局聞きそびれてたな」

「ん？　あア、バルズのやつ、そこまでは話してなかったのか。アイツも割と取っ替え引っ替え色んな種類の竜になったりしてたからなア」
「い、色んな種類……？」
「おうとも。この温泉にゃアそういうチカラがあるらしくてな。特に自分の行くべき道なんかを見失った手合いにとっちゃ覿面に効くんだと。その点、アンタらにゃ無縁だろうけどなア」

アルバの語った所によると、この温泉がもつ不思議な効能の影響で、バルズは事あるごとに姿を変えるようになったのだと言う。
　最初は話に聞いた通り青緑色の細身な竜人、それからアルバと同じような仔竜の姿になって、その後は何日も、ひょっとすると何ヶ月もの間アルバに這い寄られては犯し犯され、汁塗れでぐちゃぐちゃになったカラダを温泉で洗い流す日々が続いたらしい。

「そんで、ぶくぶくに肥え太った肉塊みてエなカラダのときもあったし、昔話に出てきそうな細長いヤツで、ヒゲなんか靡かせちゃってさ、そんなのになってたこともあったなア。……で、いつだったか、転機が訪れた」
　ある日、温泉に貼られていた一枚の貼り紙を見たかれは、すぐに施設内のジムに通い始め、筋肉を鍛え始めたのだという。
　その紙は、ボディビル大会の開催を知らせ、参加者を募集するポスターだった。
「それからはもう、あれよあれよさ。ちょいと見ないうちに、目を疑うほどデカくムキムキになってな。デブのときにゃア黄土色になってたカラダも、キンキラに輝き始めたってわけ」
　思い出を語る仔竜の口調は嘘偽りなく楽しげだったが、かれはそこで一旦話を中断させると、小さくため息を吐いた。

「しまいにゃその大会で優勝までしちまって。……なア、アイツはさ、凄いんだぜ。たしかな才能があって、そいつを開花させる努力も怠ることはない。それがさ――」

伏し目がちにぼそりと溢す。

「――正直、見てると辛くなっちまう」

言ってしまった後ではっと口を押さえると、アルバはシッポを何度かくねらせ、自分の腿にぺちりと当てた。気恥ずかしさの現れだろうか。

「あー……その、なんだ。アイツは望んで竜になったわけじゃねえし、その原因はって言やアこっちが張本人みたいなモンで、そんな甘えたコトを言える立場じゃねえやな」

言いたいことが上手く言葉にならないのか、かれは首を振って宙を眺め、しばらくしてから観念したかのように言葉を続けた。

「今でも、温泉に来て仔竜になった、この選択自体は間違いじゃなかったと思ってる。そしてアイツにとっても、ここへ来たのは最良の選択だったんだ、って。でもそれがアイツを苦しめ悩ませてることもまた紛れもない事実だ。そこからは絶対に逃げられない。……どうすりゃ、良いんだろうなア」

心に感じているであろう重みとともに言葉を絞り出すその姿は、子供らしい見た目にそぐわず、オレよりもずっと年上に見える。

……実際、その通りなのだろう。オレが昔、人間の世界で学ばなかったこと、経験しなかったこと、想像さえしなかったこと、色んな辛さや苦しみを、かれやバルズは潜り抜けてきた。

それは――オレにはできなかったこと、だ。

「バルズさんはホンモノだ、ってさっき言ってたよね。じゃあ、キミは？　アルバはなんなのさ」

そのとき、ムルトがそう言って水を向けた。訊ねられたアルバは、さっきとはまた違う笑みを浮かべる。

「まア、見ての通り。ただの、えっちなことがちょーっと好きなだけの、キュートなお子様ドラゴンだよ」

「えっち、そう、それだよ！」

仔竜の小さな紅い手を握らんばかりの勢いで、ムルトはそう言う。

「考えてたんだけど、ふたりの悩みを解決するなら、なによりもまず悩みそのものと向き合わないといけないよね。バルズさんの場合だと、それは急激にでっかくなったカラダと、性欲、それから……キミ、だよね」

ムルトの言葉に、アルバは少し当惑した顔を向ける。

「詫びりゃア済む話だってか？　いや、そんなんじゃ――」

「うん、そうじゃない。……なんていうかな。バルズさんに伝えてあげてほしいんだ。キミの〝スキ〟を、たっぷりと。えっちなことで伝えられることもある。たぶん、いまのバルズさんには、まずはそれが必要なんだと思う」

それを聞いた仔竜は、ふと目を和らげた。

「〝スキ〟、ねえ……。さて、どうしたもんか。――アイツに、この気持ちが伝わるかな」

「へへ、だからさ、試してみようよ！　オイラたちにも、そのためのお手伝いをさせて欲しいな。ねっ、アニキ？」

オレは頷く。できなかったことを悔やんでも、もはや仕方ない。それなら、これからのことを考えた方が良いだろう。オレもそうありたくて、どんと胸を叩いた。

「もし良ければ、ふたりのために何ができるか、オレたちにも一緒に考えさせて欲しい。巨竜のチカラが役に立つなら、喜んで使うよ」

＊＊＊

ずらりと並ぶ客室の、最奥。体格のことさら大きな客用に、部屋の広さにも天井の高さにもたっぷりと余裕を持たせた続き部屋（スイートルーム）が、向かい合わせに配置されている。アルバに案内されてここまで来たのは良いが、

「ありゃ……まさかこんな近くだったなんて」

なんのことはない、オレとムルトが滞在している客室の真向かいに、バルズとアルバの部屋があるのだった。

アイツはたぶん先に帰ってるだろう、という仔竜の言葉に従って、かれの後ろから室内へと入る。すると案の定、そこには見覚えのある巨体があった。

「おい、バルズ。戻ったぞ――おッ、悪りイ、取り込み中だったかア！」

こちらに背を向ける形で座り込み、酷く息を荒げていた金色の竜人が、ゆっくりと振り返る。目に湛えられた光はただ事ではない色をしていたが、そんなことより、股間のスリットから天を衝（つ）かんと聳（そび）え立つ肉棒が、かれの置かれた状況を雄弁に物語っていた。

「はあ、はあ……ちんぽ……ぐるるッ！」

「なんだア、今日はもう淫乱モードになってるのか、やけに早いな？　ははっ、ひょっとしてアンタらにあてられたのかもな！」

尋常ではない唸り声を上げる怪物を目の前にしても、仔竜の態度はまったく変わらない。

こちらをチラッと見て、やれやれとばかりに肩を竦（すく）める真似をし、何でもなさげに口を開く。

「ま、よくある事なんだよ。ああなっちまうと一発ヌくまで落ち着かないのさ。処理するからちィっと待って――」

「――あー、さっきあんなこと言ったあとで、出しゃばるのもアレだけど」
アルバの言葉を遮る形になってしまったが、オレは待ちきれずに声を上げた。……こっちはこっちで、バルズのちんぽを見た瞬間から、股間がぐちゃぐちゃに疼いて堪らないのだ。
「まずは、オレが相手をさせてもらっても……良いかな？」
オレの申し出に、仔竜は少しの間大きな目を丸くしていたが、すぐに悪戯っぽい表情を浮かべた。
「なんとなんと。そりゃア願ってもない話だ！アンタとバルズ、巨漢どうしの熱い交わり……ああ、滾るなア、漲ってくるな！」
「えーっずるい、オイラも混ぜてよ、アニキ！」
そう言ってムルトがオレの腕にじゃれついて来るので、オレはにやっと牙を見せて笑う。
「そうだな、それじゃ、一緒にバルズをイかせまくろうか」

「やったーッ!!」
低い唸り声を立て続けているバルズの口吻を覆うように、オレは自分の舌を埋める。
「ぐる、んむ、るる……」
「ん、っふ、はむ……」
深い青紫色のオレの顔と、純金の輝きをもつバルズの顔と、二頭の竜はそんな風にしばらく口付けを交わした。
「……ふう。挨拶の基本はキスだって、ムルト、いつか言ってたよな」
口の周りについた唾液の名残を舐め取りながら、バルズの巨体を挟んで向かいに陣取った相棒に、オレは笑いかける。
「そうそう、だから、こっちもちゃんとキスしないとね！」
上気した表情のムルトは、オレと位置を交代してバルズの正面に回り込み、自分の割れ目に指を挿れると、ずるりと中身を引っ張り出す。

そして、見る見るうちに巨大化させた肉棒を抱えながら、それに匹敵する大きさで屹立する、恐ろしげな逸物へと近付けていくのだった。

「へへ……はじめまして、今後ともよろしく！」

ケタ外れの質量を誇る竜根の先端がお互いに触れ合うや否や、どぷっという音が響くほどの勢いで先走りの洪水が溢れ出した。

それを見ながら、オレはバルズの耳元で囁く。

「さっきは、話を聞かせてくれてありがとう。チカラになりたいけど、オレたち、まだバルズのことは何も知らないだろ。だから、たくさん教えて欲しいんだ」

「ぐる……俺の、こと……？」

「そう。何が好きか、どこが気持ちいいのか、どんな風に触られると感じるのか」

オレは、均整の取れたかれの背筋を、上から下まで舌でなぞる。

「この筋肉がどんな風に動いて、どれくらいの快楽を伝えてくれるのか。バルズ自身も、まだ全部は知らないだろう？」

舌から伝わる汗と雄の香り。力強く、それでいて繊細な味わいだ。それはそのままバルズの生命の味として、オレの魂と共鳴しあう。

「巨竜はね、お互いの命と魂を注いで、世界に恵みを巡らせることができるんだよ。それが、オイラたちの大事な仕事なのさ」

ムルトは汁に塗(まみ)れてつやつやと輝く笑顔で、誇らしげに鼻を鳴らす。

「ちんぽが欲しいなら、好きなだけ味わってね。オイラの精液も、いくらでも注いであげるよ。だからオイラにも、バルズの抱えてるモノ全部、ブチ込んで欲しい！」

そう言いつつ、かれは自分とバルズ、二柱の巨根を代わる代わる口に含む。幸せそうに頬張(ほおば)るその口から、牙を伝って透明な液体が滴(したた)り落ちるのが見えた。

「何事もやってみるのが大事、って言うしな。オレたち巨竜なりのヤりかたで、そのカラダに刻み込むよ。……まず、バルズにはオレの尻(ナカ)に挿れてもらおうか」

「う、うう……挿れる……挿れるッ!!」

はあはあと息を乱し、わずかに残った理性の欠片(かけら)さえも蒸発したかのように、バルズの瞳は危険な光を宿し、その股間のバケモノはさらに大きさを増す。——これは、ひょっとすると、ムルトのモノより大きいかもしれない。

それはつまり、オレが今までに味わってきた中でもいちばん大きい、ということだ。

「へへへ、美味そうだ……なあムルト、バルズを後ろから支えられるか?」

オレは再びバルズの前へと移動し、代わりにムルトがかれの背後へ回る。

「おっけーアニキ、任せて! こういうときはやっぱり、みんなで繋がり合わないとね!!」

そしてすでに臨戦態勢になっている巨砲を、バルズの引き締まった尻の中心めがけ、一気に突き上げた。

「いっくよー……ふんッ!」

全身の筋肉と、もちろんその股間にも渾身のチカラを籠(こ)めて、ムルトはバルズを持ち上げる。

「んあッ、ガア……ッ! おおォォオオ!!」

二頭分の勢いと熱を載せたバルズの竜根が、ご馳走(ちそう)を待って開け拡げられたオレの穴を穿(うが)つ。

「ぐ、おおッ! い、イイぞ、ああアッ!」

身を焦がすほどの熱と暴力的なまでの質量が、地響きを立ててオレを貫き続ける。熟(う)れきったオレの尻を、バルズは暴れ狂う猛獣のように、ただただ貪り、食い散らし、掻き乱していく!



バルズが力任せに腰を打ち付けてくるたびに、脳みそを直接揺さぶり、びりびりと痺れさせる稲妻のような快楽が、オレの魂を襲う。

「アッ、アニキぃ、どう!? オイラもそろそろ、イっちゃう、かもッ!!」

激しく動くバルズの巨体を支えながら、その尻穴に深く自分の巨根を沈めているムルトは、徐々に余裕を失いつつある声で言う。

けれどもその表情はいつも通り、オレが好きな可愛い笑顔だ。それを見ていると更に胸の奥が熱くなって、カラダじゅうの快感が増していく。

「オレもだッ、いつでもイけるぞ……!!」

「バルズさんも、一緒に——」

「ガアッ、イ、イク、イグッ!!!」

割れんばかりの絶叫とともに、繋がり合ったオレたちを同じ思いが貫く。

——出したい、出したイ、射精シタイ！

小さなうねりから始まったその波は、やがて燃えたぎる怒濤となって全てを呑み込んだ。

黄金に輝くカラダの奥底にずっと溜め込まれていたバルズの精が、堰を切ったようにとめどなく湧き出し、泡立ち、迸っていく。

その白い奔流はとうとうオレの尻の中に入りきらなくなって、ごぽごぽと音を立てながら漏れ始めていたが、それでもバルズの射精は止まらない。

馬鹿げた量の精液を吐き出すたびに、快楽に震えるその巨体は、さらに一回り嵩を増す。

「アニキィ……はぁっ、はァッ！ スゴいよ、どんどん、デカくなってる！ カラダもちんぽも、全部……ッ!!」

「あぁッ……！ オレも、いま、バルズを感じている……!!」

恍惚としたムルトの喘ぎ声が、オレの五感とリンクする。そこにバルズも巻き込んで、いま三頭は狂瀾の余韻のなか、ひとつになっていた。

（ここに、足りないモノがあるとすれば――）

「〰〰ッ、あーっちくしょォ!!」

まさにそのとき、それまでは一歩離れた場所にいたはずのアルバが、精液塗(まみ)れになって絡まり合うオレたちの近くへずかずかと寄って来た。

しばらくの間、何か言いたげに口をもごもごさせていたが、

「……バルズ」

さっきとは比べ物にならないほど小さな声で、やっとのことでそう言った。

「今日は、許す。いや、その、違う。そうじゃなくて――」

普段から真っ赤なその顔が、傍(はた)から見ても明らかなほど、更に濃い色に染まる。その目は蕩(とろ)けるように潤(うる)み、

「……挿れて、ほしい。オマエの……本気を、ココに」

ただたどしい言葉とともに、かれはバルズの目の前で、ちいさなその尻を精一杯に拡げて見せた。

オレの中でバルズの逸物が更に硬さを増したかと思うと、思ったよりも呆気(あっけ)なく、すぽんと尻の穴から抜けてしまった。そのままバルズはオレとムルトから離れ、仔竜の方へ向き直る。

「イイ、のカ……俺ガこの、カラダになっテ、からハ……初めて、だロ？」

それは、驚くほどに優しい声音だった。

激しい交わりの名残で、今も全身から湯気を立てている黄金(こがね)の竜に、仔竜はいそいそとよじ登り、その紅(あか)い顔を筋肉の凹凸(おうとつ)に埋(うず)めて隠す。

「だから、だ。今までこっちの都合で散々振り回してきたのに、一言だって謝ってなかったし、責任も取ろうとしてなかった。だから、そう、……そろそろオマエと、向き合わなきゃなア」

諦めとも、安堵ともつかないため息を吐いて、仔竜もまた、いつもより優しい笑みを浮かべる。

「オマエに、伝えるよ。たくさんの気持ちを。たくさんの――〝スキ〟を」

＊＊＊

それから。傾きかけていた日が落ちて、夜の帳が辺りを覆い、再び朝日が昇るまで。

オレたちは溜まりに溜まったバルズの性欲を受け止め、飲み干し、ついでにオレたちの快楽も分け合って、祝い酒のように降り注がせあった精液で全身を覆われながら、満足してぶっ倒れていた。

「……っ、ふう、なんだか……」

夢見るようなバルズの声が聞こえる。

「こんなにスッキリと、やりきった気持ちになるのは、生まれて初めて……です」

「そりゃこれだけ出したんだもん、ね！」

顔の周りにべったりと付着した、誰のものとも分からないクリームを舐めて綺麗にしながら、いかにも上機嫌にムルトが茶化す。

「ああ、それに、嬉しいんです。ずっと燻っていた自分自身の性欲に、やっと目を向けられたような気がして」

肉厚な自分の拳と、股間から飛び出したままの巨根とを思わしげな瞳で見遣りながら、かれはぽつぽつと言葉を紡ぎ始めた。

「……結局、俺は、昔の価値観を捨てきれずにいるんだと思います。前の世界はクソだったけど、未練が全然ない訳じゃないし、それだとやっぱり俺は異常なんじゃないかと思う気持ちを、拭い去れなくて……」

かれの話を興味深そうに聞きつつ、ムルトとアルバはこっそりと囁きを交わす。

「アニキたちの世界のヒトって、性欲があまりなかったりするのかな？　アニキを見てても、よく分かんないんだよね」
「いやア、あるヤツにはあるんじゃねえの？　おおっぴらにする類のモンでもねえし、巨竜には到底敵うワケねえけどな」
「そっかあ、ふうん……」
　二人の囁きを耳に挟みつつ、オレはバルズの肩を抱き寄せ、思いを伝える。
「バルズの感じてることは異常なんかじゃない。むしろ、大切なモノだと思う。オレ自身は……そういうことを学ぶ前に竜になっちゃったからさ。分からないことだらけなんだ。でも、だから、分かりたいと思ってる」
　バルズの金色の顔と、ルビーのように赤い目を覗き込んで、言葉にチカラを籠める。
「もう一度、バルズの話を聞かせてくれないか。今度はアルバも一緒に。悩みも心のもやもやも、精と一緒にブッ放せるように」
　しばらくの沈黙。やがて、かれは口を開く。
「そう、だな……竜になったこと自体は、幸せだったと思っています。ボディビルを始めて、こんなスゴい肉体になれたのも素直に嬉しいし、今は……誇りになっています」
　自分の肉体を確かめるように手で触れながら、かれはすこし顔を赤らめる。しかし、その目はすぐ、ため息とともに下を向いてしまう。
「でもそれは、俺自身というより、俺じゃない自分――バルズという名前の、生まれながらに完璧な竜のおかげでしかないんじゃないか、って思うようになったんです」
「……そっか、バルズもアルバも、ここへ来る前の名前とか、生活とかがあったんだよな」
　オレがそう呟けば、バルズは小さく頷く。
「ええ、それで俺は、竜としてのあり方に――バルズに、少しでも近付きたいと思いました。なのにどうしても、何かが足りなくて。焦れば焦るほど、欲求不満が溜まっていって」

「そいつが性欲に変わっていった挙句の果てが、〝淫乱モード〟の正体だった、てエ訳か」

アルバの声には既にいつもの軽薄さが戻っていたが、その眼差しは依然として真剣そのものだった。かれの言葉を身振りで肯定しながら、バルズは恥ずかしそうに、消え入りそうな声で、言葉を続ける。

「こんな調子じゃ、いつまで経ってもホンモノのバルズには……皆さんみたいに立派な巨竜には、なれない。俺は、――俺は。どうすればいいんだろう。せめて、このどうしようもない性欲だけでも――」

「大丈夫。そのカラダとの付き合い方だったら、オレも一緒に考えられると思う。巨竜の名に誓って、保証するよ」

「オイラたちも今まさに、巨竜としての歩みを学んでいる所だし、ね！」

オレとムルトは頷き合って、黄金と真紅、対照的な体格のふたりに笑いかける。

「ねえ、その話をするためにもさ、ボディビル大会のとき、バルズさんがどんなことをしてたのか、教えてよ。大会で優勝したんだよね？アルバから見てどんな感じだったのかも、知りたいな。……ふたりのお話、聞かせて！」

両目をキラキラと輝かせるムルトの質問に、バルズとアルバは顔を見合わせ、どちらからともなく苦笑を浮かべてオレたちに向き直った。

「ありゃア――確か女将(おかみ)さんと久々に会った日だったっけか」

「ちょうど、大会のポスターを張り出しているところだったんですよね」

――そんな風にしてふたりは、ものがたりの続きを語り始めた。

# 四　燦然(さんぜん)！　黄金のボディビル大会

いま思えば、俺はいつでも受け身だった。

自分でも分かっている。……長いものには巻かれる。流れには逆らわない。現状に文句を言うことはあっても、変えようなどとは思わない。思い付きすらしない。

そんな俺だから、この胡乱(うろん)な温泉に来て竜に変身するだなんて明らかに異常な事態でさえも、受け容れてしまった。慣れれば良いさと思ってしまった。

だって、そうじゃないか？　ほんの数日前まで同じ会社で机を並べて、死んだ魚みたいな目をしていた先輩が、脳みそのネジが吹っ飛んだかのようなセクハラ発言ばかりする小動物になって、自分に迫ってくるなんて。

狂気の沙汰だ。でも俺はそれに呑み込まれた。

狂気だと理解し、恐怖し、嫌悪する心を捨てる間もなく、快楽が、肉欲が、渇仰(かつごう)が、竜としての俺を整えてしまった。

そして、いくら姿が変わろうと――先輩と同じ仔竜の姿になっても、外面だけは泰然自若(たいぜんじじゃく)とした老龍の姿になっても、俺の抱える恐怖は消えてなくなりなどしなかった。

俺はただなにかを求めていた。初めてアルバに襲われたとき、脳裏に一瞬だけ閃いた衝動を。大きく、重く、強く、でもそれだけではない、もっと根源的で、美しい、なにか。

「俺は、う、もっと、こんなんじゃ、ない……はず、なんだ。こんな、肉塊じゃ、なくて……」

アルバに奨(すす)められるまま、何やら怪しい酒をがぶがぶと呑まされて、目も当てられないほどの肥満体になったとき、確かそんなことを口走っていた、と思う。

自分の喉から出る声すら、肉と脂でギトギトになった野太い濁声で、初めて竜になった際には若葉のように瑞々しい緑だったはずのウロコも泥土と見紛う茶褐色に染まり、目線を下げれば何重にもだぶつく腹が嫌でも目に入る。

それが何故か性欲を掻き立てるのは確かだ。言いようもなくムラムラする。でも。

「でも、違うんだ、うう……違う……」

「そうか、オマエがそう言うならそうなんだろ。じゃなきゃ気持ち良すぎてぶっ飛ぶハズだしな」

小山のように膨らんだ俺の腹肉を、無邪気な顔でぺちぺちと触りつつ、事もなげにアルバが告げる。

「オマエの望む姿ってのはどんなだろうなア？　へへ、存外ディープなとこまでハマり込んで行きそうだ」

「望み、なんて……元の、カラダに――」

「覚えてるのか？　元がどうだったか」

「え」

思わず自分の手を見る。丸々とした怪物の手だ。ここに来る以前に見慣れてきたものとは違う、それは分かる――なのに、ずっと見てきたはずの俺の手を、どうしても思い出せない。

「な、なんで……酒？　この酒の、せいか？　実際、くらくら……している。酔ってる、なら、仕方がない、でも――」

「――でもそれじゃァ納得しきれねえ、よな」

いつの間にか俺の腹によじ登っていた仔竜が言った。

「よッし。こうしようか。これからこの旅館を歩き回る。それでオマエの望みが見つかれば良し、ダメだったら、そオだな、あと数ヶ月くらい、変身を続けてりゃ分かるさ」

いかにも名案が思い付いたとでも言いたげな笑顔を浮かべてそう宣ったアルバに対し、俺は返す言葉もなかった。

「難しいこたア考えなくたっていいぜ。なんせここは温泉宿、ゆっくりカラダを休めて、元気を養って、面倒臭（くせ）えことはぜーんぶ、そのあとにやっちまえばいい。な？」
「……」
「まアたそんな顔する。ったく仕方ねえなア、心配しなくても手伝ってやるからさ」
「……なにが、目的、で……」
　その問いかけに、アルバはふっと真顔に戻る。やがて、口角だけを少し上げ、俺の目をじっと見つめてから口を開いた。
「目的？　いま、このときを楽しむことさ……強いて言やアな。あとはまア、せっかくだし？オマエにもできるだけ楽しんでほしい。だから、そのためにやれることなら、なんでもやりたい」
　ぽんと飛び跳ねて腹から降りると、そのまますたすたと部屋の入口へ向かい、振り向く。
「ほら、立った立った。お楽しみはこれから、ってな」

＊＊＊

　どすん、どすん。
　丸々と太ってしまったカラダをなんとかして動かすたびに重い音が鳴る。木の床は軋（きし）んだ音こそ立てるものの、どうやら壊れる気配はない。
　アルバは俺の肩に乗って、たわいないことを喋り続けている。――ほら、アレなんてどうだ。おっ、あそこにいるヤツ、カワイイんじゃね？――アルバの小さな体躯（たいく）は見た目通り軽いのに、甲高いその声が聞こえるたびに、少しずつ俺の足取りは重く、遅くなってしまう。
　とはいえ、現状を変えたいのは俺だって同じだ。少なくともこんなに動きにくい肥満体とは早く縁を切りたい。
「あら、こんにちは」
　そのとき、聞き覚えのある女性の声がした。

いまの自分とは比べ物にならないほど小さく、細身のシルエット……ああ、そうだ。泥沼の底から記憶が浮かぶ。俺をこの旅館へと導いた、〝女将〟さんだ。
「ここのところお目もじも叶わず、大変ご無礼いたしております。当館でのご滞在はお楽しみいただけておりますでしょうか？」
変わり果てた俺の姿を見てもさほど驚いた様子はなく、俺が俺だと当然のように認識している。そんな異常さを論う暇もあらばこそ、肩に乗った仔竜がしゃしゃり出て口を挟む。
「それがさア、コイツときたらお悩みモードらしくてね。なんか良さげな演し物でもありゃア良いんだが」
「そう言えばアルバ様にも、ご無沙汰でしたね。演し物……とは少し趣向が違いますが、例えばあちらの――」
俺の肩越しに交わされる会話を、しかし俺は聞いていなかった。

ちょうどその場に張り出されていた、一枚のポスターに目を奪われていたからだ。
筋骨隆々たる竜人のシルエットを背景にして、金色の文字が踊る――

『温泉ボディビル大会、出場者大募集中！』

「おい、カズヒト。それに興味があんのか？」
にやにやと、仔竜が訊ねる。
「なるほどなるほど、筋肉ときたか。でも安心して良いぜ。そりゃア、太るのが嫌になる訳だよな。そりゃア、竜のカラダになった以上、オマエはいくらでも好きな体型になれるからな」
そう言って女将さんの方へ振り向き、
「ここいらにゃトレーニング施設もあったよな」
そう訊ねたアルバに、彼女は笑顔で頷く。
「ええ、もちろんです。筋肉疲労に効能のある温泉も近くにございますので、是非ともご利用くださいませ」

「だってさ。で、どうする？　ボディビル……やってみるか？」

　問われるまでもなかった。壊れかけた心のどこか片隅で、これ以上カラダが変になるのはごめんだと、か細い悲鳴が聞こえた気もしたが、そんなものを気に留める余地は、もはや俺には残っていなかった。

　竜人の色に染まりきった俺の肉体と精神が、俺という存在の全てが、耳を劈(つんざ)くばかりの声で絶叫し続けていたからだ。

——筋肉！　筋肉を!!　俺に筋肉を!!!

「筋肉……筋肉を、付けなきゃ」

　譫言(うわごと)のように漏れ出た俺の心の叫びを耳聡(みみざと)く聞きつけ、仔竜は大きな笑みを浮かべた。

「決まり。そんじゃァお姉さん、てなワケでコイツもその大会に出場するから、手続きとか頼むぜ。何か必要なモノはあるかい？」

「そうですね、さしあたって……ご出場いただくお客様のお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

　まともな受け答えがまだできない俺に代わり、我が事かのようにてきぱきと話を進めていたアルバは、それを聞いてふと言葉を止める。

「カズ——いや、ちょっとタンマ。うん、よし、せっかくだしな。オマエにも竜っぽい名前をつけよう。なア、良いだろ？」

　断ろうとした、はずだった。俺にはちゃんとした名前があると。でも、口から漏れ出たのは違う言葉だった。

「いちばんに……いちばん、大きくなりたい」

「一番か、いいねエ。最高、頂点、ふむふむ」

　ひとしきり考えを巡らせると、アルバは俺の肩からひょいっと首筋の後ろに回り、小さな紅い両手で俺のツノを掴(つか)んで、耳元へと囁きかけるように俺に告げた。

「バルズ。……ってのはどうだ？　最高峰（アルボルズ）って言葉をちょいと弄ったんだが」

　異議を差し挟むこともできないまま、俺の頭が勝手に頷く。

「よし、バルズ。それがオマエの名前だ。さあ、魂に刻み込め。オマエは今日からバルズとして生きるんだ……いいな？」

「俺は、バルズ」

　暗示めいた仔竜の言葉を口に出して復唱した瞬間。竜である俺が、バルズという名の竜が、微睡（まどろ）みから醒めた。

「ああ。良い気持ちだ。ありがとう、アルバ」

　俺はそんなことを言おうなどとは思っていなかった。しかしバルズは、いままでずっと俺のなかにいた竜は、ひび割れた心の卵殻をついに破って、産声（おたけび）を響かせたのだ。

「出場者の名前はバルズだ。よろしく頼むよ、女将さん」

＊＊＊

〝ゼッケン番号一一一番！　バルズ選手!!〟

　スポットライトが、俺のカラダを舐め上げるように照らし出す。全身から吹き出した汗と、丹念に塗り込んだオイルの下で、俺の腕が、胸が、腹筋と大腿筋が、艶（つや）やかに輝く。

　俺は太いシッポの先までも誇らしげに掲（かか）げ、鍛えに鍛えた筋肉をいちばん美味しく見せる角度を意識する。観客の視線を、ただ俺の巨体にのみ集めるように。興奮と驚嘆と、それからもちろん、絡み付く性欲の眼差しを。

　そんな風に視られることが心地良い。熱狂を掻き立てるBGMを背負って、俺は決められた順序通り、ポーズを取る。その度に沸き起こる、声援や歓声や多種多様な掛け声。

　ああ、もっと見てほしい。純金の鱗（うろこ）を纏（まと）ってうねる筋肉こそ、俺の最大の武器だ。

〝まさしく、最高峰の名にふさわしい勇姿！　竜という種族の魅力を最大限にまで引き出す、芸術的な肉体美です!!〟

「いいぞ、バルズ！」「キレてるキレてる!!」

（――あれ、俺はいつの間にこんなところまで来たんだっけ。いま、何をしてるんだ？）

どこまでも自信たっぷりに、会場を沸かせることだけに注力しているバルズの内側で、俺はどこか夢でも見ているような、ぼんやりとした気持ちでその状況を眺めている。

そしてバルズの顔と肉体は、脳内で混乱する俺のことなど微塵（みじん）も表に出すことはしないで、熱狂する観客席に全身で向き合っているようだ。

そうだ、バルズと名付けられた竜が目醒めたときから、俺は次第に俺だった記憶を意識しなくなっていった。チカラ無い過去の存在なんて、筋肉のためには不要だったのだから。

バルズは程よく自信家で、トレーニングにはところんストイックに、食欲と性欲についてはどこまでも貪欲に、大会までの限られた時間で自分を極限まで磨き込むことに余念がなかった。

土色の脂肪は日を追うごとに溶け去り、それと入れ替わりに全身の筋肉がむくむくと増量し、膨らんで、己の存在を声高に主張しはじめる。

一体どれほど重いのか見当も付かないようなバーベルを持ち上げて戻すたびに全身が軋み、ぼこぼこという異音まで立てながら、目の前で筋肉が一回りデカくなる。……そんな調子で、あまりにも現実離れした肉体には畏怖を覚えるとともに、いっそ滑稽ですらあった。

トレーニング後には決まって温泉に入った。湯上がりのカラダを姿見に映すたび、見たこともない巨躯（きょく）が俺の視界を覆う。湯気を立てて、ぬらぬらと照り輝く黄金（こがね）の鱗。圧倒的な筋肉量（バルク）。塵（ちり）ほどの脂肪も残さず、筋繊維の細かな凹凸（おうとつ）までくっきりと分かる、精密機械のごとき均整（プロポーション）。

そこには、至上の筋肉美に不要なモノなど、何一つない。全てが完璧なボディビルダー。

……だが、それなら。この惰弱な俺の心は、どうしてすぐに消えてしまわなかったのだろう。ちっぽけな人間風情の記憶が、今でもこうして残っているのは、何故なのか。

俺が脳内で悶々と自問している間にも、大会はつつがなく進行していた。出場選手が出揃い、明々と照らされたステージにずらりと並ぶ。

竜人ばかりかと思えば他の動物らしい顔つきの獣人っぽい選手たちもいるし、見たことがない（それに当然のごとく素晴らしい体格の）生き物も見受けられる。

出場者は一定の尺度によって組み分けされ、その階級ごとに入賞者を選定するという流れのようだ。アルバより少し大きめ程度のクラスもあれば、一般の竜人サイズの階級もあるらしい。

そして俺は、他の階級よりも二回り以上は大きな集団で、犇めく巨漢どもの誰にも見劣りしないよう、満員の観衆に向かって堂々と胸を張っていた。

「××番ーッ！」「最高！」「〰〰ッ!!」

飛び交う歓声、興奮に満ちた声援、その熱気が俺たちのカラダをさらに火照らせる。審査員が何人かを指名すると、呼ばれた選手たちが前に出て、指示されたポーズを取っていく。

色とりどりの筋肉が、掛け声に合わせて張り詰め、盛り上がり、躍動する。息を呑むほどに厳粛なのにどこか剽軽で、淫猥なはずの肉体が、なぜかとても神聖に思える。——

（淫猥？　神聖？　俺は何を考えているんだ？）

周りに見えるのは、どれもこれも馬鹿みたいに重量級の筋肉ばかり。しかしそれを思うたび、思考におかしな靄が掛かる。

いや、認めよう。

それは明らかに性欲だった。俺は性的に興奮していた。筋肉を見れば見るほど、その凹凸に触れることを想像しただけで、股間の割れ目（スリット）が──その中に潜む俺の分身が湿っぽい熱を帯び、頭を擡（もた）げ始めるのが分かる。

（でも、俺にそんな気は、なかった……はずだ。一体いつから？　いつの間に？）

「いいぞオ、バルズ！　いいとこ見せろーッ！」

観客席から、一際（ひときわ）目立つ甲高い声が聞こえる。間違いなくアルバの声だろう。

……アルバとの関係、あれはただの〝処理〟だ。どうしようもない性欲を解消するため、義務的にやっていたこと。それ以上の意味なんてない。

それが、俺の魂さえ造り替えてしまったというのか？　それとも俺は、もともとそうなる素質があったということなのだろうか？

心のなかで問い掛ければ、それに答えるかのように、俺がバルズに呑まれていたときの記憶も徐々に蘇ってきた。

（そういえばあいつ、なんだかんだ理由を付けてずっと俺の側にいたし、トレーニングも手伝ってくれてたんだよな）

バルズとしての俺はそれを笑顔で受け容れ、感謝を示し……あとはいつものメニューに励（はげ）むだけ。まあでも、それはそうだろう。アルバはどうやら好意を気取（けど）られたくない様子だったし、俺は俺で、アルバとの仲がいくら進展しようと筋肉の発達には関係がないし。

だがいま、バルズの中から戻って来た俺には、かれの行いがむしろ好意を求めてのことだったなんて明白だ。伊達に二十数年人生を過ごしてきたわけじゃない。

そうならそうで、よく分からない。どうしてアルバは俺の好意を求めたりなんてした？　ただの、同じ会社にいただけの、後輩を？

アルバは――先輩はずっと強気で、生意気で、何に対しても斜に構えて冷笑的で……ああ、こう並べるとただの厄介なひとみたいだ。実際職場での印象はずっとそんな感じだったけれど。

厄介だけど仕事ができるひと。――ひとりでなんでもやれるひと。やれてしまうひと。

だからだろうか。ひとりではできない何かを見つけたのだろうか。それとも……元の世界から離れたこの地で、ただ単純に同郷の知り合いが恋しくなっただけなのだろうか。

――俺はどうだ？　男に興味なんてなかったはずだ。筋肉が好きだったこともない。先輩にセクハラされても、ドン引きしていたのに――

（ああ、だけど、これ以上、自分を騙し続けることはできない！）

今まで俺が築いてきた嗜好も、オスの竜たるバルズの性癖も、もはやどうでもいい。たった一つの事実だけがここにある。

俺は、いま、救いようもないくらい、筋肉に欲情している！

やがて俺の番号が呼ばれたとき。再び観客に向き合う最前線に立ったとき。煮え滾る溶岩のような欲情に塗れた心は、さしもの堅固な肉体の檻でも押し留められなくなりつつあった。

「うぅ……はーっ……」

長く、深い呼吸が自然と漏れる。落ち着くためではない。辺りに満ちる雄の臭いをもっと取り込んで、俺自身が放つ発情香を、より強く濃くするためだ。

そしてそれはただ筋肉を魅せるため。眼前を埋め尽くす満員のオーディエンスに、俺という竜の巨大な肉体を焼き付けるためだ。


111

太陽のように丸く光り輝く、膨らんだ胸筋。

ちっぽけな人間の胴体よりも一回りは太い両腕。

そして——整然と列を為す腹筋の直下、股間に深く穿(うが)たれたスリットから今まさに顔を出し、ひたすらに天を衝(つ)こうとする、丸太よりなお堅く、大きな竜根。

　会場がどよめく。黄金(こがね)の竜人と、そこに聳(そび)え立つ肉の柱。赤黒くぬらつく光沢と、湯気が昇るほどに濃厚な、盛りの付いた雄の臭い。

　司会者ですらも一瞬言葉を失って、ごくりと唾(つば)を飲んだ後、気を取り直してこう叫ぶ。

〝ご覧ください！　これこそが、バルズ選手の最高峰たる所以！　余人の踏破を阻む、まさしく絶壁の前衛峰(ジャンダルム)です!!〟

　全身に力がみなぎる。吹き出る汗とともに、俺のカラダはより一層膨らみを増して巨大化し、客席の歓声を盛り上げる。

　それと同時に気が狂いそうな快感を伴って、股間の熱い塊が爆発的に嵩(かさ)を増していった。

「んぃ、んんんッ、ぅんあアァアッ！」

　言葉にならない快楽の嵐が俺の背筋を貫き、雄叫びとなって牙の間から漏れる。

　それは胸筋の谷間を押し退(の)けて、両手で抱きかかえるほどの質量となり、俺の口にまで届く。

　昂(たかぶ)る胸の鼓動に合わせて、どくどくと溢(あふ)れる透明な我慢汁は、豪華な晩餐(ばんさん)の食前酒のようだ。

　そして俺は躊躇(ためら)いなくその肉塊を口に含む。

イノチの味。チカラの味。噎(む)せ返るほどの雄の味。

　分厚い竜の舌でそれを舐め取るように味わいながら、当然ポージングは忘れない。観客席の興奮を最大限に煽(あお)るための眼差しで、口の端に垂れた甘露をぺろりと掬(すく)い、巨根を胸に挟んだままの、サイドチェスト。怒濤(どとう)のような声援が俺の恍惚(こうこつ)を絶頂へと押し上げる。

「ぐ、が、おおおオオオッ!!」

　渾身の咆哮(ほうこう)と、フロント・ダブルバイセップス。

　それと同時に俺の巨砲も、白く粘(ねば)つく叫びを解き放った——

＊＊＊

分かってしまった。俺は、これを求めていたのだと。いつだったか俺の脳裏に訪れた閃(ひらめ)きは、この情景だったのだ。

俺はバルズだ。屈強な雄の臭いも、そそり立つ男根も、限界まで鍛えに鍛え抜かれた筋肉も、すべて、すべて、大好きなのだ、と。

それを俺ではないと思う気持ちは、いまだに残っている。分かってはいても、戸惑いを振り払うことはできない。

自分が自分であると認めるのが、こんなにも難しいことだとは。興奮し狂乱する自分の姿を傍(はた)から冷静に眺めているのは、正直なところ、異常だとしか思えないし――

――だから、俺はもっと、バルズにならねばならない。俺がバルズであるために、この弱い人間の心を克服して、もっと、もっと、……

「良かったぞオ、バルズ！　さすがはオマエだ、最ッ高にキレてた!!」

大会を終えて会場から去ろうとしていた俺に、今までになくはしゃいだアルバの声が掛かる。

紅い仔竜は、混じり気なしの讃辞と笑顔とを携(たずさ)えて、俺の足元へ走り寄ってくる。そのまま俺の太ももに頭を擦り付けると、興奮のためか、その手でぺしぺしと尻を叩いてくる。

「……なんとか、無事に済んで良かったです」

「お？　まアた口調が昔のに戻ってんぞ」

「良いんですよ、これがラクなんで……」

結局あのあと、俺はボディビル大会で優勝の座を獲得した。それも自分が出場した階級のみならず、今大会の全体を通してのチャンピオン、ということらしい。万雷の拍手のなか、やけに大きなカップを持たされたことは覚えている。

「実は昔さア、出場してみたことがあるんだよ。割と良いセンまで行ってたとは思うんだがね、あそこまで立派なガタイにゃアなれなかったな」

　やっぱりこういうのも才能なんだろうなア、と呟いて、アルバはしみじみと頷く。……かれが昔の話をするなんて珍しい、と俺は思った。
「と言うか、えー……いったい、いつの話なんですか、それ……いつからここの温泉に……？」
「まア細かいこたア気にすんな。たぶんここと あっちとじゃ時間の流れが違ったりするんだろ。実際の所は知らねえけど」
　アルバはわざとらしく肩を竦(すく)めて嘯(うそぶ)く。
「それにやっぱ痛感したぜ。こっちにゃアこのキュートな仔竜のボディがお似合いってこった。そんでオマエにはそのマッチョボディが、ね」
　俺の目の前でしなを作りながらウインクする、一見ちいさな子供の竜を見ていると、世の中のありとあらゆる道理が脆くも崩れ去っていくような錯覚を覚える。いや、それは本当に錯覚なのか。……それを問うのも、既に遅いか。
「あのボディビル大会な、他の世界からも大勢出場者が来てただろ。ほら、竜じゃないヤツらとかさ。あれで結構儲(もう)かってるんだ、って女将のネエちゃんも言ってたぜ」
「他の世界……ですか」
「そうそう。温泉が湧いてるってことは、そんだけ世界と繋がってるって話だからな」
　——そう言えばそうだった。ここへ来たのも、元はと言えばあの世界へ戻る前に疲れを取る、それだけのためだった。
　それがいつしか、日を重(かさ)ね月を累(かさ)ね、肉体までも竜となり、ボディビルのチャンピオンにもなってしまった。
「……まア、なんだ。言いたかったのは、そんなところで活躍して、結果を残せること自体が、オマエの実力を示してるってことさ。オマエの才能は、ホンモノだよ」

さっきから、アルバが妙にしおらしい態度で話しかけてくるので、どうにも調子が狂いそうだ。

　それでついつい、胸の奥底で燻り続けていたわだかまりが、俺の口から漏れてしまった。

「ホンモノ、ですか……」

　その声の苦々しさに、我ながら驚く。

「そこが、俺、いまだによく分からなくて。……俺はもうバルズなんだって分かってるのに、バルズじゃない俺は、もうとっくに不要なはずなのに。まだどこかに、小さななにかが残ってるんです。俺を俺にさせてくれないなにかが。この葛藤が消えない限り、俺は――」

「言うまでもねえけど、その問題に関しちゃ、すぐに効くクスリなんつう便利な代物はない。あるとしたら、ソイツはもう魔法だ。あるいは奇跡か。ま、いくらでも言いようはあらアな」

　仔竜は訳知り顔でそう宣う。そのまま、かれは俺のシッポをよじ登って来ると、いやに慣れた手つきでその付け根を揉みしだいた。

「あっ、んぁっ！」

「相変わらず良い反応だなア？　心配要らねえ、カラダに慣れたら、心だってついてくるモンさ。だからここでゆっくり、じっくり、ねっとり、使い方を覚えていこうぜ。……オマエの尻の穴も、まだまだ調教のしがいがありそうだしな」

　囁くようなその言葉に、俺の脳みそが震え、びりびりと痺れる。アルバの柔らかい小さな手が俺の大臀筋を撫で回すだけで、カラダは火照り、息が弾み、そして尻穴がひくひくと疼く。

「ア、アルバぁ、そこ――」

「ガタイはデカいのに、こんな甘え声を出すんだもんな。さア言ってみな、ナニが欲しい？　頑張ったご褒美にオマエの好きなモノを恵んでやっても良いぜ？」

「ち――」

　言ってしまえば、楽になれるのだろうか。

いや、もう、そんなことはどうでも良かった。この耐え難い衝動が俺のものでも、違っても。

「――ちんぽ。アルバの、ちんぽが、欲しい」

「よし。よオしッ！　ヤりまくるぞッ!!」

＊＊＊

さあさあ、と追い立てられるように俺たちが泊まっている部屋に入るや否や、アルバは俺の口にその小さな舌をねじ込み、入念に掻き回しながら俺をその場に押し倒す。

部屋を通り抜ける風にも、俺たちの発情した火照りを冷ますほどの力はなく、却って互いの上気した息遣いを際立たせるだけ。

真紅の夕陽に染め上げられた床に、布団さえ敷かず、俺の巨体は横たえられていた。

「はやく、はやくブチ込んでくれ。ケツがもう、限界なんだ」

「情緒のカケラもねえヤツだなア。焦るなよ、ちゃアんと躾けてやるっての……ほら、バルズ、口開けろ」

嗜虐的な色を纏った声を聞き、反射的に開けた俺の口めがけて、さっきの舌とは比較にならないほど大きく、太く、びくびく脈打つイチモツが突き出される。相変わらず、冗談みたいに立派なアルバの竜根だ。

刹那の抵抗さえ許さず、アルバは俺のツノを掴んでぐいと引き寄せる。口腔を我が物顔で犯し進んでいく、生臭くも蠱惑的な味わい。

「美味いか？　美味いよなア。オマエの大好物だもんな！」

「はふ、ん……っむ、ああ、最高……」

「へへヘッ、たっぷり味わえよ。そしたら尻も使ってやる」

言われるまでもない。蜜も滴るそのご馳走を、俺は夢中で頬張り、漂う香りすらも全てしゃぶり尽くそうとする。

「んッ、すげエ、だいぶ上手くなったな、バルズ。はアッ、ぐ、い、イイよな、イクぞ、ありがたく呑み込めッ！」
　静止する暇もなく、その考えさえ浮かばない陶酔の中で、燃え盛る溶岩のような精液の奔流が喉へと殺到する。脳髄を直撃する深いえぐみと青臭さ、アルバの本能の味だ。
　それは何故か、とても懐かしい味だった。

「おいこら、なにボーッとしてんだ。オマエが言ったんだろ、はやくブチ込んでくれってさ。本番はまだまだこれからだぞ」

　あれだけ大量の精を吐き出したあとでさえ、アルバの巨根は萎える気配を見せるどころか、さらに艶と凶暴さを増して俺を誘惑する。
　無意識に唸り声が漏れ、仰向けの胸と腹が、餓えんばかりの淫欲にびくりびくりと反応して蠢動する。

「ぐ、ぐる……ぐるああッ！」
「わッ、ちょ、急に持ち上げ――あアあッ!?」
　限界など、とっくに超えていた。理性の軛から外れた両腕が仔竜の細い胴を掴んで、ぐっぽりと大口を開けた俺の尻穴へと、勢いもそのままに打ち下ろす。
「あああ――」
　暖かい。脈動する熱の塊が、空っぽの穴を満たしていく。それが相手の熱か、自分の熱か、ぐるぐるぐると入り混じって、はっきり分ける術はもはやない。二頭の竜は嬌声を響かせ、淫靡な水音を恥ずかしげもなく撒き散らしつつ、互いに互いを貪り続ける。
　アルバが胸に抱える肉塊の、巨大な質量が俺という虚を出入りするたび、俺の欲していたものが流れ込み、渦を為し、膨張し――
　目の前が真っ白になる。抑圧されていたものが決壊し、全てを押し流す。

「アァッ、がああっグ、るああアアアッ!!」
「いぎっ、い、イく、イっちまうぞォッ!!」

　全身を呑み込まれるほど深い挿入に応えて、俺の快感が頂点に達した。さきほどの射精にも劣らない量が尻に注がれると同時に、スリットから全身を顕した巨砲が、白い豪雨を降らせる。

「あ……」

　暴力的なまでの開放感。竜になって知った、竜になったからこそ味わえる、至福の瞬間。
　精液塗れになって甘く痺れたままの脳内に、意識が徐々に戻り始める。俺は、まだカラダをうまく動かせないまま、ただその熱狂を何度も何度も反芻していた。

(俺は、コレが欲しかったんだ、そうだ——)

　今までずっと何かが足りない気がしていた。その心の隙間を埋めたくて、埋めて欲しくて、次々に筋肉を、竜根を、そして快楽を求めた。
　二頭分の熱狂と肉棒と精液が、いつまでも満たされないその隙間を、やっと埋めてくれた——そうだ。その、はずだ。

　いま俺は満たされている。
　俺は既に、どこからどう見ても完璧で立派な黄金の竜だ。ツノのてっぺんからシッポの先まで、一流の芸術品にも勝る美しい肉体。眩しく輝く超弩級(ちょうどきゅう)の筋肉と、赤黒く怒張する自慢の巨根。
　それら全てを手に入れてなお、足りないモノがあると言うなら。竜どうしで何度でも交わって、そんな空隙(くうげき)が見えなくなるまで、溺れるほどの精液で埋め尽くせばいい。
　こんな風に。こんな風に。こんな風に！

——ああ。
それでも、まだどこか、何かが足りない。

「先輩」

俺が呟いた言葉に、アルバは顔を顰める。

「あ？　ソレ、やめろって言っただろ」

「分かってます。分かってるんです、けど」

きっと、アルバの言っていたことが正しいのだと思う。俺にはもう少し、バルズと向き合う時間が必要だ。

「……徐々に、でもいいですか。俺がちゃんと、このカラダに慣れるまで。竜に、なれるまで」

はーっと、呆れや脱力を全て込めたような深いため息を吐いて、アルバは俺に目を向ける。

「あア、そうだった。オマエってこういうとき、案外ガンコだったもんなア。……分かってる。こっちもトコトン付き合ってやるよ」

その小さな紅い手で、突き出た俺の胸筋を、ぽてりと叩く。その表情は既に、いつも通りの不敵な笑みだった。

俺もつられて、頬を緩ませる。まあ、そんなことよりも、今は。

「じゃあもう一発、いや二、三発——というか精巣がカラになるまでヤりましょう。俺、まだ一回しかイってないですし」

「お、おう、いきなり積極的になったな」

まだ汗と精液でつやつやと照り輝く真っ赤な仔竜を抱き寄せて、衰える気配もまだ見せないその巨根に、俺は接吻（くちづけ）をした。

＊＊＊

「……とまあ、そんな具合で大会に出場したり、アルバに後ろを開発されたりして、いまに至るわけです」

俺はそこまで言い終えて、ふうと息を吐く。

「あの時はあれで折り合いが付けられたかなと思ったんですが、まあ……あとはご存じの通り、まだまだ道程（みちのり）は遠そうかな、と」

「見ての通り、コイツときたらこんな面倒臭え性格だからさ。考え出したら止まらねえの」

あーやれやれ、とご丁寧に声まで出して俺を茶化してくるアルバにはさすがにイラっとしたが、俺にだって反撃の手はある。

「そういう先輩も、普段は遠巻きに見てるだけの癖に、一度首を突っ込んだら放っておけなくなるタイプでしょ。生きやすそうに見えて結局、いちばん苦労するやつ」

「だアからオマエ、その呼び方……！」

図星なのをごまかそうとして、ギャンギャン噛み付いてくる仔竜を適当にいなしつつ、俺は話を聞いてくれたふたりに頭を下げる。

「俺にできる話はこれくらいです。オチも特にないし、まだ解決もしてなくて、お恥ずかしい限りですが……でも、大会の後でアルバとヤったこととか、さっきみんなで盛り合ったことで、なにかが掴めそうになったのは、事実なんです。それがもっとはっきり分かれば――」

「――たぶん、だけど。ふたりがもっと仲良くなれたら、手掛かりも近付くんじゃないかな」

「まア……そりゃ、何の因果かこうしてふたり、こんなところでこんな姿になっちまった訳だし、あとはどれだけ現状を楽しめるか、だアな」

ムルトとアルバはそう言って低く唸っていたが、そこにバルズが遠慮がちに言葉を挟む。

「ひょっとしたら、性欲に押し流されるんじゃなくて、自分からそれを楽しめるようになれば良いのかもしれません」

「うん……そうだね！　だったらさ、ふたりがもっと楽しめるための方法とか、気持ち良くなるためのコツとか、オイラとアニキが見つけたこと、全部教えてあげるよ！」

ムルトは気分を変えるように、そして内心の興奮を隠しきれずに鼻息を荒げ、オレたちの顔を順々に見て、照れ笑いした。

「だからさ、とりあえずあともう一回、試しにヤってみない？」

# 五　湧出！　温泉旅館の新名物

「なるほど。それで、良い手がないか探していた、という次第なのですね」
　カラスの顔が、思慮深げに頷く。
　ちょうどさっき、用事を済ませたドーマがオレたちを迎えに旅館まで戻って来ていた。
　そこでオレたちはバルズとアルバを彼に引き合わせてから、ふたりと出会った経緯や、その悩みについて相談したのだった。
「いくつか手立てがございますよ。まず簡単なものから申しますと、例えば、いっそのこと元の世界にお戻りになるという選択肢はいかがでしょうか。この温泉の効能を応用すれば、再び人間の姿になることも可能でしょう。そうすれば――」
「――いや。それはもう、良いんです。戻ったところできっとまた別の後悔になるだけだし。俺は、前向きに生きたいな、と」
　はじめて話を聞いたときに漂っていた朧気（おぼろげ）な不安感は影を潜（ひそ）め、バルズの声は毅然（きぜん）と響く。
　旅人はその返答に敬意を表するように一礼し、微笑みを湛（たた）えて別の案を提示する。
「それでしたら、竜としてのチカラを安定させ、その衝動をある程度鎮める魔法などはいかがでしょうか。気の巡りを捉え、綾取（あやど）る彩紋魔術（スティグマトロギア）であれば、私（わたくし）にも些（いささ）か心得がございますので」
「魔法……す、すてぐま？」
　ムルトは耳慣れない言葉をなんとか復唱しようとしているが、全然分かっていないことだけは分かる。もっともそれはオレも一緒だけど。
「ええ。早い話が、魔力を籠（こ）めた紋様――魂と肉体の両方に刻む入れ墨とでも申しましょうか。紋様の組み合わせによって様々な効果が得られますし、不要になれば除去することも容易です」

「ふーん……それで性欲が制御できるんなら、願ったり叶ったりだよなア。だろ？」

「確かに。せめて毎晩毎晩、理性を失うようなことがなくなれば、遥(はる)かにマシになりますね」

　アルバとバルズもそう言い合って頷いたので、ドーマはその笑みを深める。

「ええ、もちろん、バルズ様のお気に召すよう、細部まで彩紋の効果をお決めいただけますよ。それでは、早速お試しになりますか？　お代については後程(のちほど)ご相談の上、ということで」

「――あのさ、ちょっと聞きたいんだけど」

　ドーマの話を自分なりに噛み砕こうとして、どうしても気になることがあった。

「その紋ってやつは、性欲を抑えるだけじゃなくて、逆に強めたりもできるのかな？」

「さすがグラン様はお目が高い。……まさしく、ご賢察の通りです。お望みなら、身体の機能を活性化させ、性感をより鋭敏にし、生殖器のはたらきを極限まで高めることも可能です」

　歌うようにすらすらと彩紋魔術の効能を語るカラスの口ぶりを聞いて、巨竜たちはごくりと生唾を呑む。

「もっとも、いかに強力な魔法といえど、その効果は対象が元来持つ性質に左右されてしまうのですが……皆様には、心配ご無用ですね」

　そんなオレたちの様子にも、かれは穏やかな笑みを崩さない。

「そ、そうだ、お代の話をしないと。俺は……その、たいしたモノは持ってないんですが」

　心許ないバルズの発言に、ドーマは頷く。

「そうですね。とある特別な材料や事前準備が必要でございますし、僭越(せんえつ)ながら私(わたくし)の技術料という点からも、恐縮ではございますが無償でのご提供はさせていただきかねます」

　オレはムルトに視線を向けるが、かれも首を傾(かし)げるばかりだ。そんなオレたちの様子を見て、旅人は小さく咳払いをし、どことなく謎めいた表情を浮かべる。

「ところで――これは単なる、そう、個人的な興味に過ぎませんが」

　赤みがかった金の瞳を煌めかせ、その言葉はなめらかに続く。

「巨竜はその身に帯びた役割ゆえに、他の存在とは比類にならないほど強大な精力を誇る、と伺ったことがございます。……もし仮に、そのチカラを理の許す限り高められたとしたら。魔術の極致を尽くし、肉体の枷から解き放たれた巨竜が、どれほどのポテンシャルを有するものなのか……それを是非、この目で拝見したいと、以前からずっと願っておりまして」

　真意が読みにくい笑顔ながら、その好奇心は隠し切れていない。

　……この旅人さん、涼しい目つきで話口調も丁寧な割に、だいぶ変態なこと考えてるんだな。

　まあオレたちの世界に来るヒトなんてのは、それだけ物好きなのかもしれない。

「ですから、ここでご提案をひとつ。バルズ様にご希望通りの施術を受けていただく前に、少々皆様のご助力を賜り、巨竜が持つ性欲の果てがいかなるものか、お見せ願えるのであれば……それらのお代は、不要とさせていただきます」

　そう言って、かれは悪戯っぽくウィンクした。

「それってさ……要するに、普段でもえっちなアニキが更にパワーアップしたらどうなるか、ってことだよね？　えへへ、想像しただけでもヨダレが出そうだ」

　ムルトは目をとろんとさせて何事かを妄想し始めている。ヨダレどころか、スリットからは先っぽが見えそうな様子だ。

「そりゃア確かに面白そうだが……コイツらが全力でぶつかり合うんなら、かなり広い場所が必要になるんじゃねえか？」

　にやにやと、揶揄の響きも含んだアルバの茶々に、黒い旅人は当然だと言いたげに頷く。

「ええ、何を隠そう私は、この温泉の女将とは旧くよりご面識をいただいておりまして。その伝手で少々融通を利かせていただきましたので、場所の心配はご無用です。ですからほんの一時、私めの愚行にお付き合いいただければ、この上なき僥倖かと――」

「ああ、前置きはそれぐらいでいいや」

　オレはにやつく口許を抑えきれないまま、声を上げた。

「とびきり強いヤツを頼むよ。オレたち巨竜が本気を出せばどうなるのか……きっと、後悔はさせないからさ」

　そしてオレの後ろからはムルトが顔を出す。

「それじゃあせっかくだし、どれくらいデカくできるか、どれくらい沢山出せるか、みんなで勝負しない？　オイラも巨竜の端くれだしさ、いくらアニキにだって負けてらんないもんね！」

「ほーオ、良いこと言うじゃんか。な、バルズ、オマエも良いところ見せてくれるよなア？」

「なんでそんなにプレッシャー掛けるんですか……ああ、でも、そりゃもちろんですよ！」

　アルバと、続けてバルズがムルトの提案に乗っかり、わいわいと盛り上がるオレたちに、旅人は頭を下げる。

「皆様に感謝申し上げます。それでは、どうぞこちらへお越し下さい……」

＊＊＊

　本館から渡り廊下を進み、少し離れた一角へ。緑と温泉の匂いがますます濃くなった一方で、他の客人の気配はぱたりと途絶える。

「貸切の露天風呂を備えた離れです。皆様には少々手狭に感じられるかと存じますが、どうかご容赦くださいませ」

　その言葉とともに、ここまで案内してくれた女将さんが静々と退出すると、あとには四頭の竜と旅人だけが残された。

「では皆様、早速はじめましょうか」
　ドーマの口調は相変わらず丁寧だが、どことなく普段より浮き足立っているような気もする。
　身に纏う外衣のなかから怪しげな小瓶を数本取り出し、オレたちに見せながら並べていく。
「彩紋を描くための魔法の染料です。どれだけ手荒に激しくもつれ合っても、水に濡れても、落ちる心配はございません。もちろん効能の程は折り紙付きですよ。どなたから試されますか？」
「はいはーい、オイラやりたい！」
　手を掲げて前に出たムルトに、旅人は笑顔を向ける。
「ムルト様、ありがとうございます。それではこちらで、仰向けになっていただけますか？」
　期待を顔じゅうに輝かせ、ごろりと寝転がったムルトの下腹部付近に、カラスの旅人はゆるりと近付く。幾重（いくえ）もの岩のような腹筋の下、人間で言えば臍（へそ）のある辺りからスリットの筋に沿って、しなやかな翼の先が洗練された軌跡を描いた。
　ドーマがその手を動かすままに、薄紫の複雑な模様が鬱金色の肌に刻まれていき――
「う、はぁ、だ、だんだんちんぽが……アツくなって……うぅッ！」
　それが完成に近付くにつれ、ムルトの息遣いは荒くなり、とろんとした目つきに抑えきれない欲望の色が宿り始める。
「アニキ、ねえ……お願い、こっちに来てよ。あー……んはあぁ……アニキのことが大好きな気持ちが、どんどん、溢れてきちゃう！」
　いつになく甘えた顔つきのムルトが、オレの腕をひしと掴んでくっついてくる。その体温は確かに普段より高いようだ。
「これ、すごいよ、すごく気持ちいい！　ああ、アニキぃ、もっと色んな所を触って……!!」
「彩紋の効き目はバッチリみたいだな。感度も上がってたりするのかな？」
「んひゃ……ぇあっ、アニキの指、いつもよりゾクゾク来ちゃう!!」

そんなメロメロ状態の相棒に構っている間に、旅人はアルバとバルズにも、手際よく入れ墨を施したようだった。

「最後はグラン様ですね。ふふっ、腕が鳴るというものです」

かれの手をよく見れば、黒い羽根ペンらしきものを持っていた。……あれは、ドーマ自身の羽根で作ったのだろうか？

かれに指示されるまま、オレは身を横たえて待っていたが、行きますよ、という声とともにドーマは華麗な手捌(てさば)きで羽根ペンをひらめかせ、オレのスリットを囲む辺りから尻尾の付け根に至るまで、魔法の模様を描いていく。

「――――!?　～～～ッ！」

それは、想像さえしなかった快感だった。

まだ表に出ていないオレのちんぽを、内側から膨れ上がらせ、パンパンに満たしていくような熱を帯びたチカラの濁流。

想像以上に強大な快感に喘ぎ声を上げようとするたび、その魔力はさらに威力を増大させ、オレの思考を捻じ曲げ、塗り潰していく。

「コッ、これ、このままだと……ッ！」

「うへ、へへへ、気持ちいいでしょ、我慢できないよね、アニキ？」

はあはあと吐息も荒いムルトの声が、かろうじてオレに残っていた最後の理性も吹き飛ばす。

これは愛だ。ムルトが言った通り、大好きな気持ちが、どんどん溢れて止まりそうもない。

快楽に真っ正直なオレの竜根は一瞬のうちに巨大化し、天を支える柱のように、高く立派にそそり立った。……その偉容(いよう)はドーマの体格をさえも凌駕(りょうが)し、旅人を見下ろすように佇(たたず)む。

「実に、素晴らしい……これほどまでに見事なモノが、この世に実在しうるとは。ああ、是非その周りにも、私めの彩紋を！」

普段の様子とは打って変わって興奮しきりのドーマが、陶酔したようにそう言いながらオレに近付く。オレの理性の箍（たが）はとっくの昔に外れてしまって、ただこの場に林立するちんぽのことばかりを考えながら、されるがままになっていた。

むわ、と湯気が立つほど熱気を帯びたオレのちんぽに、生い茂る蔦（つた）のような模様がじりじりと染め込まれていく。それは縦横に走る血管と交わり、絡まり、ともに枝分かれして花開き、見慣れたオレの巨砲が、心のどこかを揺さぶるような、初めて見るエキゾチックな姿へと変貌していく。いや、それよりも。

「あ、ああぁっ、ぐうううッ！」

あつい。脳が焼け付く。ひとりでに舌が突き出される。それほどの性欲、渇き、なにもかもがごちゃまぜになった衝動。出したい、挿れたい、空にしたい、満たしたい……細切れの思考は、最後の一欠片（ひとかけら）までちんぽで埋め尽くされる。

「グ……ッ！　ぅぎ！　あアア！　ムルト……ムルトぉ！」

「大丈夫、アニキ。オイラはちゃんと、ここにいるからね。さあ、ヤっちゃおうか！」

大好きな声、そして、口に広がる大好きな味。ムルトの分厚い舌が伸びてきて、のたうつオレの舌と絡まる。――それが始まりの合図だった。

上の口どうしが合わさるなら、当然ちんぽもキスをする。兜合わせになったオレとムルトの竜根が、お互いのカラダを覆い尽くしてしまうほどの勢いで精液をぶっ放し始める。

もう一組の方も、もう既に大分楽しんでいるようだった。断続的な水音と喘ぎ声の合間に、息を切らせながらも揶揄い忘れない仔竜の声が聞こえてくる。

「バルズ、オマエさア……さっきよりもデカくなってねえか？　この淫紋、すげェ効き目だな」

「淫紋ではなく、彩紋でございます」

「あー、うん、そりゃそうとして」

やんわりと訂正するカラスの声を軽くいなして、アルバはさっきまで尻穴を犯していたバルズの肉棒をしげしげと眺め、自分の胴体と見較べて軽く笑う。

「うははっ、見ろよ！　オマエのちんぽの方が太エぞ。色ツヤもだ、やたら美味そうにテカりやがって。どれどれ——んッ、弾力もイイ！」

「きっ、急に抱き付いたりしたら、ん、アアッ……はあッ、止まらな、あグッ!?」

　飛び付いてきた仔竜を振り落とすほどの勢いで、聳え立つ肉の巨塔は激しく上下に揺れ動き、派手な音を立てながら白い精液の放物線を描く。

　そこにむしゃぶりつくアルバも、スリットから大蛇のようにのたうつ凶器を露わにしながら、絶え間なく噴き出す白濁を全身で浴びていた。

　その光景も、音も、漂ってくる匂いも、舌の先に感じるコク深い苦みも、今抱き合っている全身で感じる相棒の巨体も、五感全てが股間の紋様によって増強され、オレの魂を直撃する。

「んぁあ……オイラのも、止まらない……！　アニキぃ、ほら……あは、アニキもオイラも、もう真っ白だよ。う、でッ、でも——」

「出し足りない、よな。はは、ははは、オレも同じだ。……うあ、あァアッ!!　吐精しても噴精しても、まだ、まだまだ、奥からどんどん湧き上がってクるッ!!」

　止まらない快楽が、昂りが、そのまま体内を突き抜け、精液の噴水となってその場を満たし、染め上げていく。

「あー……これ、シャワーみたいだ。そっか、オンセンだもんね」

　幸せそのものという顔で呟くムルトは、次々に降り注いでは足元に溜まっていく白濁を掬って、はう、と喘ぎ声を上げる。

　気付かないうちに、巨竜たちの精は幾重にもその場を覆い、膝下が埋もれるほどの突拍子もない質量となって、周囲一帯、湯気立つ精液の海に浸りきっていたのだった。



「なるほど確かに、こりゃァ文字通り温泉だな。ははッ、良いじゃァねえか！　――巨竜たちの、精液温泉!!」

オレたちの目が、ようやく現実を再認識したとき。頭上からはアルバが上機嫌にはしゃぎ回る声が聞こえて、視線を下に向ければ、まさしくその言葉通りの景色が見えた。

大小の岩石に囲まれた湯船はねっとりと濃厚な精液で満たされて、その白濁を全部吐き出した竜たちは、蕩けきった顔でそこに浸かり、放心しているのだった。

「んー、すごいね……こんなに出ちゃうなんて、想像以上だよ！　なんて言うのかな、気が抜けちゃうこともなくて、逆に心の底から満足感が広がっていく感じ。ちんぽもまだ元気だし！」

白く糸を引く水面から、ざばりと巨根を持ち上げて、ムルトはそう笑う。

その言葉通り、ぬらぬらと照り輝く肉の柱は普段の勃起時に輪をかけて太く大きく重々しく、びきびきと張り巡らされた血管までも膨らんで、その大きさは頭の先をとっくに超えている。

「どう、どう？　もしかして、アニキのよりもデカくなってないかな？　……よいしょッ!!」

気合いもろともオレのちんぽを引き揚げて、鼻息も荒く二本の巨塔を見較べる。こう見ると我ながら呆れるくらいのボリュームだ。互いに互いのモノを抱えてがっぷりと組み合わせても、どちらが勝るとも言い難い、実に圧巻の眺めだ。

……しかし。

「お、俺のちんぽが、こんなに……!?」

赤面して狼狽えるバルズの、爆根としか言いようのない肉の山には、さしものオレたちさえ目を見開いて絶句せざるを得なかった。時折、ぐぽりと口を開けては粘つく涎を垂らし続けている。たぶん、ヒトひとりなら余裕で呑み込んでしまえたんじゃないだろうか。

「素晴らしい――ああ、最高です！」
お互いの変貌振りを見せ合っていたオレたちの耳に、カラスのよく通る声が聞こえた。
「まさに遍く世界に冠絶する皆様の筋肉と巨根、そして無尽蔵のエネルギーが今、この場を満たし夢にまで見た光景を現出せしめている、とても言えましょうか。おお……」
泣き出しかねないほどの情感と、いつもより更に仰々しい言葉を紡ぎながら、ドーマは言う。
「感謝を。皆様には何度お礼を申し上げても足りません。巨竜の神髄、その眼福の栄に与りましたこと――誠にかたじけなく存じます」
暖かい精液の湯の中で、オレたちは目と目を合わせて笑う。そしてもう一度、互いのツノを舐め合い、キスをした。
オレたちの間に、脈打つチカラが巡っているのが分かる。……なんと言えば良いだろうか。繋がり？　絆？　いや、そう、これはきっと、祝福だ。

「バルズ、具合はどうかな。さっきみたいな性欲の爆発はオイラたちも初めてだったからさ。大丈夫だった？」
気遣わしげな言葉を掛けつつ、ムルトの目は舐めるようにバルズの筋肉をなぞって、驚嘆の色を浮かべている。
「うん、ありがとう。確かにこれは凄いな……この紋の効果で、性欲を制御しながら慣らしていけば、うまく付き合うコツが掴めそうです。きっと成功する――そんな予感がします」
そう言って、かれは頭上を漂うアルバに向かい、頷いた。ばつの悪そうな顔をしていた仔竜は、それを見てなにかが吹っ切れたように、ほっと息を吐く。
「……あア、そりゃ何より。そう言ってくれて良かった」
それは消え入りそうなほどの小さな声だったが、バルズには確かに届いたようだ。黄金色の両腕をぐいっと曲げて、照れ臭そうに笑う。

そしてアルバは、小さな翼をぱたぱた動かし、そのままオレたちの方に降りてきて、深く頭を下げた。

「グラン、ムルト。……アンタたちにも、礼を言わせてくれ。ふたりがいなきゃ、コイツとの関係は拗れてただろうし、ひょっとしたらまた喧嘩別れしてたかもしれねえ。全部、自業自得だけどな。――ははッ、巨竜のチカラってのはやっぱり、ホンモノ、なんだなア」

オレはムルトと笑い合って、それに応える。

「快楽を巡らせて、みんなを幸せにするのが、オレたちの役割だから。今回のことも、すごく良い経験になったよ。自分の可能性と限界を知って初めて、行くべき道が見えてくるのかもしれない」

「そうそう。前向きになるためには、前が見えなきゃダメだもんね。ふたりのことも、もっともっと知りたいし、もし良かったらこれからも、色々お手伝いさせてもらえると嬉しいな！」

わいわいと語り交わし、互いの筋肉と巨根を見較べては褒め称え合っていたオレたちの側に、カラスが静かに近付く。穏やかな笑みで一礼すると、かれは口を開いた。

「この度は私めの愚案にお付き合いいただき、重ねて感謝申し上げます。拙技ながらこの彩紋が皆様のお心に叶いましたら、これに勝る幸いはございません。……此度は、限界までチカラを引き出すために時間の制約を設けておりましたので、そろそろ効果が薄れる刻限となります」

宴の終わりを告げるかれの声に呼応するようにして、オレたちのカラダに刻まれた紋の色は溶けるように消えていき、あれほど強烈だった各部の感覚も、綺麗に元に戻ったようだ。

「実に名残惜しくはございますが、これまでのようですね。少し落ち着かれたら、バルズ様に制御の紋を刻んで差し上げましょう。その後はお部屋にお戻りいただければ、と存じます」

ドーマの言葉に素直に従いかけたところで、自分たちの有様が目に入った。
「え。温泉……というかこれ、もう精液の海になっちゃってるけど、良いのかな？　みんなで片付けようか」
　さすがにやり過ぎたか、と声を掛けたけれど、カラスは笑みを更に深くしただけだった。
「いえいえ。巨竜の精液温泉など、滅多に拝めるものではございませんよ。是非ともそのままに……ね？」
　呆気にとられた挙句、誰からともなくふっと吹き出すと、オレたちはそのまま笑い声の渦に飲まれてしまったのだった。

＊　＊　＊

「またのお越しを心よりお待ちしております。今後ともなにとぞ、ご贔屓に……」
　深々と頭を下げる女将さんの見送りを受けて、オレたちは旅館を後にしていた。ややもしないうちに、前に立つドーマが振り向き、
「さて、ここからは再び世界の壁を跨ぐ道程となります。グラン様とムルト様は既にご承知のこととは存じますが――」
　と、オレたちのすぐ後ろを見遣る。そこには純金と真紅の竜が二頭、期待の中にも不安を隠しきれない表情で、かれの話を聞いていた。
「ご心配には及びません。とても単純ですよ。心から、強く、この宇宙の限界をも飛び越えてあちら側へ至るのだ、とイメージしていただくだけですから。そうだ、お二方にもお力添えをお願いできますでしょうか？」
　オレは同意し、バルズの手を取る。ムルトの方は、肩にアルバを登らせたようだ。バルズとアルバは視線を交わし、少し含羞みながらも、決意を籠めて頷いた。

あの日、本来の目的だった〝性欲を抑える〟彩紋をバルズのカラダに施してもらったあと、オレはふたりに訊いてみた。これからふたりはどうするつもりなのか、と。

「まずは、自分のこと――竜の特徴とかをよく知って、暴走しないようにコントロールできるようになったら、そうですね……このカラダを使って、誰かの役に立つようなことができないか、色々と試してみたいと思っています」

バルズは、少し考えてからそう言った。

アルバの方は特に興味がない様子で、

「ま、なんとでもなるさ。楽しく過ごせりゃアそれでいい」

腕を組んでふんぞり返り、そう嘯いた。

「そうか、だったら……もし、良ければだけど。一度オレたちの住んでる〝巨竜の世界〟に来てみないか」

そう言ってふたりの顔を見てみる。どうやらある程度は予期していたようで、驚いた様子はなく、無言で続きを待ってくれていた。

「いま、オレたちは巨竜の仲間を増やそうとしているんだ。オレやムルトと一緒に、世界中に恵みを巡らせる、仲間を。……どうかな？」

オレの提案に、ムルトも嬉しそうに同意する。

「オイラたちの世界は、一度は滅びる手前まで行っちゃったし、まだまだ足りないところも多いけど、仲間が増えればそれだけ良くなっていくって思うんだ。その精力と巨根、あとは筋肉があれば完璧さ」

それを聞いたバルズは、ものすごく真剣な顔でオレたちの話を検討してくれているようだった。

……なんというか、根がとことん真面目なんだろうな、と思う。そこがかれの良いところだし、アルバがなんだかんだ言いつつ気に掛ける理由でもあるんだろう。

「分かりました。俺に異存はありません」
　――そして、決めるときにはすっぱりと決められるのも、バルズの良い点だ。
「ただ、できればお願いをひとつだけ、聞いてくれませんか」
　そう言うと、かれはアルバの方を向く。
「アルバ。俺と……一緒に来て欲しい。頼む」
「は？　マジか。こちとら見ての通り、筋肉なんてちっともねえぜ？」
　普段は半目がちな目を丸くして、仔竜は少しだけわざとらしく、驚いてみせる。だが相手が真剣な表情を変えずにいるのを見ると、肩を竦（すく）める真似をしてため息を吐き、
「まア、オマエがどうしてもって言うなら？　その切なる願いを無碍（むげ）にゃできねえし、なア？……仕方ねえな、付き合ってやるさ」
　軽く、しかしはっきりと、そう言い切った。

　そんなわけで、オレたちが帰ることになったとき、バルズとアルバのふたりも、その道連れに加わったのだった。
「ああ、そうでした。旅館の女将より、皆様に言付けを預かっていたのです」
　と、ドーマは改まった顔つきで、しかし冗談めかした声色で告げる。
「皆様がお使いになったあとの温泉ですが……巨竜の精を堪能できるとあって、他のお客様にもすこぶる良い評判になったらしく。しばらくは旅館の新名物にさせていただきたい、とのことです。そしてまたお立ち寄りいただける機会があれば、その際もどうか竜精の湯を、と……」
「はは……さすがはあの女将さん、ちゃっかりしてますね……」
　バルズはそんな風に言って苦笑いしていたが、ドーマは表情を崩さない。
「やはりあれは、何にも勝る絶景でしたから。ああ、思い出しただけでも胸が高鳴ります」

いかにも胡散臭(うさんくさ)げな口ぶりなのに、なぜだかその底には、純粋で惜しみない称讃の気持ちがあると確かに感じられた。……かれのそういうところが好きだな、とオレは思う。
　巨竜(オレ)たちという存在を、ありのままに認め、愛してくれる。——それは、やはり嬉しい。

「そう、ですよね。とことんまで快楽を求めて、それを誰かに喜んでもらえるのなら、俺は……竜になってよかったと、心から思えます」
　しみじみとそう言うバルズに、アルバは顔を近付けて茶々を入れる。
「ま、オマエはまず性欲をちゃんとコントロールしてから、だろ？　あれだけドバドバ出たのも、あの淫紋のチカラだし。まだまだ精進しねえとなア？」
「確かにそうだな。あれを素でやれるくらいに精力を鍛えるのも悪くない。よし、戻ったら試してみようか、ムルト？」
「アニキって、たまーにさらっとコワいことを言うよね。……でも、気持ち良かったなあ……この後、みんなでさっそく特訓しちゃおうか！　ふへへ……」
　ムルトやアルバが言うとおり、やるべきことはこれからも、まだまだ山積みだ。それならいっそ、楽しめるようにしてしまえばいい。オレたちの能力は、そのためにある……のかもしれない。
「ドーマ。ここまでオレたちを案内してくれて、ありがとう。次は君とも旅をしたいな」
「ええ、こちらこそ。此度(こたび)の旅程が斯様(かよう)に素晴らしいものとなったのは、ひとえに皆様あってのことでしたから……私(わたくし)の名と魂に懸けて、必ず、またお会いしましょう」
　恭(うやうや)しく一礼してから、カラスはオレたちを包み込むように翼を拡げた。

「それでは、皆様——巨竜の世界へ、良い旅を」

# 幕間

　青い海、青い空。水平線の彼方（かなた）まで、見渡す限りずっとそれが続いている。
「久しぶりに来たけど、本当にいつ見ても良い景色だよね、アニキ！」
「……ああ、風も気持ちいいし、最高だ」
　相棒のはしゃぎ声を聞きながらそんな景色を眺めていられるのは、やっぱり幸せなことだと思う。――しかも今は、それだけじゃない。

「ふたりともこっちに来たばかりなのに、色々連れ回しちゃってごめんね」
「いや、むしろ嬉しいですよ。海に来るなんて、学生の時以来だろうし……」
「あー、ったくバルズ、オマエさア……そんな昔のこと言ってても萎えるだけだろ？　もっと楽しげな話をしろよ、なア？」
　振り向くムルトの視線の先には、黄金と真紅、二頭の竜が、いつも通りの掛け合いをしながらついて来ていた。目の前の眩（まぶ）しい光景に、つい瞼（まぶた）を瞬（しばた）かせながら、感嘆の表情を浮かべている。
「ってわけで、じゃん！　これがオイラたちの世界の、秘密が眠る場所――海だよ!!」

＊＊＊

　バルズとアルバをオレたちの世界に連れ帰ってから八日ほど、慣れない〝異世界〟でふたりがようやく落ち着いてきた頃に、オレとムルトはふたりを誘って、オレたちの町（クロキウム）からさほど遠くない海辺へ行くことにした。
　お互いのことをより良く知るのには、一緒の時間を過ごすのが一番だからね――とムルトも言っていたけど、その中でも〝海〟を目的地に決めたのには、もう一つの理由があった。

「この世界のこと、どこまでお話ししてたっけ。……生き物がみんな、命を産み育てるチカラを失ってしまった、って話はしたかな？」

ムルトの問いに、新しく仲間になったふたりは少し頼りなげに頷く。

「その失われた機能を補完するのが巨竜の奇跡、って事でしたよね」

「んで、その象徴が他ならぬ性器だ、と――」

バルズが真面目そうに聞いた内容を繰り返す側で、アルバは薄笑いを崩さないまま、股間に手を突っ込んでえっちな音を立てている。

「そうそう！　だからオイラたちは、聖なる遺骸の奇跡を絶やさないように、教会の教えをしっかり守って暮らしてきたんだよ。木々や獣、オイラたちが毎日食べてるお肉や野菜も、全ては奇跡の賜物だからね」

だけど、とムルトは指を掲げて言葉を続ける。

「例外って言うのかな？　海は特別だったんだ。――海からはお魚が獲れるんだよ。もちろん、不漁の時はあるし、逆もあるけれど、ずーっと昔のご先祖様の時代から今に至るまで、海の命が尽きたことはないんだってさ」

「ムルトと世界中を回っていたとき、不思議に思ったんだよ。オレたちが向かう前から、ずっと豊かだった。海は、だから、海の中には何かがあるんじゃないか……って」

いま聞いたことを整理するかのように、紅い仔竜は自分の頭を突きながら首を捻る。

「単純に考えりゃア、海の中にもその、巨竜の遺骸とやらが眠ってる、ってだけじゃねえの？」

「うん、オレもそう思って、ムルトに聞いてみたんだ。……でも、こんなに広い海の隅々まで命を行き渡らせるのは、いくら巨竜のチカラでも無理がある、って言われたっけ」

オレの発言に、ムルトも頷いて補足する。

「地上の教会だって、生命の恩寵が及ぶ範囲はそんなに遠くまでいかないいんだ。何十頭、いや何百頭もの巨竜の遺骸があれば話は別だけれど、もしもそんな歴史が——伝説があったのなら、教会にも何かしら伝わっているはず、だよね」

オイラも教会の伝承を全部知ってるわけじゃないけど、と前置きをしながら、ムルトは腕を広げて語る。

「……海について教会が知ってることなんて、ほとんどないんだ。『どうして魚が獲れるのか』って問いに答えるために、悩みに悩んで出したそれらしい仮説があるだけ」

「ふむふむ、で、その仮説ってのは？」

アルバが身を乗り出し、上目遣いで聞くので、オレもそれに応えようと記憶を辿る。

「海の底には、強大なチカラの眠るスポットがあるんじゃないか、っていう。名前が付いてたはずだけど、何だったたっけな」

「——〝龍宮〟だよ」

どこか真剣なムルトの声が空気を震わせる。いつもとは違うその響きに、オレたちは相槌を打つのも忘れ、しばらく続いた無言の間を波の音が洗い流していった。

「とまあ、そんな感じで、解かなきゃいけない謎はあるんだけど、それはそれとして……さ。ふたりをもっと知りたいってのも、本当なんだ。それでさ、せっかくみんなで海に来たんだし、今日は目一杯遊べれば良いなー、って！」

すぐにいつも通り、輝く笑顔に戻ったかれの提案に、オレたちは大きな歓声で応じた。

＊＊＊

「道具はまア、思い付いたやつをざっと持って来たが、何からヤる？　竜なりの楽しみ方とかあったりしねえの？」

バルズに背負わせた、見上げるほどに大きな荷物を指して、アルバはにやっと笑う。
そう言われたオレとムルトは、しかし、顔を見合わせるしかなかった。
「実を言うとね、海でどんな遊びができるのかとか……あんまり知らなくて」
ムルトは少しばつが悪そうに頭を掻く。
「オレも……向こうにいた頃には、海に連れて行ってもらった記憶はないし、動画の配信企画で観たことがあったくらい、かな」
そう口にすると、バルズとアルバがオレを見る目の色が心なしか変わった気がする。とはいえそれは一瞬のことで、気のせいだったかもしれない。なんにせよ、バルズは担いでいた荷物を降ろすと、汗を拭って口を開いた。
「だったら、みんなで遊べるようなアイデアを出しますよ。例えば海水浴とか、バーベキューとか。俺は砂の城を作ったりするのも好きですけど……」
「……オマエさア、それだとひとりで没頭してやたらデカいの作っちまうだろ？　ただでさえこんなデカブツのカラダになっちまったんだし。ビーチでできるスポーツも定番だけど、なにかやってみるか？」
そう言って、アルバは荷物の中身を広げる。シートにパラソル、浮き輪や波乗り用のボード、更にはビーチバレーに使うボールやネットまで持ってきていたようだ。――しかもそれが全部、アルバのお手製である。
この紅い仔竜は、やけに色々な分野の知識を持っている上に手先も器用なので、この数日で既にいくつか『あったら便利なモノ』を作っていたのだった。
「この球をどうするの？　投げたりとか？」
「両手で打ち上げ合うんですが……この中だとアルバはカラダが小さい分、ひとりだけ不利になっちゃいますね」

「それもそオだな。じゃ、とりあえず泳ぐか？」
「あー、それがさ……」
困ったように口籠もるムルトの後に続けて、オレはため息を吐きながら言った。
「――泳げなかったんだ」
ムルトも苦笑気味に頷く。
「ふたりとも、カラダがちっとも水に浮かんでくれなくて。もう全然ダメだー、ってなったんだよ。筋肉が重すぎたのかなあ……」
「結局、ふたりで水を掛け合って遊んだりしただけで先に進んだんだよな」
「あの時は、行かなきゃいけないところがまだまだあったしね」
オレたちがそう言っていると、バルズも少し恥ずかしげな様子で肩をすぼめて、おずおずと口を開く。
「あの……たぶんそれ、俺も同じです。温泉のトレーニング施設にプールもあったんですが、このカラダだと全然勝手が違って」

続いてアルバも、やっぱりそうかという風に、やけに偉そうに腕を組んで頷いた。
「よオく分かった。つまり、みんなカナヅチってこったな！」
「え、アルバも？」
「こっちゃアこのサイズだし、足が付かねえだろ。無理はしねえことにしてんだよ」
そのためにわざわざ浮き輪まで作ったんだぜ、とお手製のそれを掲げて、表情だけは無邪気に笑ってみせる。
「となると、将来海の中を調べることになったとしても、課題が山積みですね……」
バルズがいかにも悲観的な声でそう言うものだから、オレたちはつい噴き出してしまった。
「その辺りはおいおい考えていけば良いとして、アルバが泳げない理由は、カラダの大きさだけなのかな？」

「あれ、そういえば温泉にいた頃、好きな姿になる方法を見つけた、とか言ってませんでしたっけ？」

　バルズに水を向けられた仔竜は、億劫そうに手をひらひらさせながら答えた。

「あんときゃア温泉のチカラを利用してただけだからな。感覚くらいなら覚えてるけど、今となっちゃ……」

　かれはその手にぐっと念を籠めるような様子を見せる。――何も起こらない。

「な、不発だろ？　カラダを大きくしてみようとしたんだが……」

「……え、でも、ちょっと待って！」

　ムルトが発言を遮ったのと同じタイミングで、仔竜の手が急に一回りほど膨れ上がった。それは次第に空気が抜けるように萎んで、元通りの可愛らしいサイズに戻ったが、オレたちは確かにそれを目の当たりにした。

「できた、な」

　ぽつり、と自分でも信じられないという顔で紅い手を見つめながら、アルバが呟く。

「すっ――すごいよ、アルバ！　ドーマさんの魔法みたい！　これもあの温泉の効能なのかな。バルズは同じこと、できる？」

　ムルトの期待に満ちた眼差しで見つめられ、バルズは申し訳なさそうな表情で黄金色の頬を掻く。

「俺も、温泉のときの感覚を思い出してるんですが……俺にはできないみたいですね」

「つまりはアルバの特殊能力ってことだよな。物作りの才能もあるし、そこに変身のチカラも合わされば、色んなことができそうだ」

　オレたち外野がわいわいと盛り上がっているのを余所に、アルバは手の色や形を次々に変えては、その感触を確かめているようだった。

「あー、コツが掴めてきたかも。おいバルズ、ちィっとこっち来てみな」

「なんですか、もう――、ッ!?」

　呼ばれて顔を出したバルズの腕を問答無用で引っ掴むと、アルバは何やら怪しげな手つきで揉み始めた。……と、見ている間に、バルズの腕は少しずつ変貌し始める。

「ヘヘヘッ、思った通りだ。コレ、他人に使うこともできそうだぞ。まだ練習は必要だがな」

「わー、きれいな緑色になってる……」

「今ん所はせいぜいその程度だけど、そのうち全身を好きに弄れるようになるぜ、こりゃァ」

　アルバは変化させたバルズの手を触りながら、珍しく上機嫌な様子で笑っている。

「さっき、ドーマの名前が出ただろ。そう言やア例の淫紋を刻んでもらった後だったか、サシで話をしててさ、言われたんだよ。このカラダと魔力との親和性が高いとか、魔法を使うための回路か何かが発達してるっぽいとか……なんか胡散臭かったから話半分に聞いてたんだがね、あながちウソじゃァなかったみてえだ」

「アルバがそれを使いこなせるようになったら、みんな泳げる姿になれたりするかも!?」

「……そうか、確かに。水に浮かぶようにするとか、水中でも呼吸ができるようにするとか。そのチカラがあれば十分できそうだ」

「そしたらこの海も、もっと楽しめるね！」

　そう言いながらムルトは波打ち際へ向かって駆け出す。眩しい太陽に灼かれた砂浜を踏み、水飛沫を蹴散らして、鬱金色の巨竜は楽しげにカラダを弾ませている。オレもそれにつられて、ムルトの後を追いかけてみた。……熱い地面を踏んでいた足に、海水の冷たさが心地良い。

「オイラたち、カラダは大きくなったけどさ、一緒に遊ぶ楽しさは変わらないよね！　それにふたりも仲間が増えたから、これからどんどん楽しくなっていくよ！」

　笑顔で言うムルトに、オレは頷く。その未来はきっと、少し先のことが分かる巨竜のチカラがなかったとしても、見えていたに違いない。

＊＊＊

そんな感じでオレたちは、気が済むまで海で遊んだり、砂浜で寝そべったりして過ごした。
水平線の少し上には傾きかけた太陽が、ぎらぎらと眩しい光を投げかけている。とめどない波の音を聞きながら、オレたちは砂浜に立てたパラソル（アルバ特製、巨竜用特大サイズ）の下で休憩しているのだ。
ひんやり冷たい飲み物をそれぞれ飲みつつ、元の世界のこととか、温泉でふたりが起こした騒ぎだとかを笑いながら話していたが、話題はいつしか、アルバの発見した能力に戻った。
「実際、なんにでも変身できるんでしょうか？　それこそ魚にも？」
「根本にあるのはあの温泉の効能だと思うんだよなア。となると、ただの直感みてえなもんだが、多分〝竜〟って呼べる範囲限定だ。まア、何を竜と呼ぶかは解釈次第だろうけどな」
「海竜って呼べそうなものも、いくらでもあるでしょうしね。海の生き物モチーフとか……」
頭が良いふたりは、なんだか難しげな言葉を並べて話に没頭している。けれど最近はオレも雰囲気で会話の内容を掴めるようになってきた。要は慣れの問題なんだと思う。
それで、オレはふたりの会話に首を突っ込むことにした。
「じゃあ、オレたちが変身するならどんな姿になるかな。ムルトは……イルカとか？」
「大柄で愛嬌があるし、クジラかもしれません」
「大きさだけで言うならオマエの方が似合ってるかもな。なんせこの包容力だ。……あー、でも少し抜けてるあたり、ジンベイザメもアリかな」
そんな風にわいわい話していると、ムルトは異世界の海の生き物に俄然（がぜん）興味を掻き立てられたみたいだった。
「それってみんなが元いた世界の生き物なんだよね？　アニキはどんなのに似てるのかな？」

「キリッとした顔立ちなんかは、サメあたりが良いんじゃねえの？　じゃなきゃ、シャチか。顔の模様もそれっぽいしな」
　そう言ってアルバは砂浜に、これまでの話に出てきた生き物の姿形をさらりと描いてみせる。器用なかれは絵の腕前もかなり達者なようだ。それを見たムルトが盛んに褒めている。
「そう言うアルバは……むう、結構難しいな。バルズはどう思う？」
「――謎の深海魚とかじゃないですかね。あ、赤いからタコかも」
　仔竜に対するバルズの言葉は、いつもながら妙に辛辣だ。だがアルバの態度も一向にブレることはない。
「んだよ、ひでえなア。こんなにもキュートな仔竜を捕まえてさ？　もっと甘やかしてくれても良いんだぜ、なア？」
　そう言ってこれ見よがしに泣き真似をして見せるので、バルズは白けた顔でため息を吐く。
「そういうの自分で言ってて虚しくならないんですか？」
「ならないね。大体、何のためにこのボディを維持してると思ってんだ？　世間渡りの秘訣は いかにして労せず旨い汁を吸うか、だろォ？」
　ふんぞり返って鼻息を荒くする仔竜の言葉を軽く受け流して、バルズはオレにそっと耳打ちしてきた。
「ラクするための努力には全然手を抜かないんですよね、このヒト。サボりに命を懸けてるっていうか」
「うん、分かるよ。でもなんだかんだ面倒見も良いんだよな。これだけたくさんの道具を用意してくれたのも、すごくありがたい」
「聞こえてんぞ、おい」
　そんな風に他愛もないことを喋り合いながら、オレたちは持ってきたものを片付け、帰り支度を始めたのだった。

「あ〰〰、楽しかった！　今日はみんなと海に来れて、本当に良かったよ。バルズとムルトも良い時間を過ごせたかな？」
「そりゃもう、これ以上ないくらいでしたよ」
「なんせ新しいチカラまで見つけた、というか気付けたからな。収支は上々、こっちこそ礼を言わねえとバチが当たらア」

　やがて残ったのはここに来た時と同じ荷物と、砂浜でバルズが昼間に作っていた、見たことのないくらい巨大で精巧な砂のお城だけ。きっとそれもそのうち元の砂に戻るのだろう。
　アルバがぐっと伸びをして、振り向く。
「んで、今日のところはこれで終わりとして、明日からはどうすんだ？」
　昼間の力作を少しだけ名残惜しそうに見つつ、ひょいと荷物を担いで、バルズが答える。
「俺はこの世界のこと、もっと知らなきゃいけないと思うんで、とりあえずは勉強ですかね」
「クソ真面目……もとい、いい心掛けだな」
「アルバも付き合うんですからね？」
　笑顔の中に隠しきれない圧を籠めて黄金色の竜が迫るが、紅い仔竜はそれを上手くいなして、ひょいと空に羽ばたく。
「こっちゃアこっちで、やることがあんだよ。あのカラスに言われてたことを思い出してさア。……このチカラを磨くのに必要なのは場数だ、ってさ」
「まあ確かに、十分な鍛錬は必要でしょうね。俺で良ければ練習台くらいにはなりますよ」
　バルズにそう言われて、アルバはほんの一瞬、嬉しそうな笑みを浮かべかけ、すぐにいつもの表情に戻って言葉を続けた。
「んだよオ、やけに協力的だな、オマエ。これじゃアもう後に退けねえじゃんか」
　かったりいよなア、とぼやきつつ、その瞳はどこか不敵な輝きを宿している。なんにせよ、やりがいを感じてくれているなら、ありがたい。

「オレたちはもう一度、世界を巡ろうと思う。世界の謎を解くカギはまだありそうだし」
　オレがそう言うのに続けて、ムルトも両手をぐっと握って力説する。
「海の調査にはアルバのチカラが必要だけど、何でもかんでも頼り切りは良くないからね！　オイラたちはオイラたちなりに、できることをしていくよ」
「今まで行ったところでも、まだ恵みが足りてないところがあってさ。——奇跡を起こすのが、オレたちの仕事だからな」

　カラダから砂を払い、オレたちは腰を上げる。太陽はもうすぐ沈むところだ。水平線に沈む、神秘的なまでに美しいオレンジ色。……オレの大好きな、ムルトの瞳と同じ色。
　こんなに楽しい時間を過ごし、こんな景色を見ることができるなんて。こちらに来る前には想像したことさえなかった。
　けれどオレには、オレたちには、これからもきっとまだ知らない経験が待っているのだろう。

「しっかし、場数つってもどうしたもんか」
「修行のためなら、別の世界に行くのも良いんじゃない？　オイラたちも、世界を航る技……だっけ、あれが使えるようになったんだし！」
「おー、そりゃいい。まアあれこそ使いこなすにゃア練習が必要だが……とりあえずいろんなカラダの形や、魂の形？　なんか、そんなのに触れるのが良いんだとよ」
「そういうことならオレも手伝うよ。でも今は、とりあえず帰ろう。後のことはそれからだ」
「そうだね、ちょっとお腹も減ってきたし……それじゃあみんな、明日からもよろしくね！」

　そうしてオレたちは、町への帰り道を行く。
この先は……きっとまた別の、ものがたりだ。

（了）

# 付録


グラン
（グランディフェル・クロクス）
Grandifer Crocus
紺色の肌に緑っぽい瞳。
黒いタテガミが生えている。
好きなもの　ムルトとの旅。
自分を受け入れてくれる世界。
筋肉を使って働くこと。
苦手なもの　人間だった頃の周囲との関係。
口下手で、思ったことを言葉にするのが得意ではない。
成長後
イメージ曲？
→谷山浩子
「風のたてがみ」
付録：
キャラクター設定等
成長前

# ムルト
## （ムルティフェル・クルクマ）
## Multifer Curcuma

鬱金色の肌にオレンジの瞳。
タテガミはなく、いつもにこやか。

**好きなもの**

グランとの旅、
父親、故郷のみんな。
料理や細々した世話も好き。
臭いフェチの気あり。

**苦手なもの**

親しい相手との別離など
寂しいことは大の苦手。
あまり難しすぎることを
考えると頭が沸騰する。





# バルズ
## （バルズ・シジギオン）
Barz Syzygion

メタリックゴールドの肌に紅い瞳。
頭部はウサギっぽくも見える。

**好きなもの** トレーニングや、没頭できる作業が好き。凝り性なのでひとつのことに集中したい。

**苦手なもの** 才能があるのに努力しない人。辛い食べ物。自分の理解や常識を超える物事に対しては思考停止しがち。

お酒を飲んだら どうなる？
バルズ→量は飲めるけど情緒不安定になる。
アルバ→滅法強い。割と上機嫌になる。チーズとかのつまみが好き。



# アルバ
## （アルバ・ピメンタ）
Arbaa Pimenta

真紅の体に金色の瞳、薄青の模様。
全体的にちまっこい印象。

**好きなもの** サボりや後輩にちょっかいをかけるのが生き甲斐。食うのも飲むのもヤるのも好き。

**苦手なもの** 終わらない仕事。指示にただ従うこと。根本的に自分に自信がない。

皆様こんにちは、栗山 陸と申します。

この度は本書をお手に取りいただき、誠にありがとう
ございました。本書は 2018年・2019年に弊サークルで
発行した合同誌内の自原稿を、辰年という機会もあり
大幅に加筆・修正したものです。

昔から クロマさんの描く筋肉巨竜が大好きだったので、
今回は大盛りに盛って描いていただきました……!!
お楽しみ いただければ この上ない幸いです。

機会があれば またどこかでお会いしましょう!

令和6年 甲辰 大阪にて
栗山陸

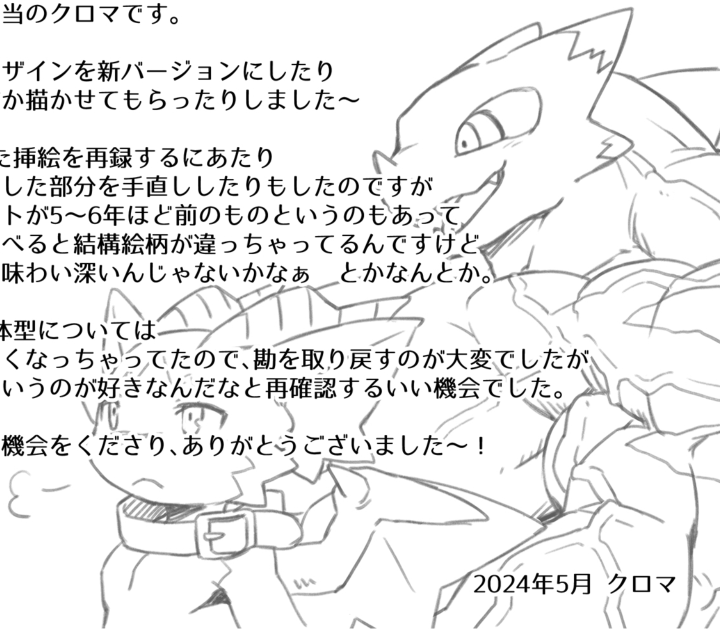
こんにちは！
挿絵兼キャラデザ担当のクロマです。

グランとムルトのデザインを新バージョンにしたり
新規のイラスト何枚か描かせてもらったりしました～

今回、過去に寄稿した挿絵を再録するにあたり
キャラデザを新しくした部分を手直ししたりもしたのですが
如何せん元のイラストが5～6年ほど前のものというのもあって
新規のイラストと比べると結構絵柄が違っちゃってるんですけど
そこらへんもいっそ味わい深いんじゃないかなぁ　とかなんとか。

あと、いわゆる巨竜体型については
近年あんまり描かなくなっちゃってたので、勘を取り戻すのが大変でしたが
やっぱり自分はこういうのが好きなんだなと再確認するいい機会でした。

今回もイラスト描く機会をくださり、ありがとうございました～！



2024年5月　クロマ

# 恵みを巡るものがたり

2024（令和6）年　5月 26日　pdf版 発行

作者・発行人　栗山 陸　©Riku Kuriyama 2024

イラストレーター　クロマ　©Kuroma 2024

発行サークル　ワリュウドウ

連絡先

@tigrr_

@tigrr.bsky.social

http://wa-ryu.net

mail@wa-ryu.net

ISDN278-4-872230-01-4 C0093

2784872230014

2920093010008

ISDN278-4-872230-01-4

C0093 ¥1000E



ワリュウドウ